

7281

椿説

# 弓張月

鎮西八郎為朝

鬼夜心卷

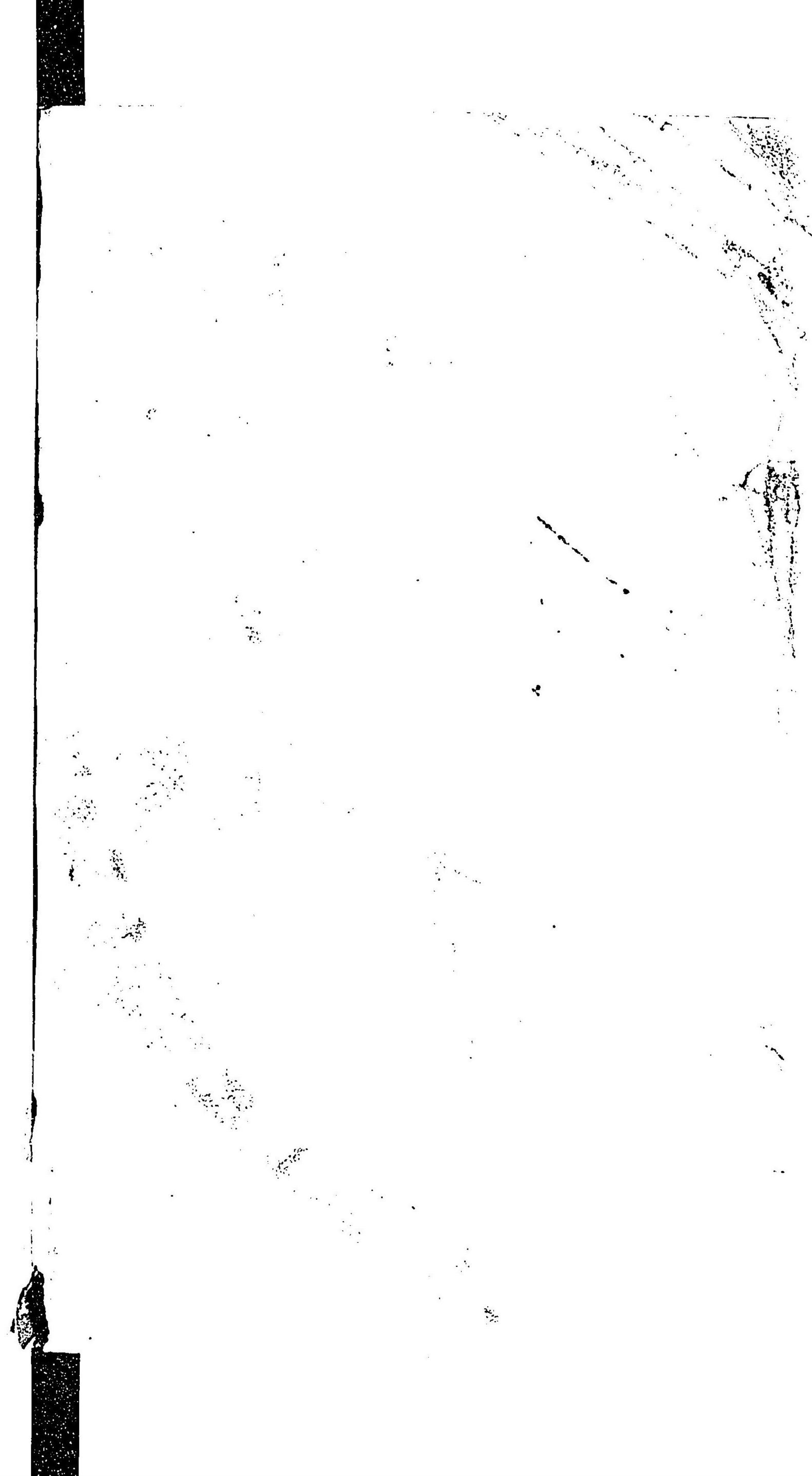
加藤由太郎速記  
真龍齋貞水講談

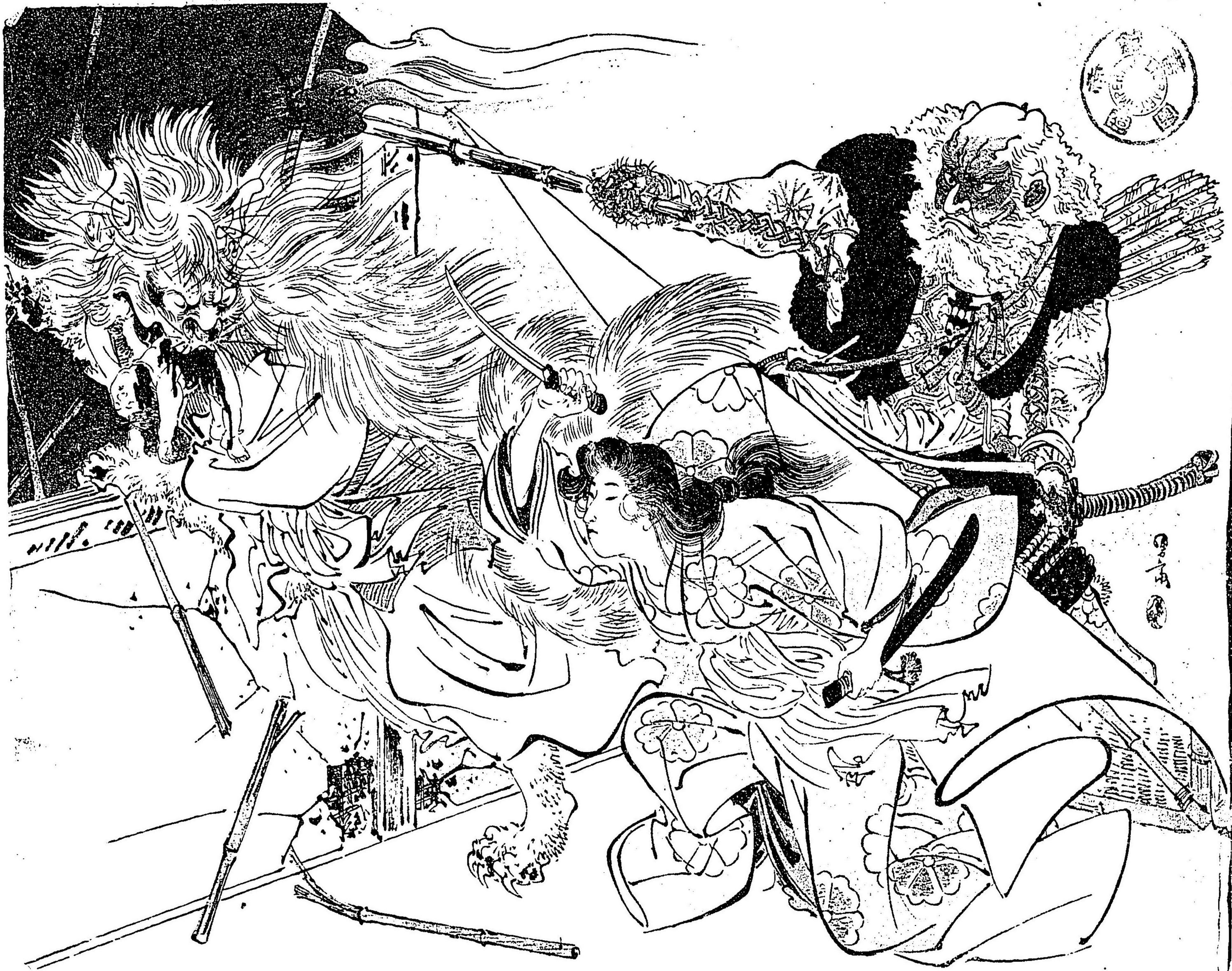
# 衛

行幾堂新三原

NO.







椿 説 弓 張 月

鎮西八  
郎為朝 椿 説 弓 張 月 鬼夜双之卷

真龍齋貞水 講演  
加藤由太郎 速記

第十三席

前巻には鎮西八郎為朝公が伊豆七嶋の内三宅嶋に於て海上百里  
南の方に當つて女護の嶋鬼ヶ嶋(唯今の八丈嶋)在る事を聞かれ嶋  
長が止むるも聞かず是非其嶋に渡らんと主従五人にて乗船致し  
た所までを講演致しましたが却説為朝公三宅嶋を段々と離れて  
南へくと青海原を走りました素より為朝公は永らく九州の果  
てに在る遊ばして船には能く馴れて居られますから自分身と  
磁石を取り 爲面掛ヨ一取掛ヨ一ツと お差圖をなさる去れば



朝爲郎八西鎮

四人の人々は身命を抛つて爰を先途と働く内に不思議なる哉僅か一夜の内に海上五六十里を走り夜がホノノと明け離れて向ふを見るも曾て見た事もなき大きな嶋が有ります抑々此嶋と云ふのは皆荒磯壘みにして沿岸には三十丈又は四十丈の岩がツいで登へて居る中に陸があらうとは思われぬ爲朝主従は持つて来た繩を岩角へ打付けまして手繰り上がり間の隔つた所には歩み板を渡し掛け杯として漸く水際に着き纏て陸に上がりました船は荒浪に揺りゆられて岩に打當るべき有様故船子共は大きに驚きまして色を失ひ甲若し此船を碎かれて仕舞つては何んに乗つて歸ることが出来やう」と心配の体爲朝笑つて爲船を浪打際へ置けばこそ浪にも揺られるのである巖にも碎かれるのであるイデヤ吾れの致すのを見よや」と両方の袖を振上げまして船を確と抱へつゝ、エイヤツと曳けば砂が船底のコロと

椿説弓張月

成つて直きに陸へ引上げることが出来た船子達は手を拍つて甲實に御曹子は鬼神とやら云ふのでございませう」と褒めるかゝて主従に於ては磯へ上つて此方那方と見るに木の皮を以て編みました草履が尻を海の方へ向けて何個ともなく並べてございますますから「ハ、ア是が世に云ふ女護の嶋とす所であつて若し難船でもして来た者があつて此草履を穿く時は其主己れが良人とすると聞傳へたが是れであらう」杯と云つて一行笑ひ動搖さながら尙ほ段々ど深く來ると見たことの無い草木が生茂つて妙な鳥が飛んで居ります其中に燕の大きさが鳩の如く腹は鳥よりも黒いのがビツ／＼と云ひながら飛んで行く爲アレ見よ所變れば品變るとか云ふが那の燕の大きさは何うだ彼れの飛行方々にこそ里はあらうイザ急げ一同長りました」と勇んで行くスルと果して向の森陰から煙りが高く立登つて人家が二三軒見へ

朝爲郎八西鏡

る夫れ家があるど云ひながら主従は走り寄つて見るに大きな百  
姓家でありますして推の丸木を柱として竹を編んで壁に變へてあ  
ります家には極めて卑いが床は甚だ高い爲朝は此家の様子をづく  
く見えて爲ア、一能く出来て居る家の卑きは浦風に倒され  
ぬ用心であつて床の高きは濕氣を避くるが爲であらう、テ壁を  
塗らぬは如何なる爲か……」と考ひたが何うも思ひ付かない、暫  
く表に立つて人の出づるを待つて居たが容易に出で来ない裏口  
へ廻つて中の様子を見ますと五六人の女が髪を長くして振下げ  
絹紐を以て結んで居る衣服はと云ふと襦袢の短かい着物を着て黒  
い絹を帯として機を織りながら妙な歌を唄つて居ります、  
きの竹でもはつちやうにませな、  
はつちやうしかたこはらつちやう、  
ア、サひさめよ、ア、サひさめ、

月張弓説椿

と濁みたる聲音で歌を機の手に合わして歌ふ聲さへ面白く、朝  
主従は思わすドツと笑ひました、機の子は其聲に始めて心付き見  
返りましたが忽ち大いに驚いて、アツと云ふと機を捨て、逃て行  
く皆逃げて行く中に一人の女子、年の頃十八九でもございませう  
か唯一人泰然として機を織ること始めの如く少しも恐るゝ景色  
がないから爲朝中にツカ、と入り、爲唯今外の者が皆逃げた  
るは見馴ぬ吾等の事故に恐れたるものならんが其方のみは少し  
も恐れづ機を織るは何事をや「スルと彼の女子は機を止め、爲  
朝に一禮をなし、女左様でございます、浮世に遠き嶋故に其名を  
何んど云ひますか、自分で自分の嶋は存じませぬ、唯男といふ者が  
居らざれば女證の嶋とか呼んで居ります、固より嶋に長なければ  
君として仕ゆる人もなく咲く花を見て春を知り紅葉するを秋と  
は知れど雪も降らず霜も霞かづ暖かなるが常なれば寒しと云ふ

朝爲郎八西鎮

こゝは白浪の寄る邊なき身を猜し玉はれ其故に冬は拾せ夏は單  
へ風波しければ雨の日に笠も被らず鏡といふものもございませ  
ぬ誠にお耻かしき身の上であります」と答へました爲朝は益  
々深く怪しみまして爲吾れ那れに居つて立開したるに外の女  
の物の云ひ振は少しも分らぶあつたが其方の答ふる所は大和言  
葉に露遠わづ汝は是れ人か神か將た又此嶋の者では無いか女  
ハイ其不審は伊道理でございます貴郎は大嶋どかへ流され玉  
ふた鎮西八郎爲朝公であります近頃誰いふとも無く十年此方  
云々の勇士伊豆の國大嶋といふ所へさすらい玉ひて深く嶋の者  
を憐れみ且つ鳥人も其お陰を蒙つて耕し漁る業に便宜を得たり  
然しなから彼人心様猛くして少しも從わざる者あれば忽ち射  
殺し玉ふと聞きました去れば唯今唄ひし歌にも絹の竹でもはつち  
やうにまかせななどははつちやうは此嶋の方言でございまして八郎

六

月張弓説椿

と申すことでございますすつちやうしかた弓……是ははつちや  
うどは八郎の弓にも矢にもし玉ふべし剛き八郎なりと申すこと  
でございます又ませなどは参らすること勿れといふ言葉でござ  
いましたひさめやは秘すべしといふ事でありませす倍て妾は  
元來此嶋に生れし故日本言葉は存じませんが昨夜怪しい夢のお  
告げがありまして明日の朝八郎爲朝此嶋へ渡り来て汝等其恵み  
を蒙るることあるべし然し言葉不通にては不便あらん夫はかう  
ぞと大和言葉を教へ玉ふこと最と懇ろなりしかが妾は夢心にも  
抑も身は抑も如何なる人なやと問ふに吾は伊勢の國渡會郡  
山田に久しく住む者にして今より吾を普婆明神と祀らば此嶋行  
末繁盛すべしと告げ玉ふを見て忽ち夢は覺めました覺めて後も  
教へられたる事は忘れせ其故外の者は逃げ隠れいたしましたが  
妾は爲朝君と猜して残り唯今此の如く日本言葉にてお話しをす

七

朝為郎八西鎮

る次第でございます」為朝聞いて大いに驚き、為ア、一不思議なこともあるものよ、如何にも吾は八郎為朝とす者、又汝が夢を見しと云ふは疑ひも無き天照太神にて在すならん、其道未だ開けぬと、爰も日本の内なればこそ斯る示現もあるならん、頼もし、有難や」と遙かに伊勢の方を拜しましたが戸の外に聞いて居りました供人等もアツとばかり驚いて感涙に咽びましてございます。倍て為朝に於ては再び彼の女に向ひ、為此嶋は絶て男なしと云へど、父なくして汝等の生れ出づる道理はあるまい、是はと云うた」と問われ、生れました成ほと男が無かつたら人間の生れる譯は無い、能く父無し兒を生んだ杯と云ひますが無いのでは無いが氏子が廣過ぎるから誰の子だか分らないと云ふ意味でございまして、お釋迦様だつて孔子様だつて父の無い子はございませぬ、女子はホ、と笑ひまして、女去ればでございます、決して男なくして子を生む

椿説弓張月

譯ではありませぬ、此北に勢嶋といふのがありまして、是はモウ男ばかり住つて居ります、此嶋の言傳へで男女一々に住む時は神の崇りありと稱して夫婦一つと集ることをせづ、一年に唯一度南風の吹く日があれば神の許ありと唱へて男の嶋人等此嶋に渡つては、かなき假寐の夢を結ぶにもし、男の子生れば、彼の嶋へ送り遣はし、女子が生れば、此嶋へ残します、是を聞誤つて伊豆邊では、女護の嶋の者は南風が吹けば孕むとかすさうで、又海邊に草履を並べて置くは、各々良人の恙なく、今年も風に便りして、疾く渡り來よかしと待つ心より、其人の草履を磯に出し置くこと、日本人の旅の留守に陰膳とやら据ゆるに等しく、皆此嶋の習はしでございます、と事も詳らかに語りましたから、為朝膝をハツタと打つて、為實に人の噂も一蓋には捨つべからず、今此女子が説く所と世に語り傳へたるを當らざれども、遠からず、ア、一人は様々



朝爲郎八西鎮

の世を經るものかな都會繁化の地に生れたる者は耕さずして喰  
ひ織らづして着少しも田舎人の辛苦を思はず斯る果報のありな  
がら尙驕りに耽りて足らざるを恨み執念く貪つて飽くことを知  
らぬは實勿体なき事にてあるワへ吾れ伊豆の嶋々を歴覽いたし  
たが實に不惑なものよと思ひしに今此の嶋さへあり吾れ今彼等  
を教化して男女を一つに住まじ伊豆七嶋の内に加へれば後の世  
に益あるべしと思召したから殊更に言葉をして和けて深く憐れみ玉  
ひしましたから先きに逃げたる嶋女等も此事を聞いて漸く安堵い  
たしました大きに喜び立歸つて來た甲ヤア中も來よ乙てこ  
も來よ丙ぐすも來よと呼びながらズと爲朝を取巻きまし  
た中に氣の利いたのは島へ行つて階子を掛けて蒞子の實を打落  
す虚言を吐け蒞子の木に階子を掛ける奴があるものかと思召し  
ませうが全体暖國だから六七尺位ひに長く成つて居ります其蒞

椿説弓張月

子の實だの藝芸だの大根だの云ふ品々を持つて來て煮たり焼  
いたりして爲朝主従を饗應しました所が何れを喰べても旨い爲  
朝は聞くこと喰べる物が珍らしく再び一番最初言葉を替はした  
日本語に通じたる女子に向つて色々の事を問ひ始めました是は  
男嶋の三郎といふ者の惣領娘で此嶋では長女と申します爲其  
方の名は六ヶ敷き名ならずや男の嶋の東七郎三郎の長女と云ふ  
は何ういふ譯かと問へば長女に打笑んで斯ふいふことを答へま  
した

男の嶋とは徐福に捨てられたる男の童等が子孫の住む嶋の事  
を云ふ

た ら 二 男 の 事

是等は都の言葉と驚く似て居ります

朝爲郎八西鎮

あ	く	ヒ	ぐ	て	な	に	く	は	ろ	こ	し	さ
つ	す	い			よ	よ	ら	つ	く	ら	ら	つ
わ	し	ろ	す	こ	か	こ	う	ち	ら	う	う	ち
.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....
(秘	(六	(五	(四	(三	(二	(長	(九	(八	(六	(五	(四	(三
藏	女	女	女	女	女	女	男	男	男	男	男	男
娘	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の
の	事	事	事	事	事	事	事	事	事	事	事	事
事	事	事	事	事	事	事	事	事	事	事	事	事

月張弓説椿

の	其	て	う	へ	や	へ	こ	し	し	め	つ	ぬ
と	他	ら	な	た			ま	げ	よ	な	く	し
す	色	ら	る	か	は	ら	が	た	け	だ	み	玉
し	々	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....
て	々	(蔵	(泣	(脊	(岩	(衣	(鉞	(お	(桶	(涙	(足	(土
固	の	の	の	中	谷	服	の	尻	の	の	の	坊
より	言	事	事	の	の	の	の	の	の	の	の	の
神	葉	事	事	事	事	事	事	事	事	事	事	事
の	を	も	も	も	も	も	も	も	も	も	も	も
如	事	細	細	細	細	細	細	細	細	細	細	細
さ	も	か	か	か	か	か	か	か	か	か	か	か
為	も	に	に	に	に	に	に	に	に	に	に	に
朝	も	教	教	教	教	教	教	教	教	教	教	教
の	も	へ	へ	へ	へ	へ	へ	へ	へ	へ	へ	へ
事	も	た	た	た	た	た	た	た	た	た	た	た
故	も	か	か	か	か	か	か	か	か	か	か	か
忽	も	ら	ら	ら	ら	ら	ら	ら	ら	ら	ら	ら
ち	も	イ	イ	イ	イ	イ	イ	イ	イ	イ	イ	イ
嶋	も	ヤ	ヤ	ヤ	ヤ	ヤ	ヤ	ヤ	ヤ	ヤ	ヤ	ヤ
の	も	爲	爲	爲	爲	爲	爲	爲	爲	爲	爲	爲
言	も	朝	朝	朝	朝	朝	朝	朝	朝	朝	朝	朝
葉	も	喜	喜	喜	喜	喜	喜	喜	喜	喜	喜	喜
を	も	ん	ん	ん	ん	ん	ん	ん	ん	ん	ん	ん
教	も	だ	だ	だ	だ	だ	だ	だ	だ	だ	だ	だ
は	も	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の
り	も	何	何	何	何	何	何	何	何	何	何	何
ま	も	ん	ん	ん	ん	ん	ん	ん	ん	ん	ん	ん

朝爲郎八西鎮

して夫を殘らき覺へて仕舞つて是からは嶋の言葉をして一同の  
者に彼是れと教へましたから皆涙を流して喜んで居るさて爲朝  
は其翌日嶋の者に案内をさして嶋の内を殘らづ巡檢を終つたが  
此日は好いなぎでございまして伊豆の山々駿河の富士山偕ては  
伊勢志摩の高山はズーと見へます爲朝思はず懐舊の涙に暮れて  
居りましたが又翻へつて彼等の織るべき機を見るに蠶を飼つて  
絹を作り夫を藍を以て染めますが大概は黄色と樺色と黒と此三  
ツで機織の方と云ひ蠶の飼ひ方色の染め方は實に斯る嶋に似氣  
なき立派なもの織上げた其立派なる事と云ふものは實に天下無  
類でございまして是は其筈でございす何故かと云ふと斯ふい  
ふ嶋國だから別段貢ぐべき國もなく賣るべき所もなく自分  
の良人と定めぬ男に男の嶋へ送つて着せ又子に着せ自分が着る  
の外に用ひないのてございすから所謂商賣氣が無いから品物

椿説弓張月

が立派であります夫や是れやを見素つて爲朝は爲是は男の嶋  
人を一緒に住はせたら耕作漁業も彌々開けやうし双方の嶋の  
爲であるが……」と思召した由つて夫となく是等の事を説示し  
玉ふに三郎の長女ばかりは成ほどと思つた様子であるが其外の  
者に至つては海神の崇りありと云つて頑として應じません爰に  
於て爲朝は考へて年を取つてベラ〜饒舌る女を招へて長女の  
ことを問ひ玉ふに御の女の母は去年病死をして父は男の島に居  
れど其身に未だ良人はございませぬと云ふ爲朝盡く〜長女  
の様子を見るに普通の女子には似もやらす餘程剛い所がござい  
ますから一日長女にお向ひ遊ばして爲〜コリヤ長女吾れ男の嶋  
人を此方の嶋に分ち此方の女子を男の嶋に分ちて住はせたく思  
へど嶋の女等愚かにして海神の崇りありと恐れ居れば話しには  
成らず吾が思ふに決して海神などの崇りあるべきものに非ず其方

朝爲郎八西鎮

は未だ良人なしと聞く吾れ色を好むにはあらねど世の爲人の爲  
なれば姑く爰にありて汝を妻とし假に妹春の契りを結ばん然ら  
ば嶋の女等其崇りなきを知らば今までの迷ひを改むる事もある  
べく夫婦の者は皆一ツと集らんと思ふ其方は如何思ふぞや仰  
せの時長女に於ては女道は有難き仰せを蒙るものかな世の  
爲人の爲を思召して賤き妻が身を假にも近く召使ひ下さるとの  
仰せ此上もなき有難きことではありまするが、汚し奉らんと  
は如何にも恐れ多くありまする」と回答た爲朝は終に其の長女  
を妻として一年餘り嶋に居る内其の年の暮れに長女は男の兒を  
産んだ而も双子でございます爲朝といふ方もなか、達者者で  
行く先き、で子供を拵へますソコテ其兒に太郎九次郎九と云  
ふ名を附けましたることにて母の手を以て養ふ内に追々と肥立  
つて來る嶋の女達に於ては此の有様を見て始めて自分達の愚を

月張弓説椿

悟りましたして今までは男女が同じ嶋に住む時は海神の崇りがある  
とのみ思つて居たが全く虚のことであつたかど可憎長き年月を  
夫戀しどのみ思ひ居りたる愚を悟り皆男女一つに住うやうに成  
りました爲朝は此の休を見まして先づ是れで好しと安心をして  
大嶋へ歸るべき時節を圖つて居る内に嶋人皆な爲朝の勇を慕ひ  
恰も慈母に赤子の懐くが如くであります其嶋人の内の一人七郎  
三郎と云ふ者を自分家の來に遊ばした是れが誠心に忠義者爲  
借て今日改めて其方に申渡すことがある吾れ此の嶋へ渡つてか  
ら昨日今日と思ひの外ハヤ一年の月日を過ぎた去れば近きに  
大嶋へ立歸らんと思ふ子供達は其の方親子に任する程に宜しく  
養育の程頼み入る、聞くより長女は忽ち差俯向いて長君大嶋  
に歸り玉われば又何時の折にか此嶋にお出で遊ばす事や若し世を  
仰り玉ふあれば據ろなければ二人の和子の内を一人は伴ひ玉は

朝爲郎八西鎮

れかし 爲イヤ 其方や子供を伴なはぬと云ふは世を憚かる  
のみならず本妻白縫と云ひしもの保元の兵乱に於て筑紫に於て  
討死せしと聞きし後には再び女を娶るべき心も無く……とは云  
ひながら大嶋なる能良江が信々しきに黙し難くて既に三人の子  
を産んだ今又た此所の嶋の者等の迷ひを解かん其爲に其方を側  
女となしたるも皆假初の縁ならずや然るを此度其方共を連れ返  
らばアレ見よ爲朝は色に溺れ色を好み又も子供を拵へて立歸つ  
て參つたと聞ゆも知らず舌を罵るに相違ない斯くては民の心  
をも失ふを以て子供も残し置きたく思ふ 長は尤もであります  
と長女は唯涙ばかり其時新たに家來と成りました七郎三郎が傍  
らよりすすには 七下郎の私共が口を出す難じやアございませ  
んが、後曹子の仰せられる所實には尤も然しなから君久しく大嶋  
に在はしきして嶋人從ひ願くとは云ひながら素とく三代相恩

月張弓説椿

の在家來といふんでございませんから留守中に若し事が出来  
れば皆んな自分の都合の好方へ逃げませう其故一度は歸嶋と  
そ然るべく譬ひ長女と稚君は残り置き玉ふとも大丈夫でござり  
ますれば私か若君に代つて何所までもお供を仕りませうと云  
へば爲朝莞爾笑み玉ひ 爲其の言葉は尤もながら其方を大嶋へ  
連れて歸らば長女が彌々心細く思ふであらう 七イエ 左様  
なことはございません長女が従弟女の夫四男五郎は心様誠ある  
ものでございます彼れ夫婦いま此嶋にあるからは稚君の能き後  
見でございます何事も私にお任せ遊ばして下さいましと自分  
から四男五郎夫婦を招いて右の次第を物語りましたから夫婦に  
於ては一識にも及ばず承知仕りました「は曹子、心易く思召さ  
れよ私共夫婦が一命に替へても長女と共に若君を守り育て參ら  
すれば願ては此の嶋の主人と仰ぎ參らすやうに致しませう」と

承知した、爲朝は彼等が深切なるに安心して再び辭み玉はず、遂に七郎三郎を召連れて行く事に定めましたが何うも彼の名が餘りに諒くて七郎三郎なんと呼び憎くない、ソコで名を鬼夜刀と賜はりました是れは其の顔の鬼に似て居る爲でけうが斯ふいふお話しがありました、亞非利加といふ國の人は愚直にして忠義の性質であるから外の國人が顔の怖いのも構わず金を出して忠義の性質でれて往つて召使ひにする、當今はマナ奴隷賣買廢止といふことに成つたさうで、グスが去れば爲朝も七郎三郎の面貌ち醜きを嫌ひ玉はず其の心様の八丁礮にも劣らざるを愛して寵愛殊の外に厚く名前までも鬼夜刀と賜はつたから嶋人等も是れを名譽ある事に考へました、借て是より爲朝愈々大嶋に立歸り又々事件出來に及ぶの講談……

第十四席

長女稚君が良人や父に別れを惜み、又た嶋人が名殘を爲朝に惜むは勿論のお話しであるが、是れは諒く成るから略してお看客さまの推察に任して置きます、ソコで八郎爲朝は彌々女護の嶋を船に出致しました、此の嶋こそ後に八郎嶋、夫が段々と訛つて八丈嶋と成つた、世の中の變化は實に恐ろしいものでありまして、右八丈嶋の西方三里ばかりの所に小さな嶋が一ツある、長女は餘りの別れを惜んで太郎九次郎九を抱いて小船に乗つて四郎五郎が棹を差して此の嶋まで送つて参りました、爲朝も暫く彼の嶋に船を寄せ流石に長女の心を押量つて彼れを慰めん其の爲に折しも岩が根に生出でたる卯木を手折つて地上に押し、爲吾れ若し再び此所に來つて其方等に逢ふ日あらば此の卯木必づ根附くべし

朝爲郎八西鎮

と仰せられた、果して是れは後に根が附きました其故に其の嶋を  
未だに卯木嶋と呼び又た此嶋は君が再び来よかしと祝せしを以  
て來嶋とも申しますさうで然る所が此の折しも沖の方より米俵  
の蓋に赤き幣を立て身の丈け僅かに一尺四五寸もあらんかと思  
はる、翁が其の上に乗つて波の間に、岸の方へ流れて來る、太  
郎九次郎九は諸共にワツと聲を揚げて泣出した、爲朝は彼の翁  
を信じて白眼へて爲朝、怪しき汝が風跡かな其方は水の怪物か  
地の怪物か疾く退れ、と叱り玉へば翁は大いに怖れたる有様  
にて俄の上平伏なし翁私に懸懸同雨の類ひに非ず即ち世に  
云ふ疱瘡神でござる近頃都の邊にあつて専ら疱瘡を流行したる  
が浪速の浦に送り出されて大洋に漂泊し事の序でに此嶋に立寄  
らんと存じまして参つたので、此嶋には未だ上つたことがござい  
ません今度が始めて、然し君が武威灼然として吾等魔道の者嶋

椿説弓張月

に上ること能はず何卒お許し下さいますやう、此後は私共の仲間  
にも觸れ示して此嶋へはモウ、二度と再び参りません」疱瘡  
神など、事の序でに嶋へ登られて堪つた譯のものヒやア無い、爲  
朝カラ、と笑つて爲朝、其方が聞及、疱瘡神か、予は爲朝で  
ある、此の嶋には我子供も居る夫ばかりで無く昔しより疱瘡を  
らぬ嶋人は俄かに是れを疾む時は非命の死をなす者多からん、汝  
等此の嶋へ再び來たること勿れ去らば送り得させん」と願つて  
船に引上げし途に大島へ連れて歸り此所から伊豆の國府へ送り  
ました、其故に八丈には未だに菊石の人はない唯今でも何うかす  
ると東京あたりでも「鎮西八郎爲朝御宿」と記した札が出て居  
ります、が疱瘡神だつて爲朝が然ふ何時まで生きて居ないといふ  
事位いは存じて居るでせう、夫は後ちのお話してございまして、信  
ても爲朝は何時まで斯くてあるべきで無いから長女や、四男五郎

等に別れを告げて再び船に乗り玉へば耐へ兼ねし長女は暫しと  
引く袖を引拂つたる鬼夜叉が心は鬼にあらねども此の場成行  
き止むを得ず途端に為朝の船は沖の方に長女の船は四男五郎が  
棹差して左右にバツと別れましたが順風に帆を上げて次第に大  
嶋の方に来る此の時神津御付の人々は為朝鬼ヶ嶋へ渡り玉ひて  
より久しく信通がございせんから黒潮に流され玉ふたる事か  
又は鬼共に食はれて仕舞つた事であるかと皆な惜み歎いて居り  
ましたが為朝は恙がなく彼の嶋へ押渡つて鬼の一人を召連れて  
歸り玉ふと聞きましたから且つ喜び且つ驚き衆くの男女磯端に  
迎ひ出で、舊に倍して厚く御遇をいたしました此の時為朝は三  
付嶋より道案内をいたしました二人の船子共には多くの物を取  
らして舊の嶋に残し止めた方此方の嶋々を五六日逗留致しまし  
て終に大嶋に立歸りました大嶋に於ては過ぐる春為朝嶋々を遊

覽せんとあつて荷めに船出でし玉ひてより一年有餘はハヤ経過  
いたしましたのが良人が歸つて参りませんから征良江の心配とい  
ふものは實に容易ならぬ位いなもの去れば利嶋新嶋まで人をや  
つて開合はせましたがお行術は知らぬと云ふ、モウ此頃では為丸  
朝稚嶋君も昔何事も能く分つて参りまして「父君は如何遊ばし  
たかやら……」と折節母上にお問ひなさるから實に征良江の胸  
の苦しさを知らぬ涙を流して居つて妻としては斯くまでも思ふ  
ものを舅の三郎太夫忠重に於ては却つて為朝の立歸らざるを幸  
ひとして、稍素の心が再發して我意に任かしての振舞三モウ為  
朝は歸つて来ない如何なる者を征良江の聲にしたものかど生死  
の報知もなきに、ハヤ聲定めを内々にして居ると云ふ、イヤ實に吾  
々共の聲に参る家の舅と同じ量見早速に伊豆の國府に参つて茂  
光に先非を詫び年の貢ぎは先年に倍して奉るべきを申立つたか



朝爲郎八西鎮

ら茂光の怒りも早速に解けて忠重の罪を許し 茂必ず以後の貢  
ぎを怠つては相成らんぞや」とある忠重喜んで大嶋に歸り法の  
如く嶋々に催促して茂光に貢ぎを入れたスルト四月の下旬のこ  
とで嶋人は西と東に驅巡つて騒いで居る何んの爲であるかと云  
ふと御曹子は女護の嶋に一年の餘在はせしが今度一人の鬼を連  
れてお歸りに成つたと云ふ噂さ笹良江は夢か現つかと打喜び子  
供等を招きて「父上は愈々お歸りに成る由である其方達も喜べ  
と人を忠重の館に走らし三人の和子を引連れて郎黨嶋人と諸共  
に磯邊近く立出でし那れか是れかと潛ぎ来る船を待ち受けたが  
サア斯う成ると長いもの待たるゝとも待つ身に成るな實に人を  
待つといふものは長いものでございませう此方は三郎太夫は爲朝  
が無事に歸り來たりと聞いて深く驚きましたのが爲朝此の嶋を出  
でゝから既に一年餘り一度として音信もなきに今突然に歸り來

月張弓説椿

たると云ふは心得難し恐らくは嶋人何にかを問遣ひて居ること  
ならん夫とも問遣ひたる事を知りて吾を驚かす事にてあるかと  
心中には驚いて居るのであるが上部は騒ぎたる景色も見せず沈  
着き拂つて居りました斯る所に其夕暮方に爲朝の船は着岸いた  
しましして剩さへ髪をヲドロくど振乱して居る鬼にも等しき者  
を召捕り立歸られました故に忠重は案に相違をいたし病氣  
と偽つて出で迎へず爲朝は既に船を上がり玉へば嶋人等是れを  
道の傍らに迎へて先づ其の恙がなきを祝しさて忠重の事は云ふ  
も更なり衆の人が敬慕して居りたる一伍一什を落ちもなく母に  
子供がすす如く告げましたから爲朝は女護の嶋に於て嶋人の迷  
ひを晴らさする爲に意外に歸りの遅く成りたることを申述べま  
して笹良江朝稚嶋君爲丸等を召連れて野嶋の館へ遣入られまし  
たサア和子達の喜びは云ふも更笹良江の喜びは何んに譬へんも

のもございませぬ爲朝の長女の事又た太郎九次郎九の事を正直  
と仰せられた上に鬼夜及を呼出だして爲是れが長女の父であ  
つて東の七郎三郎と云ふ者である此度名を變へさして鬼夜及と  
云ふ其方も見知つて置いてやつて呉れよと紹介はした大抵の  
女子なれば柳眉をギリと逆立つて「エ、人面白くも無い嶋  
へ行つて遅く成つたから何うしたのかと思つて朝晩神佛へ願を  
掛けて無事を祈つて居たに女護の嶋で浮氣をして居る杯とは呆  
れ返つた宿六、サア私には暇を下さい然んな浮氣な亭主は嫌やで  
す又たお前もお前七やア無いか人の亭主を寝取つた娘の親の癖  
にしやアがつて能くヲメ、と此所へ來やアがつた」とか何ん  
とか泣聲を立て大騒ぎの亂痴氣をやるんでゲスが流石は爲朝  
の妻君立派なものでございませぬ 篋夫れ……始めてお目に  
掛ります、妾が身の上には思ひ較ぶれば彼所に残つた長女とやらん

は定めて今頃は歎き悲んで居られる事でありませう、太郎九次郎  
丸も父にお目に掛りたく嘸むづかられて居ることならん」何ん  
と感心な婦人ではありませんか、私が良人の事を思つて居たに引  
較べて長女も今頃は歎いて居るだらうと云ふ、婦人は斯ふ行きた  
いものでございませぬ、鬼夜及は笹良江の心正しきに歎賞して涙を  
流し、其夜は君臣父子夫婦酒盛を開ひて各々に喜びました、此度  
嶋へ供をした二人の郎黨には色々の物を引出物として取らせ、其  
の夜は楽しく明かしまして、惜て翌日に成ると直ぐに爲朝嶋人等  
が訴へなを聴きまして先づ三郎太夫を召しました、彼は病氣  
と云つて参りませぬ再三呼ばれて漸くに出で來たりました、其の  
時爲朝は屹度三郎太夫を白眼へて爲借て此度爲朝が嶋々を巡  
りし事は子供等が爲にせんと云ふにも非ず、又た身の爲にせず、然  
るを汝吾が無さを幸ひとして放ま、に嶋人等を虐げ、誰が許しを

受けて茂光に貢物を入れたるや、其事を承はらん」と息巻荒く述べられたる時に、忠重心中冷笑ひ、忠重は御曹子の仰せども覺へず、某し嶋の長として争でか罪ある者を許し置くべきや、夫を慮けるとは何事、又た國府に交通いたせしは御曹子去年の春假初めに船出でし玉ふてより少しも生死の音信を聞かず、其生死も明らかならざるに此の和子達を養育ひ譯には参りませぬ幼しとはずしなから朝敵の餘類でござる私一個の力らを以て茂光を拒むことは相成らず是に由つて先づ茂光を吾が手に入れ和子達の首の飛ぶべきを察ぎて候」と懼かる景色もなく述べたる時に爲朝勃然として大いに怒り爲やをれ忠重營へ吾れ一年三ヶ月音信なきにもせよ早くも其の盟ひを忘れ生死も問ひ定めずして物皆な已れが儘にしたるは不忠なり去るを汝が非を掩はん爲に事を兩端に寄せて子供等の首をつなぎしと云ふ幼けなけれども彼等は

武士の子なり事に臨んで免れ難くば死するに不如死すべき命を助からんと阿女くど仇に誅らばは生きるども其の甲斐なし其方昨日病ひに托付けて出で迎へざりしは心に一物あることは吾れ疾くに推量致して居つた方一雀良江が父ならまば立所に首を刎ぬさすべけれども曲げて一命は預かり置くのである斯くても尙背くに於ては此度は許し難し如何に」と仰せあれば忠重は尙も屈する様子も無く爲朝に言葉返さんと云ふ有様でございますから爲此上は許し難しソレツ」と下知をし玉へば郎黨四五人物陰より走り出で忠重が左右の首を確と捉へて動かせず大きやかなる鉄を持つて十本の指をチヨキンと鉄み切り直ちに其家に追返した雀良江は事の様子を熟々見てツツとばかりに夫に泣伏し「ア、一情けなき此の有様斯くあるべしと思へばこそ度々父に諫めしなれど持つて生れた頑固の心……」とは云

ふもの、娘として何んで那れが見て居られう」と前後正躰あり  
ませぬ時に鬼夜叉進み出で、鬼恐れながら今忠重を懲らし玉  
はんとて彼の指を切らし玉ふは却つて邪念を増さしむるのみな  
らす僕し熱々として其体を察するに、彼れ御曹子を恨むこと既に深け  
れば必ず茂光に心を寄せん、今日よりは益々其念を高め候はん、以  
後は斯ること遊ばさぬこそ然るべくかど存じ候」と赤心面に現  
はれたの意見、爲弱は「能くこそ云はれたり、然し彼れ打棄て置か  
ば益々何事を仕出來さんも知るべからず、據るなき次第である」  
との仰せ、借て是より先き忠重は忽ち指なき人と成て左右の掌を  
紅いにし、恰かも枝なき珊瑚の如く苦痛を忍んで逃歸りましたが  
深く恨み罵るには、忠八郎、朝敵として此の嶋に流されたるを吾  
れ他事なく憐みたればこそ嶋々をも横領すれ、斯る高恩を受けな  
から勢ひに乗して非道の行ひをすとも若し吾れ無くば蝦なき水

母に等しく彼れ争でか今の身に成り得んや、ヨシ、此上は吾れ  
に考へあり」と密かに傷の癒ゆるを待ち折々其の隙きを伺ひま  
した、が用心堅固に致しまして船の出入り嚴重でございますから  
伊豆の國府へ参りたくも行くこと叶はず徒らに思ひを焦して引  
籠つて居りました、爲朝に於ては茂光が心持ちの武士に似氣なく  
忠重を威して密かに貢ぎを入れしめたるを憎み、如何にもして奴  
を一ツ驚かし呉れんと考へまして先づ其の手始めに夫とは無し  
に鬼夜叉丸を一式しほ妙に扮装せてやがて伊豆の國府に遣はし  
ました土地の人が驚いたの何んのこと云つて身の丈は七尺に餘  
つて面は夜叉の如く額に二本の角がニユー……と出て居ない  
が何んだか出て居るやうな心持ち、丁度惡鬼の白晝に横行するが  
如くでありますから國府の老若男女は皆ビツクリ爲て仕舞つて  
上を下へと逃げて行く此の時、忽ち國府中の評判と成つて「借

ては為朝は鬼ヶ嶋に至つて鬼を連れて立歸つたりと云ふが今正  
に鬼の居る所を見れば虚では無い、アナ恐ろしい事かなと云ふ事  
が茂光の耳にも這入つた、茂光も棄て置かれなから取押へや  
うとは思つたが如何なる神變不思議の曲者なるか分りませんか  
ら悉しに出て不覺を取つては成らんと手を附けませぬ、土地の  
者も門や戸を閉めて這入つて來られては大變と往來に出て居な  
いから、鬼夜及は心中可笑しくつて仕様が無いか、聽て大嶋に立歸  
つて斯様々々でございますと申し上げた、為朝は倍てこそ大いに  
笑つて在したが、是れが茂光の譏奏の二ツに相成つて居ると云ふ  
は又た是非もなき次第であります、借て明くれば嘉應二年の頃、為  
朝の嫡男為丸はハヤ九ツと成られました、ソコテ貴道吉日を撰ん  
で正月の廿二日に元服をさして嶋冠者為頼と名乗らし玉ふ、此の  
祝ひの爲に三日三夜の酒宴の席を開き、鬼夜及以下の郎黨はす

に及ばず、嶋の人民にまで酒肴を賜はりましたから皆大いに喜ん  
で源家の千秋万歳を壽きました、笹良江は已れの悴の祝事故先き  
に立つて喜ぶべきであるが、流石に父の身の上の案じられて半ば  
は喜び中ばは憂ひて居られました、今日まで再三父の罪を許し賜  
はれど、詮言を折を見てはしました、が為朝中々今度こそは許し玉  
はず、爲に笹良江も詮方盡きて此の喜びの席に出でず居た、為朝  
公も此の中で尙笹良江に心配を掛けて置くは氣の毒と思召して  
此のお目出度を幸ひ妻を召して、爲さて笹良江、今日三郎太夫の  
罪を許し遣はすに由つて左様思はれるやうに………「笹ハツ」と  
笹良江は飛立つ思ひ、笹夫れは有難ふ存じます、道に違へど父は  
父、此の仰せを承はりなば定めし喜びますとございませう、爲こ  
レ鬼夜及、其方忠重の屋敷に至り簡様、くすして三郎太夫を召連  
れ參るやうに………罪を許したる上は吾が舅長者の禮を以て彼を

扱はん君臣の分は君臣の分として又た男は男なり此席に三郎太夫の連ならぬは甚だ予の心苦しき次第である急げッ 鬼ハツト畏り奉る」と鬼夜乃は駕籠を連らしつゝ爲朝の館を立出でましたが暫く立つてボンヤリとして立歸つて来た 鬼唯今行つて参りました」見ると忠重は来ない、笹良江を膝を進ませ 笹コレ父は嘘今日の仰せを承はり喜びしならん跡から参ると言はれしか……」鬼イヤ、奥方飛んだことでございます 笹飛んだ事とは……」鬼忠重殿の屋敷に参りました所が一人の人影もございません、ハテ不思議と段々土地の者なごに聞きました所が昨夜濱邊の漁船が一隻不足を致して居りますとの事恐らくは其船で主従伊豆の國府へでも落ち延びられた事と思ひます 笹アッ……」と云つたが笹良江は思ふに違ふて忽ちに顔を打紅かめ手を額に加へて差俯向いて居りました故爲朝是れを聞いて小首を傾け 爲ハハア

一昨日より祝ひの酒宴の爲に濱邊を守れる士卒の怠りを見て出重四夫及び家來を連れて國府にと走しり、茂光船便を以て寄來たるも吾が弓矢此所にあり何程のことかあらん、棄て置けッ」と仰せられましたたが鬼夜乃に於ては頻りに眉を寄せました 鬼茂光の軍配は恐るゝやうな事はございませぬ、若し彼れ官軍を申請ひますれば東國の武士に茂光と共に討手に向ふべき勅命が下だるに相違ございませぬ、彼等勅命を受けて來たらば吾が君は何んど遊ばしますや、是れ由々しき大事ではございませぬ、か彼は多勢にして官軍若し防禦を忽るがせにして死耻を晒らすやうな事があつては成りませぬ、今より兎も角もして若君達の成行き程をも考へ玉へ、何卒然るべくは用意の程然るびう存じ奉る」爲朝點頭き玉ひ 爲ヲ、汝が云ふ所甚だ尤もに存づるが恩愛に溺れて女々しき振舞をなし今までの面目を失はんは予が

志しに非らず抑々爲朝保元の戦ひに謀りて用ひられずとは云  
ひながら唯一人生残つて惜からぬ命を斯く津嶋守となつて居  
るのは何の爲なるか如何にしても折を鏡て新院を盗み出だし參  
らせて再び旗を都に進めて彼君の世となし父が孤忠を全ふ  
せんと明暮れ思ひし甲斐もなく新院は崩御まし今宿願を  
果すよすがもなし去りながら茂光若し私しに寄せ來らば許すべ  
き非ず手に唾きして塵殺しになさん何んの手問暇の入るべ  
きや若し又た官軍の向ふとならば潔く腹かり切つて屍を此嶋に  
晒らし忠を黄泉に残すべし忠重嗚呼の白物なりと雖も笹良江が  
年來の真心は吾れ能く是れを存じて居る……サ、笹良江其方父と  
共に國府に在りたしとあらば今日限り暇を遣はす遠慮は要らぬ  
速かに立去れよ」笹良江はワツとばかりに夫へ平伏し「通は思  
ひも寄らざる君の仰せを承はりますものかな古への人の言の端

にも君が一夜の情けには妾が百年の命を惜まずと聞く、さうせ疑  
ひを解くことの妾の身の上ではございませうか、此上は安は死して  
君に操を立てませう」と云ふより早く懐劍ギラリと引抜き玉ひ  
既に、斯くよと見へたる時に三人の兒達は其手に絶がり「母ア  
様待つて……」とワツと泣く吾が兒に止められ笹良江も死ぬに  
も死なれど子供の手を取りワツと一ト聲高く泣き沈みました、是れ  
等の所は劇場で致しますとお客様にハンケチの必用を感じさせ  
大向ふより「ヤア泣きます」と聲の掛る所でゲスが講談では夫  
れ程に参りませぬ、役者も、チヨボも、黒ン坊も、拍子木も皆一人で勤  
めるのでございませうから其の割りには骨が折れます、借て鬼夜及  
は笹良江の傍に進み由つて其の刀を奪ひ取つて鞘に納め、鬼恐  
れながら姫物にや狂ひ玉ひしか、唯今君の仰せにも姫が赤誠は能  
く知つて居るとの仰せ然らば強いて離別せんと仰せあるには候

はす此場にて自害を遊ばさば却つて殿を恨むに似て宜しから  
過ち遊ばしては成りませぬ」と諫められ今に成つては死ぬにも  
死なれずと唯モッ前後正体なくばかりでございます、借て鬼夜  
の云ふ如く茂光の憎しみを受けたばかりに爲朝公、愈々危難其身  
に迫つて参ると云ふ、爲朝公が必死の勇力を顯はすのお話し。

第十五席

さても鬼夜及に於ては何うも討手の一條が氣に成つて汗ひませ  
んから獨り那方此方を奔走致しまして馬の馳場物の差引き、活路  
の便宜等に至りますまでを能く見届けまして、須破と云ふ時  
には爲朝父子のお供をいたして此嶋まで落ち延びやうと目を  
付けたのは戸ヶ嶋と云ふ嶋でございます、此嶋は八丈の方へ近く  
大嶋と八丈の中央位ひにある一ツの嶋で、是れへ先づ落付くこと

にして人にも知らせず、大きな船を一隻借り込んで心掛ひを致し  
て居りました、別に此の鬼夜及、智恵がある、と云ふ譯じやア無いが  
唯モッ忠義一方から斯ふ云ふ考ひが出るので、シテ見ると智のあ  
る利口な悪い家來を養ふよりは、少々智恵は二の次ぎでも誠忠無  
二の人間のの方が主人の爲には成りますもので、其内に段々と月日  
も過ぎまして四月の上旬と成りましたが、別段茂光忠重の方から  
討手の來る様子も無い陽氣は誠に長閑に成つて來たから今日爲  
朝岡田の磯と云ふ所へ参られ漁師に經の網を曳かして一日を樂  
しみ、日の暮に成つて帰館スルト鬼夜及が夫へ出て参りまして  
鬼借て吾が君、爲何んじや、鬼私し先刻此の向ふの磯端をブラ  
致して居りまして怪しき一人の男へ捕へましてござる、爲  
ホ、ウ怪しき男とは何んな男じや、鬼去ればでござる、身には錢  
笠を纏へど肌には若込みを着して居る、這は必ず茂光が間者にも



やと存じまして矢庭に搦め取つて屋敷に連れ歸り色々責めま  
したが皆暮れ實を吐きません唯御曹子に傍目に掛らば明らか  
成りますと云つて居りますが如何取斗つて宜しうございませう  
や爲ヲ、左様か去らば尋問所へ相廻はせ」と云ひ置いて傍自  
分は奥へ這入り衣服を着替へ頓て尋問所の端近くに出で玉へば  
鬼夜乃は自ら彼の曲者の繩を取つて白洲へ押据へましてござい  
ます燈火の光りに曲者を見玉ふに身の丈は六尺に近く双の眼  
は鈴を掛けたる如く碧青々として腰篋を着け成る程肌には着込  
みを着て居ります爲朝は暫く白眼へて居られたが爲「コリヤ  
其方は茂光の喋者か何故ヲメ」は生捕られたるや」其の時曲  
者少しも恐るゝ景色なく顔を上げ「イヤ」決して去る忍びの者  
にはござらぬ密かに申上げたき事あつて参りし者仰ぎ願くば傍  
らなる人々を退け玉はれ」爲朝は彌々不審ながらも「コリヤ一

同遠慮いたせ「ハッ」と鬼夜乃以下の郎黨は傍前を退きました  
四方の襖を明け放つて仕舞つて立聞きの無いやうにして爲是  
なら好からう疾く何事なるか申立てよ男ハッ早速は人拂ひ下  
され難有き仕合はせ何を隠さん某しは下野國足利義康の郎黨に  
て梁田二郎時員と申す者でございます主君義康の命を受けて一  
大事を告げ申さん爲に参りました然し私が申上ぐるに不及義康  
の書翰秘めて某しの襟の内であれば自ら開いては覽下されたし  
と申し上げた爲朝は實に思ひも掛けぬ一言でございまして頓て  
自ら時員の傍らに進み玉ひ其の襟を解けば果せる哉中から一封  
の手紙が出ました封押切つて爲朝が讀下し玉へば  
義康荷くも清和の流れを汲みて共に八幡殿の孫なり諺に狐養  
らるゝ時は鬼これ悲むとは禍の族に及ぶを恐るればなり保  
元平治の擾乱に嫡家の歴々過半命を落す豈痛まざらんや然る

に今幸ひにして足下唯一人存生へ給へり灰田工藤狩野介茂光  
近頃上落して譏奏す其事を聞くに彼れすて曰く爲朝流人とし  
て威風逞ましく茂光が所領の嶋々を掠め取つて年の貢ぎを止  
め剩さへ鬼ヶ嶋に往來し鬼童を奴僕として伊豆の國府に來た  
しいたく國地の老若を愕かして娛みとす上天子を恐れば下万  
民を憐れまて成敗を放にして嶋長忠重を罪し其爪を放ち其の髮  
を抜く暴惡絶て比ふべきものなし伏願くば爲朝征伐の宣旨を  
なし下され茂光に數多の官軍を屬け玉はば日ならず彼の嶋に  
押渡つて爲朝を誅伐し民の士族を救ひ候べしと聞へ上げしか  
ば主上驚きましゝて茂光がやす旨を語なはせ玉ひ伊豆の國  
人北條以下に仰せて茂光と共に軍を起し玉ふとぞかゝれば官  
軍近きに其の嶋に發向せんか足下百發百中の剛弓万夫不當の  
勇士たりとも大塚の將に斃れんとする時能く一木の支ふべき

に非すつひには弓折れ勢ひ盡きて父子東海の水鬼となりてん  
爰に義康年の齡ひ既に四十にあまれども未だ一子を擧げず若  
し吾が不幸を憐れみて子息一人を玉はらば義康養つて子とす  
べし是れ一ツには足下の武勇を承継いで足利の武勇を起さ  
し又一ツには足下の子孫斷絶に及ばざらしめん因て腹臣の郎  
黨梁田二郎時員を遣はし心中の機密を告げ自ら感て遅々し玉  
はば臍を嚙むとも其甲斐なからん倉卒の際具にせず請諸察  
嘉應二年四月日  
源 義 康  
大 嶋 八 郎 殿  
と書いてございました爲朝は始めつから終りまでを殘らず讀ん  
で巻き納め自ら時員の繩を解き仰せあるには爲委細相分つた  
保元平治の戦亂此の方世の中暫くことなきに似たれども人の心  
未だ穩かならず夫は刀を差して田を植へ女を兜を着て餉を作る

朝爲郎西鎮

折柄なれば、義康の使者ども知らず深く疑つて幸き目見せたるは  
吾が過ちなり許して呉れよ時恐れ入りました其の仰せ固より  
私に此位ひの事は覺悟の上にて参りました爲夫リヤ定めし然  
ふであつたらうが允るせ、借て今手紙にもある如く茂光が讒言に  
由つて討手を向けらるゝ事は兼て思ひ儲けたる所なれば今更に  
驚くに足らず其場合に及ばば稚なき子供は差殺し、後ろ容易くな  
し腹かッ切つて名を此嶋に止めんは生きて生き目を見るに優れ  
り云はあれ、義康一家の好誼を忘れず吾が子供を乞はるゝ事誠に  
予は辱けなく思ふ然し若し其の望みに應ずる時は、爲朝配人とし  
て恩愛に感溺し其の子を國地に遣はして人に養ひを頼みたりな  
んと死後に謂はれんも口惜しかるべし、嫡男爲頼は近頃元服さし  
たるを世の人も能く是れを知らん次男朝雅は年僅かに七才なれ  
ども性來思慮あつて允にも劣らず是れをと思へと明白には贈り

椿説弓張月

難し所詮欲する所を天に任かし吾れ明日箇様々々に計ひて朝雅  
と棄つべければ其方伊豆下田の磯に居つて是れを拾へ然る時は  
吾れも子を借んで人に委ぬるに非せ義康も又た朝敵の子を養ふ  
に非す天より授け玉ふを受く是れ則ち義康の子なり若し不幸に  
して朝雅此の浦に至る事を待すば是れを天命なりと思へ、テ直ち  
に下野に立歸つて事の由を主君に告げよかし」と何事をか細々  
とさゝやき玉へば時員に於ては莞爾と笑ひ時ア、一君は蓋世  
の義士なり譬へ七七八里の海上を隔つるとも氏の御神正八幡の  
應に由つて朝雅君恙なく下田の浦に着き玉ふべし、某し若君を拾  
ひ取り奉らば千里峰を以て暗號とせん、百成の方に向つて煙り起  
らば若君は事故なく下野の着き玉ふとし召されよと答へま  
したから爲朝カラくと打笑ひ差副の鐵通しを取つて時員に渡  
し爲是は吾が秘藏の一ト口なり、其方是れを義康に参らせて證

朝為郎八西鎮

據とせよ今生にて好意を報ひたくとも死後護り守と成つて足利  
の家門あらしむべし後聞を憚れば返書に不及人に怪しまれさ  
る内に疾く急げ時ハッ然らばお別れす上げます」と其  
儘別れを告げまして元どの釣船に乗り十八里を漕いで下田の浦  
に若岸し朝まだきより狼煙の用意をして朝稚の音づれを今か  
と相待つて居りましてございます嘉應二年四月下旬嶋冠者爲  
頼は舍弟朝稚と共に大いなる紙鳶を作り玉ひましたが、やがれ鬼  
夜及を召連れて野嶋の館を立出で館の庭に於て是れを揚げんと  
兄弟風を待ち遠しげに心樂しく待つて居られた、凡て伊豆相摸が  
ら西の方三河に至るまで紙鳶を作る事は尤も巧みでございます  
花の形ちをしたり、奴風鳶だ、何んでも作る、夫れも東京でござい  
ますと春でございます、那方では五月頭が紙鳶の眞ッ盛りであ  
ります、然しながら大嶋の人々は未だ左様なものは存じませんか

椿説弓張月

ら昔々不思議な思ひをして是れを見やうと館の庭の堀の外に集  
まり待つて居ります、此時爲朝は昨夜梁田二郎時員を歸し玉ひま  
した、が少しも此事を佳良江にも鬼夜及にも仰しやらない、兼て朝  
稚を人知れず送り遣はすべし謀略を儲け置き玉ひましたから稚  
子たちが鬼夜及に彼のタコを引揚げさせんと致されたる時、自  
分も前の庭へ出で玉へば征良江も亦た嶋君を誘つて其の跡から  
出て参られた、借ても爲頼朝稚は父の來玉ふを見て禮義を正しくし  
なし、遂に近く参られたから爲朝ニコヤかに笑み玉ひ、爲吾が子  
供等借ても大きなる紙鳶を作り玉ひしものかな此の紙鳶と云ふ  
ものは昔し前漢の韓信が始めて作る所にして素と敵の城中を見  
んが爲の軍器なり、而はあん汝達が弄遊びにするにも毬打などよ  
りは勝れり斯く大きやかなる紙鳶にウナリ無くては物足らぬ心  
持ち吾に能き物を貸すに由つて是れを附けよ」と仰せられて腰

朝爲郎八西鎮

の間より一ツの笛を取出だして又仰せあるには 爲是れは昔し  
新羅三郎義光殿深く樂を好まれ豊原時元と云ふ人を師として學  
ばれたるが藝漸く熟して與許の曲を傳授するに當りて時元即ち  
此の笛を義光に送り抑々此笛樂人の唇を用ひず吹來る毎に當  
る時は自ら音を發して韻の吟するが如く是れ未曾有の物と雖も  
其方達幼なれば未だ今日まで見せざりし且く其の紙爲に附け  
て風箏にせよと云つて朝稚に渡した朝稚喜んで受取らんとす  
るに誤つて忽ちハタと地に落し歩石に打ち當てりアリヤと云ふ  
間に笛はサツと二ツに割れた朝稚は云ふも更なり一同アツと手  
に汗を握つたる時に爲朝は勃然として聲を振り立て 爲ヤヲレ  
朝稚汝性來輕忽にして事に慎まらず故に斯る誤ちを致すのである  
汝の如き痴者を養育まば行末親に耻を見せ家をも汚がす事に成  
らん其所退けつと云ひも敢へず刀の柄に手を掛け玉へば佳良

月張弓説椿

江鬼夜及遽て狼狽てこれを押し止め 篋其のは怒りは尤も和子  
の罪は輕からずとは申しながら僅かに七ツの小兒をば唯一管の  
笛の爲に命を絶たんと歎かはし狂げて許し玉へかしと言葉  
を盡して詫に及ぶ爲朝固より胸に一物あるからに頭を左右に打  
ち振つて 爲其方其の云ふこと邊へり 篋は吾が家の重器なりと  
て惜しむに足らぬと彼が父を輕んずるの罪は稚しとて此儘に止  
むべきや世の藝にも虎の子を養ひて憂ひを忘るゝと云ふことあ  
り彼れ幼きを以て愈々是れを許し難し去りながら汝等の説を聽  
かず此儘切りなば情けを知らぬ父とや云はん由つて目の前に刀  
の鞘となすことば止めて笛の代りに彼れを紙爲に括し付け風に  
任かして引揚げさし中空に至る時其麻繩を切つて走らすべし幸  
ひに沖行く船に落ち掛り伊豆の港へなと落つる時は九死の内は  
一生を得るのであるが不幸にして海中にも落ちば魚の餌に成ら

朝爲郎八西鎮

んのみ獅子は子を谷より突落して其剛柔を試み死すと雖も悔  
ひざるが如く勇士の子を棄つる又た斯の如きのみ其方遠決て再  
び諫めを容るゝ事勿れ」と其儘朝稚の襟髪を掻き掴み手づから  
紙幣に括し付け爲サ早く揚げよ」と仰しやつた爲願恐るゝ  
父の前に両手を突き爲斯くまで涉怒りの場合彼是れすは恐  
れ多きて限りなれと出づるにも入るにも兄弟三人にの昨日まで  
暮らせしに朝稚なくなり玉ひては明日より後ち成中々に私共が  
淋しうて成りませぬ何卒此段爲願をば充分に鞭打ち玉ひ朝稚を  
許して玉はれ」と流石は兄弟の情嶋君も諸共に嶋父君許して  
玉はれ」と共々に泣く笹良江は唯泣き沈み 笹子供が是れまで  
に謂はるゝは能擲のこと如何に猛きが武士の常なればとて情け  
なし地を走る獸物天飛ぶ鳥も子を思わぬはなきものを心強くも  
在するものかな……」と唯跡は只管口の内鬼夜及も鼻打かんで

月張弓説椿

鬼幼と老とは罪せずとか十五以下七十以上は何事も許せと云ふ  
聖人の教へを日頃子供衆に仰せ遊ばして居られながら斯ばかり  
の誤ちをし玉へばとて寒し暑しも漸くに知るや知らざる幼子を  
千尋の底に沈めんとは物にや狂ひ玉ひしか、イテ解き下さし奉ら  
ん」と走り寄るを爲朝押隔てゝ大いに怒り 爲吾れ十三歳の昔  
しより罪なき者を殺せし事なし所謂なき汝等が諫言無禮なり」  
と叱り除けまして自ら麻繩の端を取つて二三十歩引退がり十尺  
に餘る大ダマを最と輕々と引上げ玉へば折しも烈しき浦風の辰  
巳より吹く程に下田の海面差して雪井遙かに伸して行くを繩の  
限り繰り延ばしましたから天の河原に漕ぐ船が雲に入る鳥の翅  
かど見ゆるばかりに成りました那の紙幣の内にて朝稚は居る  
ことなれ思へば無常の風に絶ゆる今を限りの魂のぞと見上ぐ  
る笹良江朝稚等は涙にかすみて茫然と目さへ届かぬ歎きであり

ます、去れば今日の紙を物せん、来つた人々も此の有様に互ひに顔を見合はせて見るに見兼ね一人歸り二人歸り今は一人も居なく成つて仕舞ました、倍て爲朝は紙の糸の先きを赤松に繋ぎ止めて刀をスラリと抜き玉へば、篋ノウツ淺間しや……」

「アナ痛ましや」と聲諸共、後に撞と座してアツと泣く、暫く互ひに言葉もなく居たる時、酉戌の方に當つて、縁と閃き昇る時、員が合圖の狼煙、蒼空にへんばんたり、爲朝屹度見そなはして、莞爾とお笑ひ遊ばした時に、笹良、紅鬼夜、及頭を擡げて、笹鬼吾が君、梁田二郎時員と喋し合はし玉ひし、如く朝雅恙がなく、下田の浦に着き、嘸も満足でございませう、思ひの外の一言に、爲エーッ、倍ては汝等存じて居るのか、篋那れを知らず、に居られませうか、足利義康殿より密かに使者を以て、茂光が説奏に由り、身の上危き由を告げ知らせ、若君の内一人を乞受けて、養ひ參らせんと云ふ事は、鬼夜及と共に、木戸の外にて立ち聞いて、能く存じて居ります、今に妾に仰せがあるか、翌は知らし玉ふかと待て、少しも云ひ玉はず、左もなき笛を恭々しく、重代の名笛なりと、僞つて朝雅に碎かし、夫を落度にして、紙に括り附け、命運を神に任して、下田に赴かし

朝爲郎西鏡

五ふ疎略は世を憚り名を惜み玉ふは賢慮に出でたるものなれば  
少しも恨み奉るべき事ならねど然し君の御子なりとは云ひなが  
ら妾の腹に宿せし以上は恩愛は變らぬものを外々しく包み玉ふ  
侈心の内覺束なく夫がお恨みであります」と云ふ傍らより鬼夜  
及も臉しばたき鬼私しども兼て此事は知ると雖も絶て知  
らし玉はねば私の方でも黙つて居りましてございます殊更今日  
は嶋人が紙を掲げ玉ふを見んとお庭の表に集つて居りました  
から愈々知らず顔に振舞ひ譯もなく諫め奉りしは許し玉へ」と  
互ひに明かす主従の胸の内割符を合はする如くであります爲朝  
は感服して爲イヤ其恨みは去ることながら汝を疑ひて知らせ  
ざるには非ず十八里の海上を隔て朝稚を送り遣はすことなれ  
ば多くは此事失敗に終らん慰しに彼の浦に届かすして彼れ海  
の底に沈みなば吾が苦計も其の甲斐なく又た悲み却つて深から

月張弓説椿

んことを考へて偕ては知らせむに那の事を致したる心苦しき  
しきものは浮世の義理味氣なきものは武士の意地必ず恨んで吳  
れるなよどの仰せ是れも一理ある事にして前から此事を云つて  
朝稚が海の底へ沈んで仕舞つた日にやア尙歎きの種であります  
爲頼も嶋君も始めて其事を知つて安心は致しましたやうなもの  
、那れが親子兄弟今生の別かと思へば流石に悲しく皆しめり勝  
ちにて扣へました折しもあれ沖の方の錨俄かにバツと飛び散り  
幸鹿頭りに泣き出した爲朝屹度耳を立て笹良江鬼夜及を願み  
て爲ヤア汝等那れを見イ海面俄かに言葉未だ終らざるに  
兵船ハヤ近附くと相見へたり物見せよ」と言葉未だ終らざるに  
鬼夜及に於ては高き岡に昇り頭を廻らしつゝ能く見届け鬼吾  
が君侈油断はなりませぬ目に餘る大軍押寄せましてござる確か  
に敵は五百餘騎兵船は二十五六隻も候はんか眞ッ先きに潛ぎ來



第十六席

る船は螺の紋付いたる水引き是れ恐らくは嶋の三郎太夫忠重ならん庵に木爪は工藤茂光三鱗は北條なり其の外旗の手は確と見分り不中と雖も岸を去ること遠きに非ず勢ひ高大に見へ候と手に取る如く上げて爲朝カラと冷笑ひ爲去らば最後の用意せん笹良江は子供等を引連れて此方に來よと廣庭差して入りましたが畢竟爲朝如何なる事をなしますか

お話し變つて此方は狩野之介工藤茂光は嘉應二年の春上京して奏し升るには爲朝久しく武勇を逞ましくし剩さへ鬼ヶ嶋に渡つて鬼童を連れ歸り是れを奴僕として人民を驚かし候と訴へた後白河法皇は此由を聞てし召され驚き玉ひ急ぎ名たる、勇士を催し爲朝を誅伐いたすべしとの宣旨を下し置かれましたから

茂光欣然として伊豆の國へ戻り俄かに宣旨の赴を觸れ知らして近國の侍を催促なし四月下旬に至つて用意全く整ひましたから大嶋を差して進發した今茂光に相従ふ人々に於ては

伊藤 祐親  
北條 時政  
宇佐 見平  
宇佐 見平  
加藤 太光  
加藤 景廉  
澤田 六郎  
新田 四郎  
天野 藤内遠景  
此勢五百餘騎

朝爲郎八西鎮

是れで敵はと云へば爲朝一人何んどどうも是れを見ても爲朝の  
容易ならざる人ど云ふことは能く相分つて居ります、テ帆を張り  
波を押し切つて眞一文字に征め寄せたり此時御曹子爲朝は金襴  
の鎧直垂に精好の大口を張らせ紫裾濃の鎧を一着なし銀の磨き  
附けたる脇當りに黄金作りの太刀を佩き鷲の羽の征矢三十六指  
たるを咎高に負なし滋藤の弓の握り太なる眞ん中を取つて脇は  
さみ八龍を金にて打つたる白星の五枚兜を鬼夜及に持たして泰  
然と床机に掛り爲頼嶋君を左右に侍らし笹良江に酌を取らして  
最後の盃を催ふす中にも爲頼は流石は子兒ではあるが父の氣象  
を承けて少しも悪びれたる氣色なく沈着拂つた居りましたが此  
時鬼夜及は進み出で、曰く鬼今更上ぐるも愚の至りでは  
されども君智仁勇の三徳を兼ね備ひたる名將なれど武運拙き其  
上は能を包み光を隠し玉ふて時節を待ち玉へば斯る事も無かり

椿説弓張月

しに愨といに嶋々を管領して茂光忠重に頼まれ玉ひたるより終  
に倭人の舌頭に掛けられて年來の志しを伸ること能はず空しく  
東海の果てに終り玉ふこと無念至極……爲朝莞爾と笑ひ玉ひ  
爲愚かなる哉鬼夜及吾れ保元に勅勅を蒙りて配軍と成りし以來  
十餘年當所の主と成つて心ばかりに樂めり其以前も筑紫九ヶ國  
を管領せり由つて無念の事少しもなし西國にあつては菊池原田  
の者共は吾が武勇の程を知らん又た都にあつては源平の軍兵殊  
に武藏相模の郎黨ども、吾が弓勢は承知あらん其外の者共は兎  
を被り鎧こそは被りたれど案山子にも劣つた奴原爲朝に向つて  
弓を引くべき者一人もなし今日心やりの軍はせず憎くしと思ふ  
奴原を射殺して盡く海に沈め人は易けれどもどうせ存命へ得ら  
れぬ此身の無益の殺生をなすも詰らぬ今日まで死なせにあつた  
るは若し世の中に立て直つて父の意趣を遂げ讃岐院を位に復し

朝爲-郎八西鎮

奉ることもあらんかと思へばこそ永の年月斯くして居つた昔し  
吾れ説法を聞くに

欲知過去因

見其現在果

とか云つたシテ見れば罪を作る者は必ず未は良きことなし然し  
ながら弓矢取る身の習ひとして蝸牛の角の争ひに生けるを殺し  
死を厭はず吾れ總角の昔しより二十餘度の合戦に人の命を絶つ  
こと其の數を知らずと雖も分の者を討つて非分の者を打たず身  
の樂みに獵をなして鹿を殺さず亦た漁をして魚を捕らば神を尊  
敬して佛陀を念誦し早く天下に名を知らるゝと雖も過去の業に  
由つて斯る煩惱をなし今世の惡業に由つて來世の苦艱思ひやら  
るゝをや十年以來附き隨ひたる者共は諸代相傳の家來にもあら  
ぬに彼等を殺すは不慈なり……と爰に家來を殘らず呼集めま

月張弓説椿

して夫れ遺品を與へまして爲立去れよと仰せある一同  
は去り兼ねて居たが再三の仰せに據るなく涙に暮れて東西に別  
れました爲今心残りなしと飾り立てたる弓矢打物を皆海  
に投げ棄てさせ床机をツと離れましたが征良江を見返り玉ひ  
爲吾れ今磯邊に立ち出で敵の様子を見んと思ふ爲頼には最後  
の用意をさせよ嶋君は最と幼くて女子の事なり又た其方は忠重  
の娘なれば敵も目を掛くべからず跡に生き残つて告が亡き跡を  
吊へよ」征良江は涙に暮れて世にも君にも疎まれたる忠重  
の娘なればと惜からぬ命を存命へて何にかせん君と共に此の  
磯端の浪に屍を晒らすこそ妾の本意此儀お許し下され」と決心  
堅く相見へたるから爲朝は色々説き諭しまして亦が鬼夜刀を  
近く招きて「其方は吾が歸り來るまでに館の巡りに柴を積み重  
ね幼き者を刺し殺して爲朝が腹を切る時に速かに火を掛けよ心

朝爲郎八西鏡

得たるか 鬼委細心得ましてございます」借て一人止まりたる  
從幸に弓を持たして潜の方に赴き玉へば笹良江も云ふまでもな  
く爲頼も嶋君も少しも悪びれたる氣色は無く「父上早く歸り玉  
へ餘りに敵を侮りて過ちなし玉ふな」と見送る親子主従が是れ  
が此世の別れども知るや知らずやしら眞弓の杜仲の露を掻き拂  
つて頼てお姿は見へず聞こえは相成つたり借ても去る程に鬼夜  
乃ば甲斐々々しくも立ち巡りて柴刈草を掻き集め今は斯ふよと  
見へたる時笹良江に向つて 鬼アイヤ奥様御曹子は既に必死を  
極め玉へども某し熱々思ひ巡らすに今度討手を向けらるゝ事は  
全く茂光が私の遺恨に起れり然るを爰に自殺し玉ふは潔きに似  
て犬死でござる免るゝ程は落延びて時節を待ち玉ふに不如私  
兼て斯くあるべしと思ひ居りましたれば兼て船の用意をいたし  
置きました早く此所を落ち玉ふて八郎嶋へは越しあれ某し亦た

月張弓説椿

御曹子を諒め申上げて頼て追付かしやし奉らん早く……」  
と急き立つれば笹良江は是れを聞いて 笹ア、頼母しき汝が  
心なるかな稚君姫君は老先きある身なれば父上と諸共に落し  
参らせんこと願はしけれと妾が身は從ひ奉り難し父の不良らぬ  
心より幾度か君に疑られ今亦た所を免れんは命惜しさに御身  
を推へさしもに猛き御曹子にさへ敵に後を見さし参らせしと人  
にも言はれ君にも思はれ奉らんは最と口惜しき限りなり」と立  
ちも上がらず傍ちから爲頼が 爲笹良江能くも申したり最後の  
用意を致せよと那れ程父が仰せありしをいかで阿容くど落ち  
延ふべき唯潔く自殺して名を此嶋に止めんと思ひ切つたる勇  
士の一念猶檀は二葉より香ばしと此事か鬼夜及はヲハ、  
と涙を流し 鬼ア、一恐れ入つたる其の傍一言普通の御子供衆  
なら未だ十ヤ九ツで斯ふいふ時には泣き取つて物の用にも立た

すして手足纏ひなるべきに流石は源家の御若君、奥様の仰せある所は自分一個の名聞にして忠義とは云ひ難し其故如何となれば此所にて死し玉わば若君も自殺し玉ひ、御曹子は云ふも更なり去れば一人の魂ひにて三人の主君を殺し玉はんは、御父忠重の不忠に勝れり是ばかりの事に思ひ惑ひ玉ふこそ淺間敷く候」と威猛高になつて諫めた時に、笹良江は其の道理に重ねて云ふべきやうも無く、笹良江に妾が誤りたり吾が心一ツを以て御曹子親子を殺し奉ることば出来ず兎も角も君の爲の宜きやうに計ひ玉はれ」と云ふ折しも先きに爲朝に従つて渚の方に赴きたる一人の士卒、噓き立ち歸つて来て大床の下に跪き息をも吐かず大音を「さても討手の大將軍狩野介茂光以下の官軍三郎太夫忠重を御導として眞ッ先きに彼れが船を漕がしエイ」聲して征め掛けたり、其時御曹子は弓杖に紐りつゝ、沖の方を見渡し玉へば、一

陣の船に兵二百餘人、射向けの袖を差し翳し船を乗り倒け、近くなる程に其間ハヤ三町ばかりを隔てたり、此の船の大將は三郎太夫忠重なり、六十餘りの老武者の大荒目の鎧に突具の兜を猪首に着なし、眞ッ白なる鬘の後れ毛を内甲の間より振り亂し、小長刀を突き立つて船に立ち顯はれ、御曹子を見て少しも擬議せず掛れ、と下知すれば、荒浪に揺り揺られて船を左右なくば乗り付け得ず、御曹子此の有様を傍覽して儲ては、出陣は忠重なり、矢頃尙遠くはあれ、最後の矢を手淺く射ては、残念なり、イデヤ彼奴を海に沈めて、茂光等の膽を冷やし呉れんと宣ひまして、大鍋を取つて打ち番ひ小肘の廻はる程引切つてヒヨッフツと放し玉へば、水際五寸ばかりを置いて、大船の腹を那方へ衝と射通し、両方の矢目より水入りて、船は立ち所に巻込まれ、忠重を始めとして二百餘人の軍兵共、水底に沈み、大魚の腹に葬ひらる、水心ある兵は楯板に乗りて

朝爲郎八西鎮

源ひ弓の筈に取付きて後陣の船に助け乗せられ幸ふじて命を拾へるもあれは是等は僅かに五六十人に過ぎず去れば茂光等數多の官軍此の跡たらくに舌の根を震はし暫く船を返して唯徒らに遠巻きし續いて寄する者もなし僕は彼所にて身の暇を賜はり疾く落ちよと宣ひしが此事を告げずさんが爲に歸り來たれり是れまでにて僕の役は濟みたりイザ別れ申上げん」と云ひ果て、行術も知れず相成りました笹良江は此の注進を聞いて出でんとなしたる足も進まず笹ア、無慘や吾が父は身の惡報とは云ひながら終に君の矢先きに掛りて底の水屑となり玉ひたるか夫には勝りて彼の男が磯方までも涉供し今亦た注進いたせしは最も愛たき心底なりと只管に歎じ落つる涙を拂ひつゝ鬼夜乃に向つて笹寄手御曹子の弓勢に恐れて陸に上がり得ずば君は歸り來まさん程もなし、妾は君の供して船に乗らんと思ふは身は

月張弓説椿

先づ若君姫君を扶けて船に移し呉れよ幼きものは鬼角に物に後れ勝ち疾く急ぎ玉はれ」と爲頼の袴をば曳き參らせ嶋君の襟に錦の守り袋なごを掛けて居る、鬼夜乃は此の体をソツと見て鬼ハ、ア、借ては此の婦人父忠重が死せしと聞いて君にも附かず父にも附かず愈々死する覺悟だな」と速くも覺りましたから何んとも云はず承知をして嶋君を抱き姫君の手を曳いて走りました兩人の和子は數々後を振り返り「笹良江早く父上の涉供して來玉ひ」と虫が知らすか名残り惜むの体流石に親子の情、笹良江は胸が一杯に成つて仕舞つて何んと答へることも出來ない此方は鬼夜乃敵の來さうも無き濱邊に出て舟底に爲頼、嶋君を忍ばして直ちに爲朝の居る濱邊に參りまして偽はつて云ふには、爲頼君嶋君には既に笹良江殿を傳けて船に乗じ真心ある知り人一兩人を差添へて利嶋まで落し參らせました、茂光私の意趣を合

朝為郎八西鎮

んで討手にひかひたるに自殺し玉はんは最と口惜しうございま  
す恐れ入つたる事ながら私に名字を賜はつて館に火を掛け煙り  
の中に腹を切ります君は其の際に船に召されて和子達と一  
に相成り八郎嶋へ立退きあれかし」と云はせも果てず為朝大  
いに驚き玉ひ為ナニ子供等には笹良江を附けて落したるとな  
餘計な汝が采配かな為朝何故に命を惜みて汝一人を殺すべき道  
は思ひも掛けぬ事なり」と逆も聞容れべき様子はございません  
鬼イヤ、然ふ仰せらるゝことは多無用忠臣が君に代つて命を  
落すこと昔しより其例し些なからず紀信が車に焼かれ真根子が  
自ら首刎ねたるは君折々物語り玉ふを以て私は存じて居ります  
私は無佛世界の孤嶋に生れて一文不通の荒夷なれど日頃君の教  
へに由つて人道の如何は存じ居ります曲げて船にお乗り下さ  
れ」と赤心表に願はれて申し述べ、為朝は事皆な思ふに違ふて

楢説弓張月

如何にもすべきやう無く亦た鬼夜及が命に代はらんと云ふも  
し難く和子達を敵に渡すも實に無念如何はせんと感ひ玉ふを鬼  
夜及頼りに諫め申上げて鏡の袖を曳きつゝ件んの落しに誘ひ彼の  
船に乗し参らするに天此の忠臣を憐れみ義士を助け玉ひけん俄  
かに海上竝立ちて呎尺の間も見へないやうに相成りましたから  
寄手の船に於ては少しも是れを知らず為朝は西國に人と成つて  
亦た大嶋に十餘年の月日を送り玉ひし程であるから船に乗つて  
は平氣なもの多自分て楫を取つて漕ぎ走らし自分の子供等が船  
に乗つて居るとは夢にも知らず笹良江等に追付いて兎も角も後  
ちの事をも致さうと利嶋を差して急ぎ玉ふ此方は鬼夜及が先づ  
是れで好しと野嶋の館に走り歸つて見ると笹良江は唯一人高樓  
に香を焚き經を讀んで居りましたが鬼夜及が立ち歸つたる体で  
あるから靜かに經を巻き納めて 笹如何に鬼夜及未だ御曹子は

朝爲郎八西鎮

磯邊の方まへに在あるか最もと心こゝろ許ゆるなし 鬼おにハ、イ、ハ、身み先ま刻と忠ちゆう重じゆうの溺な死し  
せしと聞きいて彌や々々世よの中ちゆうを果は敢かんなみ身みを殺ころして忠ちゆう孝かうを全まふせん  
と思おもひ定め玉たまひし景色けしきなれば強つよひて伴ばんひやささず御ご曹そう子しを様さま々々に  
お諒りやうめす上げまして件くだんの船ふねに乗のせせ八はち郎らう嶋じまへ落おしな奉ほうりま  
した然しかるに心こゝろ忙いそがはしきに紛まれて若わ君きみ姫ひめ君きみを船ふね底そこに忍しのばせ置おき  
たりしが其その事ことを告つげ不すとは云いへ爲頼たの君きみ賢けんく在ませば利り嶋じままで  
行いき玉たまふ頃ときまでには船ふねソコにて出い合あひ玉たまふべし某たがし名字なをし  
請こひ館くわんに火ひを掛かけて腹はらかツ切きり敵たかを欺あまき君きみを後うしろ安やすく落おし参らせ  
ん爲に歸かへり來きれり」と事こと審しんかに告つげたに由よしつて笹さ良らう江え聞きいて深ふか  
く喜よろこび今はハヤ心こゝろ易やすし悪わる人ひとなれども父ちちは父ちちなり去いりながら父ちち  
に從したがふ時ときは君きみに忠ちゆうならま君きみに從したがへば不ふ孝かうなり兎うても角かくても笹さ良らう  
江えが今いま日は死しぬべき日ひなりと思おもひ和子わこ達たちのみを船ふねに乗のせ参らせ  
しを早はやくも推おして能あたくも斯かく計はかりひ玉たまひけるものかな名なのみ聞き

椿説弓張月

つゝ逢あ見みねを身みの息いき女むすめは好このき父ちちを持もち玉たまひぬれば身みも威おどく樂たの  
しきに付つけ愛あいきに付つけ君きみも不ふ惑たふに思おも召よさん吾われが身みも同おなじ側かた女むすめに  
て伊い奉ほう公こうも十じゅう年ねん餘あまり産うませ玉たまひしは子こ達たちも三さん人にんまでは在ありすれど  
頑がんくなる父ちち故こに自みづから耻はじて殘のこり止とまり今日けふの船ふね手てを他ほかに見みる  
さて味あじ氣きなき身みの果はてよ……」と心こゝろの限かぎり搔かき口くち説いけば鬼おに夜や乃な  
も亦また笹さ良らう江えの心こゝろの内うちを推おし計はかりり 鬼おに其そのの仰おほせは道みち理りなれど  
今いまは何なににも云いふて歸かへらずイザ介せ錯さくし参まらせん」と刀たがを提たげて立た  
上あがれば笹さ良らう江えも座ざを占しめて用もち意いの懐なつ劍けん取とり出いだし今いまを限かぎり  
見みへたる折しり思おもひも寄よらず冠かん者もの爲な頼たの妻つま戸との陰かげより走はり入いつて  
「吾われが身みも共ともに……」と押お直ちり襟えり寛かんぐる程ほどもわらせず腰こしなる太ふ  
刀たがを振ふき放はなつて其その儘まま腹はらへグザとばかも突つき立たてました鬼おに夜や乃なは  
云いふも更さらなり笹さ良らう江えも是これれはどばかも唯ただ呆あれて問とはんとすれど  
聲こゑは出いず泣なかしとすれを生な憎にくみ涙なみだのみはふり落おちて吾われれにも非ひ



朝爲郎八西鎮

ら取... 爲道は言甲斐なくも見  
ゆるものかな... 乗つたれと父上の事心許なく加之ら...  
きに鳴君に持たしたる護袋の常に變りて膨れて居るも怪しけれ  
は潜かに開き見るに果して笹良江の遺書ありて父と君とに身を  
置き兼ね自害するどありしかば打ち驚きて鳴君を賤し拵へ彼を  
ば船底に止め置き吾が身は館に走り歸へり先刻より彼所に隠れ  
居て鬼夜及が忠義に由つて吾が父は恙がなく落ち延び玉ひしと  
聞いて始めて安堵し然る上は爲頼此館にて自殺せすば敵必ず疑  
ひを起して跡を追ひ奉らん能くも船より歸りしと吾が身の上  
を喜びこそすれ歎くは最にも愚痴の至り...」と云ふ事々も息  
切れて苦痛を忍ぶ物語りには笹良江愈々悲しくて「覺悟は疾くに  
極めても心鈍きに死後れ一人行くべき死出の旅を確君に伴はる

月張弓説椿

是れも過去の悪業ならん... 鬼若君自殺し玉はずとも某し御曹子に代り奉りて死する上は敵  
の親子とも思はれぬに餘りに賢く在て思ひ過せし孝行が  
終の息の下に爲愚かなる哉鬼夜及の言爲頼幼しと雖も爲朝の  
婿男なり兄弟三人ありながら一人も其の死骸を止めずば誰か疑  
念を起さらん、嚮きに父上磯方に出で玉ふ時最後の用意をせよ  
かしと仰せありしは免れ難き親子が命なればなり然るに父は恙  
く吾れ此所に死なんこと喜び絶へて増す者なし兄弟も多けれど  
朝稚は遠く足利とやらんへ赴きて斯る時に逢ふ事も難く若し後  
ちに傳へ聞かば、驚きもせん、歎きもせん、今朝諸共に遊び居たりし

朝為郎西鎮

面影はありく目の中にあり僅か一日の内なれと變れば變るも  
のなるかな太郎九次郎九とは名のみ聞いて未だ逢はねと弟と  
聞けば戀しさに母も乳母も恩なる笹良江はすみも果てず  
夕を待たぬ朝露の野嶋に消へなば誰か又た嶋君を守り育てん長  
くもあらぬ魂の緒の吾れ戀しいに生れ来て親にも物を思はする  
不孝の罪が恨めし、此の難に大嶋の冠者爲頼が後の世を助け玉  
へよ地獄尊南無阿彌陀佛……と唱へつゝ切先上がり引廻す  
白く妙なる肌より流る血沙は消へ残る二月の雪に紅梅の花散  
りかゝるに異ならず笹良江最目も暮れて後ればせと取り直  
す懐劍咽喉に突立てたり折しも濱邊の方にワッワツと云ふ  
の聲起つてドーンと折しと云ふは確かに敵の責め鼓鬼夜  
乃に於てはツと欄干に身を寄せまして向ふを岐度見渡せば時に  
海面の露晴れて敵の兵船列を正し刀の山劔の木が大洋に湧き出

月張弓説椿

でたかど怪しまれ浪に映する夕陽は閻魔王の獄卒が火の車を曳  
いて来て罪人を迎ふるも斯くかどばかり思はれました鬼さて  
夥しき官軍かないつまで時刻を移しなば今まで盡せし謀事も其  
の甲斐なし痛ましくはござれども逆も助かり玉ふに非ず鬼夜乃  
が介錯に苦痛を免れ玉ひかしと刀を抜いて爲頼の御後ろに廻  
わり見れば最早目を閉じ頸を伸ばし唱名の聲細やかにて爲早  
くく……と仰せあり鬼夜乃は是れに何ても八次嶋にある太郎九  
二郎丸の行末を思ひやり是れも彼れも同じ御曹子の御子にはあ  
れを吾が娘の生みしにあらねば最と尙恩義に腕も濼へ疲れて主  
には當てん乃も無く亦た笹良江の後ろに立ち見れば三十路に未  
だ足らぬ花の盛りの匂やかに斯く賢明あるは都にもなしやあら  
しに嶋山の若木をむげに枯らすかと思へば吾れも一人子の長女  
が面影目に見へて猛き心も驕り果て涙は盡さぬ本の縁の平と

成るまでは何れを先き何れを後ちに思へと思ひ定め得ず、笹良江  
漸く見返りまして、笹良、コレ鬼夜、乃億せしか言甲斐なし、日頃  
似氣なきことならずや、若君が苦痛にて在するに早く……」  
と云れまして鬼夜、乃は屹度思ひ直し、「今はハヤ是まで……」と  
心を鬼にいたしまして、ヤツと閃かす乃の下に、兩人が首は前にバ  
ツタリ落ちました、斯くて鬼夜、乃は泣きながら死骸を一つに致し  
まして、鬼、南無阿彌陀佛、々々々々々」と十遍ばかりの回向を  
致し、茶、里といふではございませんが、兼て用意の積上げたる柴に  
那方此方から火を掛けました、折しも激しき浦風に軒より軒へ吹  
き移され、見る／＼内に、大夏高樓は一面の火と相成りました、鬼夜  
乃に於ては、忽ち腹巻を剃ぎ捨て、立ちながら腹カッ切り、猛火の  
中に飛入つて、灰と成つて失せました、寄手の軍兵は野嶋の館に火  
の手の炎々と燃上がるを見て、俄かに騒ぎ立ち、一同須破や爲朝

は館に火を掛けて自殺するぞ、寄せよ……」とワイ／＼……」  
同船を乗り付けて、馬の足の立つ程に成りましたから、馬も皆な水  
中に下ろして、皆な是れに打乗り、漸くにして磯に上りましたが、若  
し誰か寄せて討たれるのでは無いか、向ふに謀略がありはせんか  
と思ふから却つて、氣味が悪くつて、寄することが出來ません、是  
れは全く官軍の卑怯といふ譯では無く、日頃爲朝の武勇人を恐れ  
しむるからであります、尤も何方から行つても同じ道理ではござ  
います、が、彼是れする内に、ハヤ館は焼け落ちまして、支ゆる者は一  
人もない様子、時に加藤次景廉一番に進み、「ヤア……」長詮議なし  
て、敵の焼け首を取るものかな、吾れ一番乗りをいたさん」と進み  
入れば、七尺有餘の大男、一番に腹を切りたるあり、全躰は爛つて仕  
舞つて、能く見分けは付きませんが、先づ是れが爲朝ならん、と云ふ  
ので、首を取つた、此外には八九歳に成る男の子の死骸と女の死骸

鎮西八郎爲朝

と唯ニッただけでございませう、子供の死骸は嶋冠者爲頼、婦人は側女、  
能良江であらうと土地の者もすすに由つて、借ては伴んの大男は  
爲朝に相違無しと云ふので、景廉を此日の功名第一に記し、爲朝の  
首をば同年の五月都へ差送りましたから、後白河法皇は二條京極  
通りに此の首を榮さしめて、御覽あり、洛中の貴賤道俗群り集ひて  
是れを見る、然しながら、燒首でございませうから、見物の人々も何ん  
だか物足りないやうな心持ちがする、鬼夜及の首を以て爲朝の首  
とするは、随分滑稽な話してございませうが、然しながら、鬼夜及は死  
花が咲いたやうなものでございませう、其身は小孤嶋の賤しき身に  
生れ、首を御覽まで玉われば、實に身の譽れ、偏に忠義の徳でござい  
ます、其頃都に斯ふいふ落首が立ちました  
源はくちはてにさと思へども  
千代の爲朝みるべかりけり

椿説弓張月

是れを都では三歳の童子までが口にするやうに成りましたから  
天下の人は全く爲朝は死んだものと思つて居るが、流石は平  
家の嫡子小松内大臣重盛は密かに眉を寄せまして、或人にすすに  
は重爲朝は未だ此の世の中に居らう、茂光出し、抜かれて、僞首を  
取つたりと思ふ、或人が「夫れは又た何故左様仰せられますか  
重去れば吾れ街の落首に由つて是れを見る、源は朽果てにきと思  
へども……」と云ふのは、源家は絶へ果て、水の流れば朽れたやう  
ではあるがと云ふ事である、亦た千代の爲朝見るべかりけりと云  
ふのは爲朝の行末を祝して再び世にも出で子孫が繁盛すると云  
ふことである、八郎は源家の嫡流にして、武勇拔群のみならず、忠を  
存し、義を守ること、田舎關羽の風がある、若し是れに弓矢を司さ  
らしめなば、天下は忽ちの内、に彼れがもの、茂光が如き者の敵では  
無い、斯かるも無理では無い、見よ、爲朝終に志しを得ば再

び世の人には面は逢はずまいけれども一旦志しを得るに於ては  
吾が家の仇は彼れにあり」と仰せられました。が、果して後ちにぞ  
思ひ當たることがありました。重盛と云ふお方は容易ならぬ人傑  
でございませう。借て爲朝は十三歳にして筑紫に下たり九州を三年  
にして打ち從へまして十八歳で都に上り、保元の合戦に名を顯  
はして大嶋に流されて嶋々を管領すること十一年、其の勢ひ東海  
に震ふとは云ひながら勅勘の身でございませう。終に志しを純  
ることも出来ず、鬼も角も二十八歳を一期として、嘉應二年四月の  
末に自殺したと云ふ事に定まつた。然しながら爰で爲朝が死んで  
仕舞へば此の講談も是れまでいさいます。が何うして中々然ん  
な事では死ぬ方ではない、是より愈々御曹子琉球に至つて威を震ひ、遂  
々王様にまで成ると云ふ、本講談の主眼は之からでございませう。

第十九席

お話し元に戻つて八郎爲朝公は其日鬼夜叉に諫められて心なら  
ずも船に乗つて利嶋の方へ落ち玉ひました。が、夫れかと思ふ船も  
見へず、借ては子供等は八郎嶋へ参つたのかと行衛も知らず潮に  
任かして八郎嶋の枝嶋なる來嶋と云ふ嶋へ船を附け玉ふた時に  
夜はホノノと明け渡りました。此嶋まで來るのは容易なことでは  
來られないのであるが、斯の如く速かに來ると云ふは不思議と  
云ふも餘りありと思はず。獨り言を云はれた時に忽ち船底の方に  
當つて「ワッ……」と云ふ小さき子供の泣聲が聞へましてござ  
います。這は抑も怪しと板子を刎ね上げて見ると、アラ不思議や嶋  
君が唯一人泣伏して居りました。から、大いに驚き忙がわしく抱き  
上げて襟々に隠し拵へ事の次第を問ひ玉へば嶋君は漸く涙を止

めて昨日兄上笹良江と共に船に乗れ自分も跡より参らんとすし  
た程に鬼夜及に伴なはれて此の船底に忍び居り待てども  
良江は来ず其時兄上の仰せには吾れは家に歸つて笹良江と父上  
を勝ふて来る程に御身は暫く此所に居よと二本の文章を妾の懐  
中に差入れて来て憐れしく野嶋の方へ走せ玉ひました其後は  
少しも訪れは無く悲しき云ふばかりもございませぬが、驢いで  
行けぬと仰せ故耐へ忍んで居りましたが今父上の聲を漏れ  
聞いて嬉しと思へば涙のみはふり落ちて思はず聲を立てました  
と廻らぬ舌に愛々しく首め終りを告げ玉へば爲朝愈々不審に思  
ひ嶋君の懐中を掻い探つて件んの文を引き出だし押開いて見玉  
ふに一枚は笹良江の遺書でございまして、忠孝の二ツを立て兼ね  
自殺すると云ふことが書いてあります、又一枚は爲朝の手紙で  
ございまして、拾ひ書きではあるが前巻述べたる通りの次第が認

めてございます、一伍一什を読み終り紙の上には「  
を流し、大息吐いて、爲ア、一吾れ鬼夜及に賺かされて大嶋を免  
れ去り、却て笹良江爲頼等に死に後れたは残念無念彼等が残り止  
まるど知つて居れば何んで此所までは来たるべきぞ、ハヤ子供等  
は笹良江に附けて利嶋の方へ落したりと鬼夜及がすせしに由つ  
て敵此の事を知らば討ち取るべし然る時は爲朝吾が子の愛に溺  
れ是れを落したり杯云はれんが口惜じさに追付いて吾が手に掛  
け後ろ安く入水をしやうと思ひしものを思ひきや、彼等は死して  
吾れ一人此の嶋が音に來たらんとは道は淺ましや」と蹉跎なし  
智勇に長けし名将も悔ひの八千度身を恨み最後を磯の卵の花の  
雪より先きへ消へよとて嶋君を取つて引寄せ氷なす刃を抜いて  
フアヤ刺んとし玉ふ折しも、忽ち一隻の漁船八丈嶋の方より漕ぎ  
來つて斯くど見るより聲を振り立て「  
御曹子暫く待ち

玉く「と呼び掛けつゝ飛ぶが如くに乗附けて其の船に踊り入り  
爲朝を押隔つて嶋君を抱きたる者があります其時爲朝は爲エ  
邪魔致すな」と拂ひ退けて刺んとなし始めて其人を見玉ふに  
是れ別人ならず三郎の長女が従弟女の夫なる四男五郎でありま  
すから這は思ひ掛けずと驚き玉へ嶋君を刺す手を止めて爲ヤ  
ア汝は何うして吾が爰に来るを知れるか 四御曹子私は御曹子  
の是れにお出でありしは夢にも知らず此の朝汐に嶋海老を釣ら  
んと心得明け方より船を下ろして彼所の岩影に糸を垂れて居り  
ましたか誰とは知らず年の頃三十ばかりの女子と十歳ばかりの  
男の兒の聲として私の名を度々呼び掛け八郎御曹子唯今來嶋に  
船を寄せ玉ひ故あつて未の娘嶋君を刺殺し其身も自害せんとし  
玉ふ故に行いて止め奉れど其聲は耳に残つて人影は失せました  
何うも怪しいとは思ひましたか御曹子と聞くさへ懐かしければ

直ぐ様船を走らして唯今此所に来て様子を見奉れば唯今の始末  
何故君にも似合はしからぬ事を遊ばすや」と云はれて爲朝ホッ  
と云ふ息を吐き爲ア、一、シテ見ると其方を呼びたる者は爲頼  
惟良江が盛ならん彼等黄泉に赴くと雖も尙吾れを思ふことの斯  
の如く深きや」と愛ひの色に沈み玉ふ漸くにして刃を納め爲  
先づ四男五郎吾れ測らすも此所に来りし事始めを云へば斯様々  
々終りをゆせば云々なり」と忠重國府へ脱去り茂光軍を將て押  
寄せ來たりし時鬼夜及と惟良江は忠義の爲に命を落し爲頼又た  
死を深くして屍を野嶋の館に晒らせしこと等を委しく告げ尙二  
通の遺書を讀み聞かせ玉ふに四男五郎は聞く度毎に且つ痛み且  
つ感と泣き袂を漏る雨に尙潮垂るゝ腰篋の膝に抱かるゝ嶋君も  
潜然と泣き玉へば父の心を芋環の最どい苦しく在せども吾が子  
とは見廻りもせず又四男五郎に宣ふやう 爲何事も思ひ知らざ

朝爲郎人西鎮

る幼子を殺さんば鬼々しくも云はれんが、吾れ鬼夜叉に睡かされ  
て大嶋を免れ去り子を先立て家の臣を失ひ、朝敵と呼ばるゝ身の  
何にをよすがに活きんとて汚なき振舞を致すべき、既に覺悟極め  
たれば其方に物云ふもモウ是れ限り吾れ自害せば此首を伊豆の  
國府に送り遣はし過分の褒美を得て嶋人を賑はせよ 四這は君  
の仰せども覺へ老候吾が嶋人御曹子を慕ひ奉ること赤子の母を  
慕ふが如し、然のみならず太郎九次郎九も在するに、爰に來玉ひな  
がら對面を許されず忽ち自害して人に望みを失はし何んの益  
か候ふべき且つ國地へ通路なき道にてよしや自殺し玉ふとも誰  
か茂光とやらんに訴ふべきシテ見れば何んの役にも立ちませぬ  
曲げて必死を思ひ止まり玉はば八丈嶋に住果て、和子の老長き  
を見玉へかし、此頃はスツカリ成長なさいまして兄君も弟君も  
能く御曹子に似賜ひました長女は是れを以て感さめし又た歎

月張弓説椿

きもして君の事を申出でざる日とてはございませぬ、イサ本嶋へ  
供を致しませう」爲朝頭を左右に振り爲「否とよ其方の諫言  
道理あるには似たれども吾れ生くまじき此身を存命へてヲメ  
と今嶋人に面を合はすは耻かしきの限りなり、然しながら其方  
の云ふ所も又た無下にもなし難ければ暫く自殺を止まつて此來  
嶋に休み死なんとも生きんとも能く分別を致すであらう 四左  
様なれば私は其暇に入郎嶋に立歸つて密かに長女に告げ知らし  
て若君達をお伴ひ申ませう、先づ彼所に浮出で遊ばせ」と轉て  
船を引入れつゝ爲朝と嶋君を來嶋の磯に上ぼせ、自分は又た船に  
乗つて本島を差して漕去りました跡に爲朝はホツと云ふ息を  
吐き爲「ア、一山なき者に吾が思ひを効げられ、エ、飛んた事を  
した」と遊りを能く見渡せば岩の傍らに時知り顔に咲いて居る  
のは卯の花であります 爲「ア、那れは先年大嶋に歸る時長女が



朝為郎八西鎮

殊更に別れを惜み此所まで送り來りし時彼を慰めん卯木を  
折り吞れ若し此嶋に再び來る事あれば此枝も又た生くること  
らんと言ひしが今思ひ見れば為朝が茂光等に後を見せ免れて此  
嶋に來て卯木の咲けるを見るア、一前象と云ふものはあるもの  
かイヤ夫は然うと今愁と長女達に來られて引留らるゝやうな事  
があつては吾が志を遂げ難い鬼とて斯くても死に後れし玉の  
を一層風になして讃乾の國に押渡り新院の院に詣りて臣が孤忠  
を訴へ奉り畏れ多き事にはあれと伊願を枕に腹を切らん然うだ  
くしと胸と問ひ腹に答へつ身を起し逃いしく船に乗らうとなさ  
いますから嶋君は是を見て嶋父上何れへ行き玉ふか何所まで  
も伴ひ玉はれと立上がり袖も露けき直垂にまのはり玉へば武  
士の猛き心も弱りつゝ纏て猿臂を延ばしてギョツと抱き占め  
爲ア、一過つたり長女と二人の子供等に逢はずに行くさへ恨む

月張弓説椿

であらう現んや此の小兒を留め置かば己れは後安々ども小兒が  
定めし困るであらうヲ、嶋君よ父が死ぬ所まではは身も共に連  
れ參らん……ども知らずして取る物も取不敢跡に來る長女等は  
嗚恨みもせん歎きもせん九牛一毛は遺品を殘し置かん」と手馴  
れし弓に矢を副へて岩の間に倚せ掛け置き頼て嶋君を船の上に  
抱き上げて來嶋の磯を漕ぎ離れ瀕々たる青海原を風のまに  
出で玉へばドット一陣の風出で矢を射る如く船は走り忽ち行衛  
も知れず成りました去る程に此方は長女は四男五郎の報知を聞  
いて實に飛立つ思ひ二人の和子を伴なつて船に乗り四男五郎の  
妻も乗込んで急いで來嶋へ來て見ますと何うもお姿が見へない  
磯へ上つて御曹子は何所かと那方此方を尋ねましたか少しも人  
影はございません見ると岩の根に一張の弓と二本の矢が立掛け  
てございます長女は此有様を唯忙然としてワツとばかりに岩の

朝爲郎八西鎮

上に泣き倒れ 長借ては御曹子此嶋にも止まり玉はず心強くも  
ハヤ何れかへ免れ玉ひたるか何れの方へ出でに成つたか夢で  
は無いか若し夢なれば覺すして君が面影拜せん」と前後正体  
くばかり四男五郎夫婦も誠氣の毒と思へば諫め兼ねて共に盆  
櫛りと致しました漸く四男五郎は件んの弓矢を取上げて長女  
の前を持ち来たり 四モシ長女決して左様に歎かるゝな御曹子は  
蓋世の義士として測ちず敵の鋒先きを避け爰に漂泊なし玉ひ涉  
身にさへ相見ることの面目なく其故遺品に弓矢を残し何れにか  
涉立去り遊ばしたるものならんかア、斯ふ云ふ事と知つたなら  
本嶋へは連れ上りやア好かつたが今更悔ゆるも十日の朔六  
日の暮浦若し此事を聞いたなら嶋人達も逃がしつした私を恨  
むであらう況しては身の悲しみは身一ツの上にもあらず未だに  
父上の面影も知り玉はざる太郎九次郎九の斯く立派なる成長を

椿説弓張月

なしては嗚呼目に掛けぬが口惜しからん面目なきは此の私なり  
然しなから今世の縁盡きては人力の及ぶべきに非ず唯此上は此  
の弓矢を彼の君なりと見もし見せもして和子達に武藝を傳へ賜  
へかし世の中の儘ならぬは此所ばかりに非ず大嶋にて自害し玉  
ひたる笹良江の君源家の嫡流に生れ玉ひし爲頼君爲朝公の心  
の中は如何ばかり彼是れ思ひ較べては左のみ悲み歎くもので無  
し」と言葉盡して諫めましたから側から四男五郎の妻も又た  
様々に慰め 四「サア、船に乗り玉へ」と云ふ此時長女は彼の  
卯木に手を掛けて泣崩れたる儘立ち上がらず漸くにして涙を拂  
ひ 長世の中に生きとして活けるとして親の最後を悲しまぬ者  
があらう忘れもしない過ぎつる年の而も今月假初めに別れてよ  
り少しの信りだになくて忽ち三歳の夢と醒め恩義に父は死し  
たりと聞くさへあるに笹良江の操濁らぬ潔き忠孝の名を大嶋の

磯の藻屑となり玉ふ爲頼君の孝行を思ふにも尙敷ならぬ妻ばかりに年頃に宮仕へした事もなく、慰むに死なで別るゝ悲しさのやる方なきを察し玉へ親に別れ君に棄てられ立つ甲斐もなき磯馴松よしや千歳を経るとも忘るゝ隙のあるべきか、心強きは武士の常とは兼て聞つれど今日たまゝに此所まで浮出でありながら名乗りも取へず立去り玉ふとは餘りにお心強いぞや、自害をいたして死ねかしと云はぬばかりの遊ばし方遣品も今は仇なりと恨みの限り掻き口説いて宛ら物に狂ひし如く右手の磯より海を望み、あはや身を投げんと致しましたから四男五郎夫婦は唯鷲を呆れ二人の和子を打棄て、忙がはしく抱き留め、尚色々と理屈を聞かせ是を素この場所へ連れて参りました、太郎九次郎九は子供心に少しも理由は存じませんが母が常の様子と異つて居りますからワツとばかりに泣出して両袖から縋り付いたいじらしさ

長女は兩子を顧みて長ア、一此子供等がなかつたなら妾は此度死ぬべきに妾が今ま短慮をなさば乳に不足を致して子供も行末も覺束なし這は何んどせん兎やせん」と左右の小脇に掻寄せまして、又も聲を上げて泣入りしました芝居でやると、此邊は充分皆さまを泣かせる所でありませう、時しも傍へに年経たる所の松の梢に一朶の白雲、驟とたな引きつゝ中に一人の翁の姿、長女の前へ静かに進みました、其様は白髪にして童顔と云ふかち先づ仙人みたいな顔、白き髭を垂れまして一つの大きな幣を捧げ持ち、莞爾と笑つて云はれるには、翁善哉々々……」善哉と云つたつて那の汁粉屋で賣る粟餅に、餡を掛けた那れではございませぬ、過日口流者が或る寄席で此の講談をやりまして、矢張り此所で善哉々々を遣ると、聴客の一人が「此の講談場下は善哉餅を跡で福引きにでもして出すのか」と云はれたには驚きました、尤も段々聞いて

見たらば秩父の極く山奥の方で赤十字社大會に就て始めて東京へ出たのださうで、イヤ然ふ云ふ方は外に二人は無い、閑話は措いて彼の神仙は「善哉々々、長女、必ず怪しむ事勿れ吾は素と八郎爲朝有縁の者にて年頃大嶋に往來し影身に附き添ひて彼人を守るを以て此度又た從ひて四國を渡らんとして此所を過ぎり、節婦離別の悲歎に耐へずして命を落さんとするを見るに忍びず天機を漏らすの恐れはあれと暫く立歸つて後來の吉事を告ぐ必ず死すべからず尙千辛万苦を厭はずして二人の幼子を守り育てよ今より後ち十年を経れば平家は滅亡して源氏一統の世とならん其時本州に赴きて明ら様に訴へなば此兄弟の子孫嶋々に繁昌して永く安堵の思ひをなすべし然らば慈母の功蹟莫大にして今身死するには遙かに勝れり悲しみ苦しみに耐すして首を掻り投身して死すると云ふは匹夫匹婦のなすべき事爲朝の側女として

は似氣なきこと抑々皇國の宗廟天照皇太神は万の民を慈しみ玉ふこと深く普天の下卒士の激照らし玉はざる限もなし今より本嶋に勸請して耆婆明神と崇め奉らば大ひに養靈に益あるのみならず嶋人一切の禍ひを拂ふべし且つ某の年某の月に至つて八丈嶋の某山の麓の沼に三蓮並頭の蓮花忽然と生じて彌陀三尊の影向し玉ふ事あらん是ぞ此嶋に神道佛法の繁昌なすべき禎祥と知るべし其時次郎丸を出家さして父祖の菩提を吊らはすべし然りと雖も爲朝の運命唯今なれば盡くるに非ず唯今生の對面は其望みを遂げ難からんのみ去れば遺品の弓と矢を一社の神とし祝ひ祀らば彼人爰に在すが如く永く子孫の護りとなりん、努々疑ふべからず」と云ふかと思へば姿は煙りの如く殘るは彼の大幣のみでありますから一同唯奇異の思ひを致しまして呆れ果て、居りました、長女は始めて夢の醒めたる如く四男五郎も其妻も皆那方

鎮西八郎爲朝

に合掌なしつゝ伏し拜み借ては嬉しき事なりとや、愛への眉を  
開き遂に八丈嶋に立ち歸り洲の人々に此事を知り告らすれば諸  
人は聞いて爲朝公の嶋にお戻りなきは大變に殘念に存じました  
が早速異人の示現に畏みて彌々太郎九次郎丸に侍づき各々力ら  
を合はして來嶋に一つの社を拵へ、像見の弓矢を神体として八郎  
明神と崇め奉り亦た本嶋に一社を建立して天照皇太神を勧請な  
し者婆明神と稱けました此兩社は尙唯今でも那の嶋にあるさう  
でございます斯くて許多の年月を経て治承三初秋八月前兵衛佐  
頼朝蛭ヶ小嶋に義兵を揚げて向ふ所勝たすと云ふ事なく文治元  
年三月下旬平族盡く西海の泡と消へて源氏一統の世と成りまし  
た時に、太郎九次郎丸は鎌倉に赴き北條時政に就て爲朝の庶子な  
る事を詳かに訴へに及ばれましたから、頼朝やがて對面あつて、太  
郎丸には大嶋を管領させ次郎丸には八丈嶋を管領すべき由の御

椿説弓張月

教書を賜はり且つ爲朝の節義勇敏は田横の風ありとて賞歎の餘  
り朝廷に願つて爲朝勅封の儀を願ひました時の帝高倉院は  
速かに此儀を開届けられ且つは宸筆の八郎大明神と云ふ額を賜  
はりました太郎九次郎丸は實に喜んで朝恩の深きを涙を流して  
喜び奉り早速是れを嶋に持つて參つて本社に安置し、長女、四男五  
郎等に此赴きを申聞けたから嶋人等も早くも聞傳へて大いに喜  
び益々尊信して嶋の鎮守と仰ぎ奉り、神徳日々に始然でありまし  
た然れば、鎌倉世々の將軍の信仰も淺からず何れの時にか正一位  
を贈られ今では正一位八郎大明神とすさうでございます、斯れ  
ば長女はや、宿望を遂げ又或日太郎九次郎丸に、長借て妾昔し  
大嶋の御曹子に捨てられ參らせし頃、既に死すべき所を不思議の  
示現に由つて今日まで命を存生たるが夫も皆な和子達の今日の  
此有様を見たいばかり今は世の中に思ひ置くこと少しも無し唯

朝爲郎八西鎮

残り惜しきは御曹子の行衛、今に少しも分らずとは云ひながら  
神跡此嶋にあるなれば他を求むるに及ばず、妾の苦節漸くに功な  
つて餘命も惜むに足らず、今は別れ奉るべき時節來れり、彼是菩提  
の種として次郎九は祝變入道し、父祖の後ちの世を吊ひ玉はんこ  
と勿論の話し願くは兄弟志しを一つにして行ひを慎み嶋人を憐  
れみて父上の傍名前を汚しては成りませんぞ、すすべき事は唯是  
はかりなり」とて言葉終るや否や表の方へと馳出でました……  
之れを見ました家人は驚いて跡から追ふ其内に忽ち行衛知れず  
と相成りましたから其夜は徹夜にて行衛を探したが知れない、翌  
日の朝に至つて漸く嶋山と云ふ山の麓の沼の中から其死骸が上  
がりました、主従始め次郎九太郎九は聲を上げて泣いたが仕方が  
無い其山の半腹に屍を葬りまして此日次郎九は入道いたし件ん  
の山に一つの寺を建立しやうと既に其用意に取り掛りました、然

椿説弓張月

るに不思議なる事には長女が死にまして丁度七日目の事、初七日  
でございませぬ、彼の沼に忽然と頭を二ツ並べた蓮花を生じ、辨の中  
に彌陀三尊の影向まし、て光明赫灼と拜されました、此の奇瑞  
を見て太郎九次郎九の兄弟は更なり、主従兄弟まで感涙に咽び合  
掌禮拜して南無阿彌陀佛々々々々々と云ふ聲、天地に響くが如  
く去れば次郎九入道は深く佛恩を感拜して象徴の廣大無量なる  
を開悟し、いよ、此度建立しました寺を彌陀寺と唱へ其山をば  
香爐山と稱けて爲朝を以て第一世となし、其身は二世の住持とな  
つて四男五郎を以て嶋の賞罰一切の事をさせ、たから嶋人は是れ  
を押し尊み次郎九を入道の宮と云ひ、四男五郎夫婦を太夫々々と  
呼んで其仁政を賞せぬ者一人もなし、去れば宮と太夫と主従にて  
永く八丈嶋を管領いたしました、天代の孫雲加入道と云ふ人の  
代に武藏の國神奈川の宗福寺を請待して住持となし、由つて寺號

を改めて宗廟寺とすしました是は康正二年丙子の十一月のこと  
夫は借て置き太郎丸は伊豆の國大嶋を管領して大嶋太郎為家と  
名乗り後に為政と改めましてをさいます是が大嶋の先祖で去れ  
ば保元の亂に討死いたした為朝恩願の郎黨須藤九郎透間計悪七  
別當手取與次打手紀八天矢新三郎武矢源太松浦二郎吉田兵衛以  
下廿八騎の子孫皆舊恩を忘れず大嶋に集つて参りまして為政に  
仕へ其後妻と迎へまして子孫も殖へ大嶋に一家一門を立派に殘  
しましたのも皆為朝公の餘徳でございます借て此方のお話し  
は是までに致して是よりは本文為朝の移身の上に移つて講演い  
たします。

第二十席

却説も八郎為朝は惜からぬ一命を漸くに存命へまして來嶋八丈

嶋を心ならずも跡となされ讃岐の國へ渡らんと冒險を企てまし  
た其時前にも上げた通り怒じいに来嶋に止まつて自害をな  
さば長女や子供は屍の四方に集つて嘸泣き歎くことならんシテ  
見れば彼等にも物を思はせ吾が後の世の障りともならん迎も吾  
が子や能良江に後れしものを今日死んだ所で五十歩百歩夫より  
は讃岐の國へ押渡つて新院の陵に詣で恐れ多きことにはあれど  
新院の陵を枕として此世を去らんと斯ふ決心をなされまして借  
ては渺々たる大海を木の葉に等しき小船に召して渡るお心持ち  
に成つたので是を私共のやうな者が遣りましたなれば一時を経  
ぬ間に船は覆つて土左右衛と改名に及ぶのでありませうが神の  
助けか為朝公の召したる船は濤に揺られながらも風も無く段々  
と進んで行く嶋君を傍自分の懐中に入れておぼして船中に充分兵糧  
は入れてあるから粟を焚いては嶋君に喰べさせは自分も召上が

朝爲郎八西鏡

り水が無く... 君より外に言葉... 稀れでなければ... 年の秋の頃終に... した固より世を... がらない侈自分... 明らかかど云ふ... が明日は此の港... ります 爲ハ、ア... しきは彼等の境... ふ苦勞を明暮れ... 下の所へは自分... ぶので音もせず... 居られました丁... 度夕汐は濡ちて... 月は東の方よ

月張弓説椿

り登り... 如く那方此方... れませぬ去れど... き景色にも思召... 遊ばす内に夜は... と相見へまして... 船中に起上がり... 腹う相成りたる... を喰べさせイザ... に那方の大船の... ました 爲「ハッ... を窺ひましたは... 掛けては飛び込... 掛けるは飛び込... 百五



朝為郎八西鎮

居ります今此の渦丸が手下を連れて大船に飛乗り、各々刀を提  
げて「サ汝等命が惜くば路金荷物を残らず出して仕舞へ、否やを  
云へば此の水底へ投入れて忽ち魚の餌となすぞ、一同起きよ」と  
呼はつたり去ればガラ／＼バタ／＼云ふのは船子共が逃げ迷ふ  
音でございまして中に船長らしき者は用意の刀を抜いて「何に  
を小瓶な……」と賊の頭に渡り合つたが多勢に小勢で迎も叶ひ  
ません其内にモウ他の手下は積込である荷物を捻ぎ出してド  
ン／＼自分の方の解に移すやうな塩梅、船皆な一同逃げずに戦  
へ高の知れた小賊共……」と云つたが何うして叶ひません船長  
も弱り切つて居る然しながら中々船長も腕は冴へて居りまして  
侮り難く相見へたから渦丸も少しく怯んで相見へたり、為朝は最  
前より事の跡たらくを窺つて居りましてございまして、固より斯  
ふ云ふ事を見ては黙つて見て居られぬ、傍方突然間へ四五間……

月張弓説椿

も大仰だが二間程の所をヒラリと彼の大船に乗り移り、為朝中  
の人々必ず驚くこと勿れ吾れ助太刀をして得させる」と深山樫  
の三間程を打ち振つて當るを幸ひ賊をバツタ／＼と打倒せば數  
多の小盗人等或は首を打ち砕かれ又は足を打ち折られ、半ばは海  
に打落されて残り少なに相成りました、渦丸は此の勢ひに辟易し  
て心の内に十二分の恐れを生じ刀を引いて逃げんとすれば、船長  
は逃がさじものぞと追継り、為朝も又た艦の方に立ち塞がり、前後  
より引つ挟んで「ヤッ……」と一聲打たんとすれば、渦丸今は進  
退谷まりましたる事にして、ヒラリ跡を横に轉じて身を踊らし海  
中へドブ／＼飛込みました、水面を白眼んだ所容易に浮き上が  
らず、水底を潜つて逃げたか、夫ども又た海の藻屑と成りましたか  
何れにしても生死知れずと相成りましてございまして、船長は恐る  
爲朝の前に進み、長始めて傍意を得ます何所如何なるお方

朝爲郎八西鎮

かは存じませぬと貴郎様此所にお出でなくば荷物は勿論手前共の命はございませぬ所を誠に何うも有難ふ存じます先づ此方へ出で下し置かれますやうに……」と上座に据へんと致しました爲朝は莞爾笑つて爲イヤ……吾れは故あつて名を憚る者にして左様手厚き禮を云はれては困り入るマア某しの方の禮などは何うでも好いとして船子共の怪我致せし者に夫れ々々早く手當てが肝要早く……長へ有難ふ存じます左様なれば……」と云ふんで無事で居る船子共に言付けて怪我をした者に薬を與へ血を拭ひ色々介抱いたさせ居りましたが中にも船長が誠に能く船子共に行届く様子長然ふ皆んな驚くことは無い傷は浅いのだが皆んな酒を呑んで居るから血も餘計出るので明日直つて仕舞うから驚くなよ甲へ有難ふ存じますお蔭様で痛みも去りましたナニ血が出て實は驚いたんでガスが傷は浅い

椿説弓張月

のでガス夫れと云ふのも那の強いお方様のお蔭有難ふ存じます」と一同禮を云ふ長彦聞の通り船子共に於てもお蔭様で皆傷は浅いので喜んで居ります切望先づ此方へお入り下さいませやう……」強てと云ふから爲朝も辭し兼ねて船館の内へ案内せらる爲朝の面を打守つて大いに驚きたる体にて長ヤア此りやア不思議でございます……モシ違つたら此免を蒙ります貴郎様は去ぬる四月下旬大嶋にて討死し玉ひたりと承はる八郎御曹子には候はづや」云はれて爲朝公も是にはお驚き遊ばした爲シツ……聲が高いた然ふ云ふ其方は何者ぞ……ツッ貴郎は吾が兄義朝の男たる熱田大宮司藤原季統主にて在せしか遣は抑も如何にして斯る所には在せしや大如何様拙者は熱田大宮司でござる是れには色々仔細のある事にして、傍身も知らる、如く尾張の

朝爲郎八西鎮

國は源氏代々の領分にして、某し去る保元の始め熱田の司官に補  
せられたるも偏に讃岐院の御恩みにして併しながら右判官爲義  
殿の推舉に由れり去れば是非一度は白峯の御陵に詣りて君恩を  
謝し奉りたく思ひながら社務に遠なれば心ならずも日を過  
し今年の秋漸く少しの暇を得て俄かに白峯参詣を思ひ立ち船路  
にて是れに参りました昨日お墓へ首尾克く参詣を済ませ、多年の  
宿望一時に足りて明日は纜を解かんと思ふ今晚不思議の賊難に  
逢ふて既に危き場合を測らずも御曹子の助けに由つて主従恙が  
なきのみならず逢日ヶ浦に不思議の對面身此所へ出で  
りし事の譯は尙更分らず是れに召俱したる者は皆な腹心の郎黨  
ばかりでありますればよしや何事を明し玉ふとも絶へて他に漏  
るゝ事は候はず願くば事の次第を告げ玉へ爲ア、左様でござ  
るか然らばお話し申し上げる此身は承知ある如く保元の亂に父に

椿説弓張月

伴なはれ君に頼まれ奉り百戦百勝の謀略を奉ると雖も御運の傾  
く所か遂に用ひられず君には此の荒磯に移され玉ひ親子兄弟は  
皆な討取られ吾が身ばかり鳥も通はぬ孤嶋に流さるゝこと爰に  
十年、近頃工藤茂光の讒奏に由つて討手を大嶋に向けられ罪なき  
由を都へ上り上げんとは存せしが悲しい哉勅勘の身の夫れも出来  
ず一層のこゝと妻子家來を刺殺して後ち安く自害をせんと思ひ定  
めたるに側女笹良江家來鬼夜及が節義の計略に出し抜かれて心  
ならずも大嶋を退き嫡男爲頼を始め笹良江鬼夜及等は却つて自  
害を致して相果てた是れば後に知りましてア、飛んだ事をし  
たど後悔せしが其甲斐なく逆も死に後れたる身の讃岐の國に押  
渡り新院と御墓を枕として腹を切らんものと思ひて、万里の風波  
を渡り幸ふじて今宵此所までは参りました……」と是より嶋  
君を伴ひたること、又た長女に生まれましたる太郎九次郎丸の事など

朝爲郎八西鎮

を落ちも無く物語りましたから大宮司に於ては或は泣き又は感  
じ俄かに小船を下ろさし家來を爲朝公の小船に遣はしまして嶋  
君を迎へ來らし父と共に押ならべて酒肴を進め又た爲朝に向つ  
て云ふには大尾州熱田の大宮司は尾張氏世々相續致して居り  
ましたが父藤原季兼尾張貞職が娘を娶つて私が季範を生みまし  
た其内新院伊位にましける頃某し始めて司官に補せられて  
今日に至る去れば右左典厩義朝殿とは婿舅の好みさへありなが  
ら彼の人も平治の兵亂に討たれ義朝殿の子孫今は絶て世の中に  
は一人も在さじと思ひ居たるに幸ひにして八郎一人残り玉へり  
吾が家大職冠鎌足の末葉なりとは云ひながら從來源氏に縁深し  
若し許し玉はば某し此の嶋君を養ひて子とし又た吾が嫡孫犬稚  
丸を參らせて御曹子の後ちとし成長の後婚姻させましたなれば  
御曹子の子孫長く繁昌せんか枉げて自殺を思ひ止まり玉へ熱田

月張弓説椿

へ仲ひ奉るべし」と聞も敢へず爲朝忽ち氣色變はり爲首を失  
ふことを忘れざるは勇士の本意なり吾れ誰が爲に命を惜みて  
身を傾はすべきや然しながら人として子を思はぬ者は無い由つ  
て嶋君を殺すは決てく吾が志しとする所に非ず嶋君は速かに  
足下に參らすれば兎に角に養つて玉へ然るに娘のみか吾身まで  
養ひ遣らんと仰せあるなれば是非に及ばず此爲朝は此所に自殺  
して吾が平生の志しを知らせ參らせん」と云はせも敢へず刀の  
柄に手を掛け玉へば大宮司は大いに驚き大先づ短慮召  
さるなよア、吾れ過てり過まてり貴郎を尾州へ送逆れすこと  
は再び申しますまい然らば嶋君は下さるか爲夫は勿論……  
大ア、辱け無しシテ見れば今より嶋君は吾が娘なり犬稚丸は御  
曹子の子なり此一條は努々相違あるべからず」と盟ひを立て直  
儀其坊に於て嶋君と親子の盃をいたし又た犬稚丸に代つて爲朝

の盃を乞ひ受け家來に言付けまして一重ねの盃に烏帽子直垂上  
下を取り押へて是を爲朝に送つてやすには 大是は粗末な品な  
れど季籠が司官に補せられたる頃夫れを祝ひて右判官爲義殿の  
賜はりたるを今日に至るまで秘藏して晴れの日には必ず着用致  
して居りました是に由つて此度も持參致したる次第今犬稚が簪  
引出物に是を參らすべし是を着用あつて院のほ墓に詣ればや  
出だされたる時に爲朝恭々しく押戴き 爲道は辱け無き頂  
戴ものかな遠しく大嶋を出でたる儘に晴れの衣服と云つては一  
着もなし身苦しき姿にてほ墓に詣でん事の心苦しく存じ居たる  
折柄なれば時に取つて吾が爲には是れに増す引出物やあるべき  
誠に此の烏帽子直垂を見ては無き父に逢ふの心地こそすれ」と  
流石の爲朝も頷りに今昔の感に打たれて暫くは涙に暮れて居り  
ましたが漸くに涙を押へ 爲朝は 爲朝君父は遙か那方なる白峯に

立つ雲と共に自害致して失せるぞかし其方は今日より季籠主を  
父と頼みて孝道を盡し成長の後ち犬稚丸の妻となれ必走所夫を  
持てば不義不貞の名を招き父の名を汚がすやらな事があつては  
相成らんとぞや好いか分つたか 子供心に嶋君は唯父に別るゝが  
うら悲しく涙に暮れて返事をなさず大宮司は流石に親子の心を  
察し共に貰ひ泣きを致して居りました内に遠寺の鐘ポーン……  
ポーンと海に響きハヤ東の方には白んで参りました 爲去れば是  
れにて別れずさん」と爲朝公は急に立つて彼の衣服を取上げ  
風呂敷に包んで郷士が一寸旅でもしやうと云ふやうな風をし  
て是れを背負ひ厚く大宮司主従に別れを告げ頓て港に上りまし  
た船の中にて主従は愁然と見送つて居る爲朝は嶋君のソツと云  
ふ泣聲を聞いて是れが長き親子の別れかと思召せば今一過立良  
つて顔を見たいと思ふのが人情然し夫では當人の爲にも成らず

又た勇士に有るまじき業であると思ふに、鬼にして見返りもせず、ス  
タ、  
上げさせ日敷を、尾張の國宮の熱田へこそは若船いたしまし  
たが家の者も始め誰にも今までの事は云つては成らぬと堅く口  
止めをいたしました其所は侍の事で云ひませんと云つたら確か  
なもの昔しの人には義が堅いから誰も爲朝の一條は他言をすじま  
せんでございまして、爲朝公は白峯に於て、自害なされたもの  
と思ふから夫と無くお別れすした日を以て忌日となし、厚く佛事  
を營む誠に感心な方で、鴨君を愛すること一方ならず實に我子  
も及ばぬ程に育てました内に段々日月を經て鴨君は十六歳、犬  
稚は十八歳と云ふ年の正月に婚姻の式を舉げて、爲朝の聲と云ふ  
事に於て犬稚丸改め源義實となりました、此義實は後ちに上西門  
院の判官代と成り、夫婦中睦じくして二人の子を舉げ、嫡子を義信

是も又た上西門院の判官代に補せられ、次男義直は左衛門尉に補  
せられ、此兄弟の子孫は澤山にございます、今爰に一口上ぐるも  
餘計な事に成りますから、此邊に致して置きますが、皆名代の人々  
でシテ見ると英雄の血統には矢張り英雄の出であるものと相見へ  
ます是から爲朝公の遺身の上に就て述べませう

第二十一席

お話し廻りまして、鎮西八郎爲朝公に於ては、大宮司季純主従嶋君  
に別れて二三里の間と云ふものは色々の事を思召しながら早く  
も來られました、時に夜はホノノと明け離れた道々も成るがた  
け人に逢ひたく無いと、間道山道を擧んで、讃岐の國松山の町を過  
ぎ、多度と云ふ所と阿野郡の界ひに出ましたが、往來をする人々の  
物語を夫と無く聞くと、甲「ノウ、ウ、與茂作や、乙「エ、甲「昨夜逢ひ

浦で那の名高エ海賊の渦丸と云ふ奴が大勢の手下を従へて  
船に泥棒に道入つた所が僅た一人の侍の爲に皆んな殺されて仕  
舞つたよ、奈エ話しじやア無エか 乙「へエ、大層な人があつた  
ものだ何んと云ふ人が切つた、甲「サア何んと云ふ人だか知  
んねエだが、世の中には強い人があるもの、マア、海賊が殺さ  
れたと云ふのだから結構じやア無エか」と云つて居る、爲朝公は  
「借ても人の口に戸は立てられぬと云ふが本當だ、夫れにしても  
さの私まるのは早い者だワイ」と實に感心を遊ばして尙只管に  
急ぎました、其お陰か漸く其日の夕方に白峯へと着しました、其時  
年の頃二十二三とも見ゆる一人の旅人が摺れ違ひ様爲朝を盡く  
「と見廻つて 男「モシ少々お待ち下さいまし」と呼び止め  
爲「何んだ拙者か 男「ハイ左様でございます、外ではございませぬ  
が、見受けず上げました所、伊背の高い腕の骨のお太やかなる此

邊で會てお目に掛つた事、無いお方でございます、若しや旦那様  
は昨晚逢日の浦で海賊をお切んなすつたお方様ぢやアございま  
せぬか、爲朝公少し心中に星を差されてお驚き遊ばしたのが却つ  
て隠し立てをして分ると面倒と思召しましたから、爲去れば海  
賊の渦丸と云ふものを切つたのは實は手前だ、若者は飛び退つ  
て、若ハ、ア然ふでございませうと思ひました、イヤ昨夜のお働  
きは、大した事で此近邊から多度邊の大評判でございます、失禮な  
がら、主取仕官の思召しは、伊在んなさいませんか、妙な事を聞く  
と思つたが、爲拙者も見らるゝ通りの素浪人、好き主人もあれば  
主取りの望みなきにも非ず、男「左様でグスカ、夫なれば旦那様此  
割符を一枚お渡し上げます、若し伊通行に成りましたら豊前の  
國益城郡木原山と云ふ所へお尋ね下さい、私の主人は勇士を  
愛し英雄を慕ふ事一方ならず、旦那様のやうなお方が入つて下

朝爲郎八西鎮

さいますれば主人は喜んで必ず重くお用ひに成るに相違ござい  
ません、木原山と云ふ所は那の名高い阿蘇からは未申の見當に當  
つて居りまして十二三里の所でございます、四方は野原で其中に  
ヒヨイと鐘へて居る山でゲスから道に迷ふやふな事はございま  
せぬ、と賊に親切に教へて懐中から一枚の割符を出して渡しま  
した、爲朝は心中可笑くつて仕方が無いが然し賊を退じたのは貴  
郎ぢやア無いかと看破つた眼力は高大なもの、割符などは要らな  
いとは思つたが態と有難さうに受け納めて爲左様なれば是非  
お尋ね申上げるに由つて其節は何分は吹舉をお頼み申す、男エ  
宜しうございます、私は國へ歸つてお待ち受けを致します、傍免  
下さい、と別れた、テ段々と白峯の傍、陵近く参る内に段々と樹木  
は生茂つて参りましてモウ人にも逢はず淋々として居る、爲朝公  
は時分はヨシと夫でも前後に心を配つて彼の風呂敷包の中から

椿説弓張月

取出だした大宮司より引出物として呉れましたる衣服に改め、  
墓近くへ来て見ますれば、千草は一叢の煙りを残して玉殿燈火な  
く秋の盛は五更の夜を照らして名も知れざる草木は道に寒がり  
昔し九重雲深き玉殿金樓に政事をお執り遊ばしたる君も、過ぐ世  
の悪因は免かれ玉はす青塚昔滑らかにして白揚風に戦ぎ旅魂幽  
霊今いづくにか呻吟ひ給ふらん、實に人界の富貴は夢の中なる快  
樂にして妻子珍寶亦た王位も身死しては伴ふ譯でも無く、去れば  
と云つて三界の火宅を出で、永く九品の淨刹に至らんこと尙容  
易でもござります、是を見れば、彼れを思ふに付けて吾身の果ては  
歎くに足らん、思へば果敢なきは身の末にてありけると爲朝は今  
昔の感懐奮の涙に暮れて居りました、が頓あつて頭を上げ、折しも  
差入るゝ月影に、伊廟の柱を見上げれば、二首の歌が書いてござい  
ます



讃岐に詣て、松山の津とす所にて新院在し  
しけん御跡を尋ねしにかたもなかりしかば  
松山の浪になかれて来し船の

やがて空しくなりけるかな  
よしや君むかしの玉の床とて  
かすらん後は何にかはせん

仁安三年十月 日

圓位

とさざいます圓位とは讀者にも承知の通り西行法師でありま  
す爲朝公は是れを見て爲借ては去年の冬西行法師も爰へ参詣  
を致したと相見ゆる」と點頭しながら石の玉垣の斜めに成りま  
した扉を押開きお墓の前に降臨りまして借て身を慎んで仰せあ  
るには爲君十善万乘の聖主として鏡張を北関の月に輝やかにし

玉ひしも今は空しく斯の如き國の果なる南海の俗に混す露を拂  
つて御跡を對ね奉らば秋草泣いて涙を凝ぎ嵐に向つて君が墓を  
問へば老槍悲みて心を傷ましむ佛儀を見せして唯朝の雲夕の月  
を見る法音は聞へずして只松の響き鳥の聲を聞く軒傾きては曉  
の風寒く夢破れては夜るの雨拒ぎ難し今昔の御有様最と淺まし  
くも痛ましく思ひ奉れを微臣が孤忠を述るに由なく既に勢盡き  
力極まりて今生の誠心を訴へ後世の苦樂を共にし奉り君に無情  
なかりし者共を盡く執り殺さばやと思ふのみ測らずも大嶋を流  
れ来て尊靈を驚かし奉るものなり」とすし終つてハナハナと涙  
を流し頓て夏尙ほ寒さ及を抜いてアツヤ腹に突立てんと致しま  
したか此時怪しい哉手足忽ち麻れて刀を突立てるごとが出来な  
く成りました時に見ヶ獄の方に霞雲たな引いて月は半面を顯は  
しなから影最と暗くビカッくと云ふ電光其光りはお墓の中に

閉き渡り、ド、ド、ド、と云ふ山風しど共にチラ、と云ふ  
木の葉の散る有様、其の木の葉の散る中より武者姿の人々四十餘  
人が前供を致して出で来るかと思ひ見る間に次に御輿が参りました  
御輿を擔ぐ者は人間にあらせして象の鼻筋の味でございまして  
左右の腕には翼が生へて居ります道は抑も如何にと見てある内  
順て御輿を填の邊りに極き据へました、武士は二夕側に列を正し  
ン、ソ、ソ、ソ、と云ふ警蹕の聲と共に御輿の中より玉音高く  
朝倉を只いたづらにかへすにも  
釣する海士の音こそ泣かるれ  
と一首の歌を吟みやをら立出で玉ひ設けの柵に着き玉ふを見奉  
れば新院此世に在ましける日の面影に露達はせ玉はず唯幾分は  
寒れ玉ひましたハツと心注いで邊りに扣へし侍を見れば玉體の  
左手の方に扣へしは左大臣頼長公以下下野判官正弘其子右衛門

大夫頼弘等に至るまで廿六人、又た右手には六條判官爲義其子左  
衛門尉頼賢、掃部介頼仲、加茂六郎爲宗、源七郎爲成、源九郎爲仲、父子  
六人、次に扣へしは平馬助忠正、其子院藏人長盛、次男皇后宮次長忠  
綱、三男左大臣勾當正綱、四男平九郎通正、次に村上判官代基國を始  
めとして一人當千、万夫不當の士廿四人、各々白地錦の直垂には白  
木の弓を挟み、鴻の白羽の征矢を負ひたるが怒氣面に現はれて、ホ  
ツと吐く息は炎の如く爲朝は遙か此方の草中に隨躡つて居りま  
した、が父爲義の面を盡く、と見てあれば姿形状は變らねども  
髪には雪の如き白髪を置き、掻き亂したる後毛は銀の針の如く類  
の皺は逢日の浦に打寄する浪の數より多けれど、尙猛き武者振り  
にて長緋の直垂に白糸絨しの鏡を着なし恩賜の御劔、鶴の丸を帯  
びたり、凡そ尊さも卑しきも賈こさも感かなるも親子の情に變り  
はございませぬ、爲朝耐も兼ねて「父上お懐かしや」と聲を掛けん

と致しましたが玉座近ければ夫れも畏れ多く爲義も爲朝の居る  
ことを知らずと相見へまして此方を見返りますることもござい  
ませぬ其時左府頼長左右を屹度見渡しまして頼も御敵義  
朝をば君臣在世の日に誅させ玉ひ彼れは那れにて宜しけれと憎  
きは平氏の者共此上は如何にして彼等一門を滅すべきや各々謀  
略あらば遠慮なく上げて宜しからう此時爲義座を進み爲  
去んぬ清盛驚才の小人なれども過世好くてか官祿人臣の極を究  
め一族皆な朝恩に誇つて暴虐無道なり天其の囁れるを憎むこと  
久し然りと雖も重盛徳行の聞へ高く忠にして且つ孝是に由つて  
外は其の悔りを拒ぎ平家の尙ほ滅亡致さざるは重盛あれが故下  
とざる然しながら最早彼の命數も十年とは越ゆべからき由つて  
彼れだに亡くば己れを滅亡致すべき時節もいはん」とす上げま  
した新院是を聞し召して新院が憎くしと思ふものは唯清盛の

みには非ず重盛だに世に無くば雅仁に物を思はせ鳥羽の離宮に  
押籠めさせ太政大臣以下四十五人の官職を止め關白を太宰權帥  
に遷さしなば忽ち人望を失つて不思議の珍事出で來らん其時爲  
義は先陣を致し忠正は後陣を致し法住寺殿の西の門より入り奉  
れ彼れ君臣を此の讃岐の浦にをびき寄せ海に沈ますべきなり  
爲なれども法住寺殿の門々は不動明王大威徳の固めなるに……  
去れば容易には入り難からん夫を如何にさせ玉ふや由つて西八  
條の清盛の亭へ渡御あるべきや御取斗ひこそ面白からん  
同聲を揚げて「爲義殿の仰せ道理至極夫こそ定めし面白からん」  
と御答へに及びました新院打ち笑み玉ひて新院らば既に怨敵  
誅討の機は是れにて定まれり未だ忠臣の子孫に賞を行なはず朕  
が爲に命を落せし者一人として粗略に思ふにはあらざれども就  
中爲義は嫡子義朝に引き離され數多の子供を連れて参りしこと

朝爲郎八西鏡

何れの日にか忘れべき痛ましきは幼少の者共皆な保元の亂に首  
を刎ねられて今は唯八郎爲朝のみ生き残り去れば彼れを日本  
六十餘州の總追捕使にしたくは思へど如何にせん義朝が子頼朝  
は行末の武運洪大にして天既に是れに許せしを以て朕が力にも  
及び難し爰に爲朝の次男爲雅九は足利義康密かに養ひ取つて今  
ま現に下野にあり是れが子孫を以て天下の武將と仰がし又た爲  
朝が未だ生まざるの子を以て某しの國の君となさん是れ朕が最  
負の沙汰に非ず爲朝夫妻家の家來等か忠義の善報其餘慶子孫に  
及ぶものにして自然の道理なり見よ頼朝一旦武運に目出度  
くて平家を追討し賞罰其手に出づると雖も是が親の義朝が父を  
殺すの惡報其の餘殃子孫に係り頼朝兄弟不和にして有功の弟を  
殺し父子三代僅かに四十年にして自滅せん然も其終る所病死に  
非ざる改元の年に死するを以て驗すとべし夫れ善に必ず善の

月張弓説椿

報ひあり惡に惡報あるは天地自然の數たり然るを爲朝世を果敢  
なり身を悲しみ自殺して失せんとすること極めて策の得たるも  
のに非ず今年冬の半ばに至つて肥後の國に赴きなば測らずも故  
き者に逢ひ年頃の艱苦を互ひに物語つて苦しみを忘るゝの時あ  
るべし然りと雖も命運尙全たからず再び合して再び離れ其徒又  
た非命に死するもの多し是れ忠義の爲とは云へ爲朝年來多  
敵を射殺したる其の報ひあると知る時は敢て恨むに足らず世の  
常言に苦中の苦を喫し得て方に人の上の人となるべしと云へり  
事に迫りて死を輕んづるは日本魂いなれど多くは虚りの淺きに  
似て學ばざるの過ちなり然ふでは無いかと仰せあれば爲義は世  
にも辱けなき氣色にて爲愚臣か子供許多ある中に爲朝は其の  
智勇兄にも弟にも勝れば分けて最と惜しくひつるに彼が子孫  
斯く莫大の果報あらば喜び是れに増すことなし是れ然しなから

朝爲郎八西鎮

君の御思みの然らしむる所でござると憤んで御禮上げました  
から夫れに居並んだる人々も共に喜びを述べ、正弘頼弘御配に候  
とて御盃を鞠め奉れば、新院快く聞こし召して頼て群臣に天盃を  
賜りました、頼長以下次第に盃を巡らして各々飲み廻はると相見  
へました、新院始め奉り頼長公爲義朝臣以下の群臣の内より  
猛火燃出でアツと叫ぶ程こそあれ合して一團の鬼火となり金光  
を發ちつゝ、兒ヶ嶽を差して飛び去り玉ふ、是れや此の天狗道の苦  
患かと思しは、南柯の一夢にて爲朝は先刻短刀を抜きたる儘右の  
玉垣にもたれ、吾にもあらで居りましたが、覺めて歎息し、折し  
も雲間を啼いて過ぐる初鴈が音を打ち仰げば、月はいつしかに雲  
に隠れて雨は蕭々として降出でました、爲朝は夢にてあつたるか  
君と父とが夢中に盃を現はして後の事を示し、自害を止め玉ふと  
見へたりシヲ見れば、輕々しく死すべき場合に非ず、且つ新院御興

月張弓説椿

の内より聞へ知らし玉ひし御製に  
朝倉やたいいたづらに歸すにも  
釣する海士の音こそ泣かるれ  
とあつた今まお歌の心を思ふに、朝倉は筑前の國上座郡にあり、齋  
明天皇朝倉の宮に幸させしに、彼所にて崩御まし、去れば新院  
も此の荒磯にて崩御し玉へば、直に朝倉の木の丸殿に思ひ寄せ、爰  
に來れる爲朝を徒づらに歸すことは、本意に非ずと御慈しみの深  
きを三十一文字に知らし玉ふたるに、相違無し、實有難きことのあ  
るものかなと、嬉し涙に暮れて、通宵御墓に候じ、さて天も明けな  
んとした時に、  
朝倉や木の丸殿に入るかひは  
君に知られて歸る嬉しさ  
斯く詠んで手向け奉り、願て松山に退きましまして、暫くの間は彼の山

朝爲郎八西鎮

中に身を忍ばせ遂に示現に任して其年の冬の中ばに至りまして  
山を出で肥後の國へと赴きました誠や世の中に不思議と云ふも  
のほあるものにて此夜爲朝の見玉ひたる夢に逢はせ其後ち都に  
は様々なる怪しき事が多く是れも偏に讃岐院の崇りならんとあ  
つて治承元年六月二十九日追號あつて崇徳院と諡を奉りました  
斯ういふ事にして尊靈を慰め奉りましたが少しも御怒りは直り  
玉はぬものと相見へ同三年八月には小松内大臣重盛逝去し清盛  
益々暴悪を勝手氣儘に致しましたが終に物狂はしく成つて色々  
様々の怪癖多く是れも又崇徳院の怨靈の遊ばす所でありませう  
平家源氏の後彌々宥め参らせん爲に昔し御合戦ありし大炊御門  
が末の住所の跡に社を造りて祝ひ奉り左府頼長公に贈位贈官あ  
りて太政大臣正一位を贈られました是は元暦元年四月十五日の  
事でございます去れば平家讃岐の浦々に没落して滅び失せたる

月張弓説椿

も全く彼の御崇りでありまますと云ふ事を申しまます今考へて見ま  
すと平治元年正月二日左馬頭義朝朝臣長田が爲に殺され正治元  
年正月十三日右大将頼朝卿薨せ是は建久九年十二月落馬なされ  
たのが原因に成つて居ります引續いて承久元年正月内大臣實朝  
公禪師公曉の爲に殺され父子三代皆な正月に於て薨じて居られ  
ます又た各々改元の年でございませす實に不思議な話して後ち四  
十四年を経て元久元年七月十五日義朝の孫從二位左中将頼家朝  
臣伊豆の國脩善寺の浴室に於て害せられました是れ偏に義朝が  
父を殺すの悪報斯ふなければ成らない是を見彼を見るに就ても  
君には忠義親には孝道を全くしなれば成りますまい是は原書  
にも馬琴生先が堅く戒めてございませすが口演者も老婆心を以て  
爰に一言を述べ置きます

話し元に戻つて嘉應二年冬十一月下旬鎮西八郎爲朝に於ては密かに讃岐の國松山を立出でまして肥後の國を差して立出でんと致しましたたが船は先達逢日の浦に捨て、來ましたから今戻つた所である譯は無、由つて今度は志度の浦から便船を得て十二月の頃、肥後の國宇土の郡宇土濱と云ふ所に着きました直き前に宇土山と云ふ山が聳へ、此山に登つて筑紫海を見下せばしらぬ火を能く見ると云ふしらぬ火と云ふのは沖に燃ゆる所の怪しき火でござい、ます是を見てさへ亡き妻の白縫姫の事を思ひ出だされて今昔の感に耐へず九州は昔し僅かに三年程の内、打ち從へまして菊池原田さへも頭を上ぐることに叶はず万事自分の勝手に出づるにも出るにも前驅後從のいかめしきに侍づかれ玉腰金

殿に住ひして富貴二つながら得たる身でありながら今は昔し一睡の夢と醒めて變らぬものは海山ばかり斯くまで我身も成り行くものか、此所に從ふものど云つては一本の杖一蓋の笠に過ぎず浦吹く風水鳥の羽音さへ心を傷めずと云ふことなし、今君父の示現に由つて此國へは來たやうなもの、何地に行き何家に宿るべきや、ア、阿蘇の神社は忠國(白縫姫の父)に面會致した前の事もあるれば此度も先づ役の御社に詣で、行末の事も神意に任し奉らん」と斯ふ考へましたから宇土と記帳と云ふ所の堺ひに成つて居る縁川を打ち渡つて瀧の里状の縣と過ぎりて益城郡に入り玉へば日もハヤ夕越へて天さへ最ぞ掻き曇り、雪はチラ／＼と降つて参りまして寒さ耐へ難く去れど此邊は荒々たる野原でございまして小徑に交る枯尾花のガサ／＼云ふ音よりは向ひに高く聳へたるは木原山にこそと見玉ふにも、此秋白峯にて旅人が言つること

を思ひ出でし此邊に然るべき武士の住ひするとも見へず、道は如何にせん、と段々に行き玉へば雪は益々降りしきりまして日も正に暮れ、なんと致します、折しもあれヒーン、と云ふ野飼の駒の泣く聲高く相聞へまして何んだか騒々しく是は大方馬共の驚き騒ぐことならんかと怪しみながら屹度向ふを見てあれば果して雪を蹴立つて此方に走つて来るものがございます、近く成る儘に能く見れば其の大なること牛に等しき野猪の矢を一本喰つた程、我猪でございます、爲ハ、ア倍ては野駒の嘶いたは此の猪の爲めならんか、彼如何程のことやあらんと道を開いて立ち玉へば猪は爲朝を見て大いに怒り小薙刀を押並べたやうな尖き牙を噛み鳴らして針の逆に等しき毛を逆立てブーッ、と云ふ鼻風を高く吹いて爲朝に飛付いて参ります、爲朝はヒラリと身を捻つてツと跡邊に立ち玉へば猪は益々荒立つて蹄を蹴返し漸くに頭

を巡らして再び掛けんと迎ひ来るを爲朝は早くも足を揚げて猪の脇腹ハツシと蹴る、蹴られて少しく怯む所を右手の岩に押付けつゝ足に任して踐にヒリ給ふ程にさしもに猛き荒猪の忽ちに原山の麓より白木の弓を握り持ち猪を負ひ來たりたる獵夫喘ぎ走り來り雪あかりに爲朝を透し見て又た猪の倒れたるを見、且つ驚き且つ喜び傍へ参りまして、甲私は年來向ふの深山に別け入つて獸物を射て捕るを業と致して居ります、唯今此猪を射て箭は二々筋負ひながら猪は驚れず、尙かけんと向ひ來る其勢ひ敵し難く思ひましたから少しの間遣り過さして垂れたる血を便りに是まで追つて参りましたが御身容易く此猛獸を打留め下され、賊に有難ふ存じます、實に勇猛の程恐れ入りましてござい



相分りませんが聲の様子に未だらう若き男子であります其時爲  
朝は獵人にお向ひ遊ばして爲世の謎に黙窮まる時は噛み人宛  
まる時は盗むと云ふ吾れ元來猪を殺すに心なく彼れ自ら來つ  
て倒れたり然るを斯く賞美せられ吾れ又た自負する時は人の勞  
を盗むに等し吾が力盡の勝れたるに非ず御身が矢の鋭きなり  
獵人聞いて益々感心なし獵イヤイヤ恐れ入つたるは一言御庇  
陰を以て此猪を得たれば私し當分有福に送れまするイヤ先づ汚  
苦しき所なれど某しの宅へ涉案内をす上げたく是非同道下さ  
れたく爲イヤ思召しは辱けなれど拙者は今晚徹しにも阿  
蘇へ参りたいと思ふ者猶豫は致し難き身故……獵イヤでは  
さいますやが當地より阿蘇までは未だ十一里もござらう馬に  
も召して道案内なくば此雪では逆も道に迷つて參ることは出来  
ませぬ曲げて今夜は私の宅に泊り明朝御立ち遊ばした宜しう

ございませう」爲朝は其深切を喜ぶと雖も止まり玉ふ景色なく  
爲再三の深切を無にするは心苦しけれど是非とも御別れをする  
獵左様でございますか夫れ程の仰せは能堰の用向きでござい  
ませうから夫ヒヤア無理にお止めずしは致しません就ては此の  
臥下でございます此中には酒が一杯這入つて居ります私山巡り  
をする命の綱と頼む酒是を半分分ちて猪を射留め下されたる  
御禮と致さん先づ此所へお掛けあるやうに」と傍らの石の上の  
雪を拂つて爲朝に腰を掛けさせ其身も傍の木に根に腰打ち掛け  
まして鏡の間から金の盃を取出し獵先づ私しが御毒身を致  
しませう」と自分になみく」と注いで一杯を煽をり只管爲朝に  
鞠むれば爲朝も今は解し兼ねて而もモウ少し腹が北山時雨と來  
て居るから雪を肴に噛んで一椀を傾け爲イヤ大きに傍馳走に  
成つた」と厚く獵夫に謝して笠の紐を結び辰巳の方を差して立

去りましたが然るに酒の酔が段々出て参りまして眼はフラ、  
為て参り一步は高く一步は低くヨロ／＼足の躓ひ所を  
知らず爲道は不思議なことがあるものかな儘かに一杯の酒に  
斯ふ酔ふと云ふことば無い身軀の加減にでもあるか」と咳きな  
がら強て走らんとするに雪の中に埋めて有りました釣縄に足を  
掛けられド！と其場に倒れました酔つた人と云ふものは妙なも  
ので歩いて居る内はヒヨロ／＼しながらも歩くが倒れたり云  
つたら容易に起上る事が出来ないもので其儘に其所へ倒れて  
居ります所へ向ふの小屋の中から鹿の皮の衣を着た女子が此方  
を眩度見澄じて忙がはしく走つて来たが物をも云はず爲朝を取  
つて押へ忽ちの内にはヒシ／＼と縛めて小屋に歸り其儘柱に縛り  
付けて置きましたたが爲朝公はモウ此時は酒の爲か前後を失つて  
仕舞つて少しも存じ無い様子暫く立つと云ふと以前の獵夫は

彼の猪を縄を掛つて四足を縛り最と重さうに引摺つて参りまし  
たが女子は手綱を以て出で迎へ女ヲ、大層好き得物がありま  
したる様子シテ宅にも面喰い殿ぬしき侍を細持つて括し宅へ連  
れて来て置きましたたが痛く酒に酔ひたる様子所天が例のお酒を  
飲ましたのではありませんか」彼の獵夫は聞いて點頭しながら  
猪を門口に引摺り込んで戸を閉め前後も知らず寝て居ります爲  
朝の様子を見て其女房に向つて云ふには「獵此男は私が打漏ら  
した此猪を美事に打留めて呉れた中々の豪傑其の躰たらく物の  
用にも立つべき人物と見て取りたれば誑いて例の酒を勸め勞せ  
ずして猪子と人との得たのである山の樂に連行きて此事をや上  
げやう女夫が宜しうございます」と云ふと女は甲斐々々しく  
箆を着て笠を被り夫婦は爲朝を中央に挟んで宙に擔ぎ段々山  
路を登つて行く道も餘程来た時分爰に鹿垣を結ひ廻はして棟を

朝爲郎八西鎮

高く作つたる薬が一軒あります。其跡稀なる深山には似氣なく其  
様子は何となく氣高い獵人や何かの住ふべき家では無く一寸時  
に逢はざる武士が山籠りをして時世の動靜を窺ふと云つたやう  
な有様彼の獵人夫婦は門を遣入つて又た其次ぎの茅門を遣入つ  
て書院めきたる廣庭に爲朝公を引据へました。テ先づ一人奥に入  
り暫くすると出て來ました。其妻に向つて云ふには「獵人公は  
未だお寢みなく丁度好い所であるから自分て其侍を見やうと  
の仰せモウ大抵酒の醒むる頃じやアあらうけれども解毒を一服  
飲ました方が好からう。女、ホンと然ふでございます」と女は懐  
中から一ツ服の薬を取出してしまして筒の水を杓子に受けて件  
の薬を爲朝公の口の中に入れてました所が咽喉が乾いてお出でな  
る所と見へて杓子の水を美醜に呑み盡して仕舞はれました。然  
るへ丁度獵人と同じやうな姿をした男が三四人手燭を持つて様

月張弓既椿

側へ出て參る跡から靜々と立出でましたのが此家の主人か三十  
ばかりの顔の付の別嬪緑の如き黒髪を髷結際から切下げて身に  
は白綾の三枚小袖を着し、錦の袷袢を掛け雄手には白柄の薙刀を  
突立てたる事にして唯手には水晶の珠數を爪繰り年頃の五十に  
近き大男の腹巻して長やかなる刀を帯びたるを従へ設けの座に  
着き羌音高らかに「女生捕り來りしは抑も何者なるか……」一  
聲爲朝は是れに不圖眼を開きて邊りを見廻り、不思議な事と思召  
して爲ハテ何う云ふ譯で斯の如く戒められたるか、全躰此所は  
何んと云ふ所であらう」と唯那方此方を見て呆れ果てお出で遊  
ばした。然しながら爰が英雄斯んな細細は全身に力量を入れ、ば  
切つて仕舞うのは繼作も無いが先づ如何なる事をなすか彼等の  
なす所を見やうと早くも腹の内には思召して首を垂れて居りまし  
た。其時主人と見へたる彼の尼に於ては爲朝公に向ひ「尼旅人其

朝爲郎八西鏡

機に驚き玉ふな其許を殺害せんと云ふにも非ず豫て家隸夫婦  
者に命じて物の用に立つべく見ゆる旅客の麓を過ぐる事あれば  
酒に酔はして此所へ連れ來らしむ夫れには深き一つの頼みあれ  
ばなりされと明ら様に山に誘ふ時は其人必ず吾等を賊ならんと  
恐れて従がはず是れ故に瓢の中を二ツに割りて仕切りなし一方  
には毒ある酒を入れ又一方には毒なき酒を入れ毒味と云つて香  
む時には指を以て毒酒の口を塞ぎ澄みたる酒を呑み其人には毒  
ある酒を呑まし痛く酔はして密かに是れに連れて來てさて解毒  
の藥を呑まし既に山に止まる者は二三十人に及べり若し妾が云  
ふ所を承諾せば戒めを解きて事の由を申け又承引すと云ふ  
なれば是非に及ばず不惑ながら生かして歸す譯には成らずサ心  
を定めて返答致せし……とす言葉の節々は女子に似合はぬ立  
派な有様爲朝益々怪しみまして思はず頭を上げ盡く  
尼の面

椿説弓張月

を打眺むれば尼も又た始めて爲朝の面を眺め互ひに不審の胸の  
内尼は大男を見返りまして女其方彼の男を見よ近頃大嶋にて  
自衛し玉へりと噂さし聞ける八郎御曹子に少しも違はず不思議  
なこともあるものかなと云へば仲んの男は膝を進ませ燈火を  
爲朝の方へコト差向けまして男成る程仰せの如く御曹子生き  
寫し……」此時爲朝は心中ハツと思ひ付き爲朝、然ふ云ふ汝  
は八丁礫の喜平次と見たは癖目か又主人の尼は十年以前の秋  
筑紫に於て討死なせし吾が妻白縫にはあらざるか如何に爲朝を  
見忘れたりや」此の一言に尼も喜平次も其他の家隸等も俄かに  
騒ぎ驚き思借ては御曹子にて在せしか我君とは思へども世に  
存命へ玉ふとは存せぬものから尙疑ひて居りましたが這は抑も  
如何に勿躰なし」と且つ喜び且つ悲しみ白縫は喜平次と共に憐  
て忙めへて廣庭に下り立ち自身と其戒めを解き捨て塵打拂つて

其手を取り上座に方に招待すれば爲朝は其儘上座にお着きに成  
りました此時の白縫と爲朝公の心の裡は何んなものでありまし  
たらう拙なき辯舌の能く述べき場合でありませぬ其時に爲朝  
公は白縫姫に向つて仰せあるには爲借て白縫和女は保元の反  
亂に父忠國と諸共に討死して此世に無しと聞いたるが斯く無事  
に今日世に在ること不思議と云ふも餘りあり此所は肥後の木原  
山にはあらずして死出の山路には非るか先づ夫れから物語りを  
致して好からう「白縫は嬉し涙を押拭ひ自其のお疑りは重々  
は道理思ひまはせば十年跡太宰府にて死ぬべきを父の遺訓止み  
難く據るなく八代を始め其他の侍女と連れ城を逃がれて出で  
したが寄手の射掛くる矢は雨よりも激しく容易に出ることの出  
來ませぬのを彼の君が愛育し玉ひたる野風と云へる狼が敵を  
け散らして道を開き其身は敵の爲に射殺されました其隙に主従

は辛ふして漸く逃れ出でましたが侍婢等は那方此方に敵の爲に  
押隔てられ八代も又た流れ矢に命を落し妾の身も既に危き其の  
場合を喜平次が近江より歸るに逢ふて必死を逃れ翌日八九人の  
侍女に巡り合ふて主従諸共に四國に押渡り讃岐の水崎に隠れ住  
ひ琴引の移社にて不思議に武藤太と云ふ者に出逢ひ彼が御曹子  
を誑りて佐渡兵衛尉重貞に生捕らせし事を漏れ聞き其の仇なる  
事を知つて彼の武藤太を殺し聊か君の無念を晴らし奉りました  
た然るに其頃君には大嶋へ誦され玉ふと聞くものから先づ喜平  
次を都に上ぼして事の眞偽を窺はせ借て妾は武藤太の首を携へ  
侍女等を連れて茂光を追留め御曹子を救ひ出だし参らさんと思  
ふて慌しく讃岐の國を出立いたし漸く千貫の旅館に追付き其夜  
喜平次が茂光を覗ひ撃たんとするに逢ふて主従共に茂光に夜  
討ちを掛け斬く御曹子を救ひ出だし参らせたるに殘念なるかな

朝爲郎八西鎮

夫は賈物でございまして却つて茂光に謀られたるを知りました  
がハヤ其時は十日の菊六日の菅浦段々其賈物を責め問ふに御曹  
子には疾くに道を變へさせ問道より既に大嶋へ送りたる跡なり  
どのこと時に又た〜起りたる茂光の伏兵危き中を漸くに切抜  
けまして再び主従讃岐の國に立歸り九牛一毛は新院を盗み出た  
し奉りて大嶋に渡り御曹子と諸共に事を起さばやと日々苦慮致  
せしが直嶋の伊所は護る者嚴重にして八騎十騎の女子等にては  
征め寄すること思ひも寄らず去れば世渡る道のなき儘に喜平次  
は山に入りては薪を構り炭を焼き兎も角もして貧しく月日を送  
る内侍女等もチリ〜バラ〜と成り行きまして彌々宿望を遂  
ぐるに由なく時に長寛二年八月下旬妾不忠にも又た畏れ多く  
も直嶋の荒磯にて新院に咫尺し奉り夫婦が孤忠を聞へ上げて出  
で玉へと勤め奉りしかを諾なひ玉はせ汝等夫婦が誠忠は朕がな

月張弓説椿

き後ちに報ひ参らせん今より五七年の後ちには必ず爲朝に逢ふ  
ことならん然しなから夫婦の縁既に絶へたるに似たれば再び逢  
ふと雖も再び離れ老を偕にし穴を同じくする事は出来難からん  
是れ天の命なりオシヤ果敢なき契りなりども時を待つて面の  
なり良人に逢はば年頃の憂苦を語り慰むるのみならず心やいな  
る事もあらんと説き示し玉ひ生きながら魔道に入つて悪想を顯  
はし玉ひましたるが多分は御靈の幻に荒磯に出で玉ひたるか其  
の次の日に新院は崩れ玉ひし事實に不思議と云ふも餘りある事  
に致して彼の君の追福は三年程は忍び〜に志度の浦にて必ば  
かりなる佛事を營み居りましたが終に彼所にも住ひ兼ね喜平次  
等を連れて密かに肥後の國に立歸り此木原山に隠れ家を求めま  
したる是に住ひたる當時幸府にて吾が父忠國の介錯し館に火を  
掛け腹切つたる高間四郎が一子太郎原鑑と云ふ者獵夫と成りて

麓に居りましたに由り測らずも名乗り合ひました但其志しは父  
の四郎に劣らざる若者又た彼所に居る若き女は磯萩と云ひて年  
來吾が身に宮仕へせし侍女にして他の侍女は妾が貧しく成るに  
付け次第に疎く成るにも似ず彼ばかりは忠義少しも昔日に異な  
らず且つ心雄々しければ磯萩を高間太郎が妻として彼等夫婦を  
ば麓に居らしめ此邊りを過ぐる旅人にて勇者と見ゆる者あれば  
前より上げたる如く僞つて此の山寨に入れ心の程を申聞けて若し  
従はざる時は心には無き不感な事なれ是れを失ひ居りました  
は唯他に事の漏れざるやうにせんが爲斯の如くして數多の勇士  
を得密かに大嶋に押渡つて殿を迎ひ取り玉はんとするの外何ん  
の考へもささいませぬ然るに君には去る四月下旬に茂光等に征  
められて館に火を掛け自殺なし玉へりと聞くものから多年の宿  
望は一朝の泡と消へて口惜くとも悲しども覺ゆるものなくよ

しや万里を隔つとも互ひに存命へ居る内は廻り合ふ時節もあら  
んど思ひし事も空頼み今日まで生きて居らすんば斯ばかりの歎  
きは見まいと今更に女心の果敢なくも人をも恨み身をも恨み羅  
々益々憤りの遣る方なく此上は工藤茂光こそ良人の仇せめては  
彼が首を刎ね亡き夫を祀り参らせて直ちに自害を致さんと先づ  
頭髪を切つて世に亡き志を示し形ちは尼に似たれども心は修羅  
の街に等しく益々高間磯萩に催促して日夜身方の勇士を集めハ  
ヤ今日では三十名近くに成りました此上は一日も早く東を差し  
て船にて登らんと今日も今日とて喜平次等に申付け既に其仕度  
に取掛りて近々東上の運びに致しましてございます然る所が  
怪しきは昨夜の夢夫は年の頃三十に近き女子が忽然と妾の枕邊  
に佇立み君が年頃戀しと思召す其人は明日の夜此所に着し玉ふ  
其上にて事を宜しきやう測り玉へ此時妾は夢心にも最と怪しく

抑も御身は何地より來り玉ふかと問へば彼の女答へもせず委は  
忽ち揺消す如く還は不思議と思ふ時南柯の夢は覺め果てし座敷  
の内には生々しき鬨と桂あり不思議なこともあるものよと思ふ  
内に夜は明け離れ喜平次を呼び集めて此の夢を占なはするに皆  
々唯不思議の思ひをなすのみにて是れと云ふ説を立てべき者も  
無く然るに果して御曹子今宵是れに御出でありし事夢の告げに  
少しも違はず斯く御曹子に巡り會ひ奉ること新院の仰せありし  
事も思ひ合はされて勿然なく今日は何なる吉日ぞと天を仰  
ぎ地に俯して十年以來の憂ひの数々一々是れにてお述べに成り  
ました併し是は爲朝公は此存じなくも讀者に於ては白縫姫か今  
までの苦心は前巻に委しく述べてある所をございませすから既に  
承知の事故略いたして荒筋だけを述べて置きます、白縫姫の言  
葉の終るを待ち喜平次も餘りの嬉しさに尙姫の言ひ漏らしたる

こと杯物語つて君にす上げる、此時高間太郎夫婦に於ては縁側に  
拜伏して太私し父と共に阿蘇家に在る頃は漸く八九歳にして  
君を能く見知り奉らすとは云へ勿然なくも君を縛り奉りて何ん  
と申譯のいふべき幾遍にも寛仁大度の沙汰を以て其罪を御許  
し賜はりたし爲朝は高間夫婦を盡くしと覺ありまして  
爲イヤ其様に詫ぶるに及ばず併し太郎其方は是れを知つて居る  
か」と仰せながら懐中から一枚の割符を取出して見せ玉へば  
高間の太郎益々驚いたる様子でございまして太サ、是は私が  
此年の秋白縫姫の代参として白峯のお墓に詣でし時途中にて旅  
客に渡したる割符でござる、借ては其時の旅人は御曹子にて在せ  
しよな實に面目次第もございませぬ盤へ一度にてもお目通りを  
致しながら其の面影を忘れたることを愚かの至り………爲ヲ、夫  
れで相分つた吾れ此秋白峯にて汝に呼び掛けられた日は必死を



極めた折なりしが汝が人を知らぬことの賢しきに愛て此の御符を  
受け納めしが是を此所に巡り合ふ深き主従の縁ならん吾れ若し  
其方に戒められずば終に白縫に逢ふ由なからん必ずしも耻づる  
事勿れ」と却て高間磯萩を賞美して又た白縫喜平次が年來の苦  
節物に對してめげざるを只管賞讃なし、白縫の夢にて得たる種と  
脚體とを取り寄せまして是を垂くくと見玉ひましたが忽ち涙  
に暮れ玉へ爲す、道は疑ふべくもなき笹良江の桂なり然らば  
此脚體も彼が白骨なること疑ふに及ばせ……」と願りに涙に暮  
れ玉ふを見て白縫喜平次はすすに及ばず高間夫婦も不審に思ひ  
まして白笹良江と仰せあるは抑も何人の事でありませう  
去れば何を隠さん笹良江とは大嶋の主管にて三郎太夫忠重と云  
ふ者の娘にて其志し信やかにして父に似す凡そ十年程の間吾れ  
に給事へ致せし故面目なきが爲頼朝稚嶋君と云ふ三人の子供を

設けたり……」と是より大嶋にての始め終りを物も細かに物語  
り、其池はつちやう嶋鬼ヶ嶋へ渡りたること鬼夜及の事長女の身  
の上太郎九二郎九の事はすすに及ばず爲頼笹良江、鬼夜及が大嶋  
に於て自殺なしたる一伍一什又た思はずも來嶋まで退きて始め  
て妻子の死したるを知りて長女が親類の四男五郎の爲に自殺を  
止められ其場にて自殺することを得ず漸く四男五郎を賺かして  
未嶋へ歸らし長女と二人の子供等には逢はずして頓て來嶋を漕  
ぎ離れ遂に設岐に押渡つて逢日の浦にて大宮司季範に名乗り合  
ひ是に托して嶋君を尾張の熱田に赴かし次の日新院の御墓に參  
詣して多年の孤忠を訴へ奉り既に自害せんと刀を抜きたれを俄  
かに手足麻れて茫然たる其中に君父の亡魂幻に現はれて外なが  
ら自殺を止め冬の中ばに至らば肥後に赴けと宣ひたる事又はお  
語しは前に戻りますすが足利義康の郎孫梁田時員と云ふもの密や

かに大嶋に使ひして朝稚を下野に迎ひ取りたる事等の長物語りを  
を殘らす落ちもなくお物語りに相成りました喜平次高間磯次は  
明く度々に歎賞なし分けて白縫姫に於ては或は泣き又は喜び爲  
頼の純孝笹良江長女の苦節鬼夜及の忠義等を惜まれ朝稚嶋君太  
郎丸次郎丸が俄かに孤子となりたるを悼み玉ふ程に爲朝は亦た  
忠國以下八代等が討死を哀れみ歎き殊に畜生とは云ひながら野  
風が主に代つて命を落したることを感激なし昔し琉球まで尋ね  
行きて上皇へ奉りたる鶴が不思議にも大嶋へ來りし事を語り出  
でられ爲吾れは白縫が世に無きものと思ひ又た其方は吾れを  
死せりと思ひ居りしが今測らずも無事に面會いたす事是れや盡  
せぬ夫婦の縁ならんかア、不思議喜ばしや」と君臣夫婦の長  
物語りは庭に降り積む白雪の夫れならで中々盡さうにも相見  
へませぬ常に變りて寒の賑ひ何と無く和氣一堂に満ちて最

とも目出度き限りであります内に長き冬の夜も明け離れんと致  
すの体抑々高間太郎に誘はれて此山塞に止まりました勇士等と  
云ふのは皆な平家の悪政を憎み爲朝の智勇を欣慕する人々ばか  
りでございますから御曹子が不思議にも御歸國遊ばしたと云ふ  
事を聞いて一人も喜ばぬ者は無い、喜平次の高間太郎に就て一  
人々々に爲朝公へ見参いたされました、偕て其時白縫は髪を小  
くも束ね袈裟を解捨て喜びの宴を爰に開かれました夫婦主従  
座を正してズラリと居並び實に枯れたる枝に春の花咲き海月の  
骨に逢ふ必地が致しまして十年餘りの艱難辛苦も此一夜を以て  
忘れ去りました、偕て此儘で無事に夫婦が月日を送れば爲朝公も  
白縫姫も實に幸福でございます、新院の仰せの如く固より縁の  
薄きは夫婦又々如何なるお話しが湧て参りますか夫は次回に於  
て委しく申述べます。

先づ目出度く夫婦は再會を致しました、其次の日に喜平次高間太郎等爲朝の彦前に進み出で、すすには喜恐れながら味方の勇士未だ二三十人に過ぎず、雖も君既に爰に來ませし上からは百万騎の味方を得たるにも相勝つて居ります、近日夜に紛れて原田が城を乗り取り玉は九州の武士等致して手並の程は存じて居ります、且つ舊好の郷士農民に至るまで招かずとも馳せ集りませう斯くて菊池を攻め潰して肥前肥後を奪ひ多々羅大友を攻め落して國司を追出だし太宰府を根城と致しなば九州一擧して定むる事は掌を指すが如く然らば官軍は怖るゝに足らず平家も物の數ならず君父の爲には保元の冤を清め自己の爲には多年の鬱憤を晴すに足るべく疾く、事を起し玉へ、此時爲朝爲イヤ汝

等が云ふが如く今ま九州を攻め取らんは最と易し去りながら新院は既に隠れ玉へ崇徳院の一の宮重仁親王は出家し玉ふ今日なれば誰が爲に觸牛の角を顯はして國を争ひ多くの人命を奪ひ太平の世を亂すべきや平家は年來の仇なれども道を以て是を討つにあらざれば如何にして是を滅さん唯々時を待つに如かず吾は吾が榮利を圖りて無名の軍兵を動かし罪なき民を殺すには如かず、傍らに扣へたる白縫姫は御曹子の前に両手を突へ、自恐れながら妾は女子の身として言葉出すべき場合にははねと菊池原田は妾の父の仇であります工藤茂光は爲朝笹良江の仇なれば我君九州を掠取なさるまどなれば船にて伊豆の國に押渡り茂光等を奪つて東國に旗を揚げ玉は彼地は源氏累代の家人多く若し關の八州を打靡け玉は西の九ヶ國には勝つて居ります、是れでも無名の軍と思召すか、爲朝莞爾笑み玉ひ、爲其方の云ふ所

朝爲郎八西鎮

一應道理なれども菊池原田が忠國を撃ちたるは勅命を受けて私  
の遺恨を晴らしたのである故に兎に角公道に叶ふて居るものと  
云はざるべからず又た茂光が爲朝を嫉ましく思ひて官軍を請ひ  
受け爲頼笹良江鬼夜刃等是れに自殺すと雖も是れ又た茂光が私  
に征伐したるには非ず是に由つて吾れ茂光等を恨まず手を束ね  
て死を待ちしは朝廷を重んずるが故である唯惜むべきは清盛が  
暴悪ばかり君を苦しめ民を虐げ天は人と共に怒らざるはなく吾  
れ時節を待つて是を討たん必ず私怨を以て公道を忘るゝ事  
勿れ」と仰せありました白縫始め八丁礫の喜平次も此の傍一言  
に感服な致し一同誠にかゝる英雄も時に逢ひ玉はずして朝敵  
と呼ばるゝとは情け無きこと神も佛もなき世か」と頻りに歎息  
致して居りました白縫姫は笹良江が苦節貞魂の世にも稀なるを  
感服して措く能はざ遺品の佳と濁體をば祀堂に納めまして明暮

月張弓説椿

れに香花を手向け高僧に托して靈場たまげに葬らんと思ひ玉ひました  
が或夜の夢に人あつて告げて云ふには「妾の白骨を懸るに葬り  
玉はんと遊ばすは最と嬉しき限りなれを尙此所にありて一人の  
人を待ち居ります身今より五七年の間は此所に止め置き玉はれ」  
とありましたから白縫は夢醒めたる曉きに愈々不思議の思ひを  
なし此由を爲朝に告げ玉ふに爲朝は又た不思議に思召して爲  
ハテ夫れは誰れを待つのであらうか、然し彼れが云ふ儘に夫ち  
やア納めずには其儘にして置いたら好からう」とございますから  
白縫も寺へは葬むることを止めまして尙は祀堂の内に納めて置  
きました、惜て夫れから二三日立ちまして爲朝公は「自分は近頃  
此國へ来た時に阿蘇の神社へ參詣をしやうと思つて此山下を通  
り掛り測らずも高間磯萩に誘なはれて夫婦が再會することを得  
たのである其故明日は是非阿蘇の社へ參詣をしたく思ふ 自

ア、左様でございますか。阿蘇は妾の爲には氏神にて在せども此所へ山をもちを致しましてからと云ふものは未だ一度も参詣を致したことがございませぬ。丁度幸ひの折柄なれば妾も共にお連れ遊ばして下さいまし。爲ア、好いども一緒に行くが宜しい。と其の翌日に成りますると云ふと喜平次其池の勇士二十餘人を山に止め置きまして高間夫婦を召連れ主従僅かに四人で十三里を唯の一日で参られて阿蘇神社に参詣其夜は終夜お籠りをして次の日に夜をこめて木原山へ立歸りました。然る所が白縫は其月から懐胎の氣味でございまして見るものが止まりました。去れば喜ぶこと限りなく大切に致して居る内に其翌年の秋に至つて男子出生を致しました。此の子供が生れまする時に丹頂の老ひたる鶴屋の棟に止まりて啼くこと三聲にして南を差して飛去りました。實に是は目出度い前表でございますから喜ばぬ者は一人

も無く、然し外の者達には知らない、知つて居るのは高間夫婦に爲朝公に白縫姫に喜平次だけで誰も外の者にば知らしませぬ。ソコで子供衆の名前を舜天丸と呼んで喜平次を以て守り親として育て居りました。固より此の木原山と申しますのは益城郡の内、でございまして四方は見渡す限り野原でございまして去れば爲朝が此の山中にお出で遊ばすことは原田林の連中も少しも知らない。知つたら大變な騒ぎで直ぐに人数でも向けるのでげせうが知らない。と云ふものは好いもの。然るに唯水俣渡村と云ふ所の漁師だ。けはせうして知りましたか。折々土産を持つては二十里の道を遠しどもせず参つて昔しの恩を謝して居ります。去れば爲朝主従は斯の如く深山に居りましても海草海魚の類には少しも不自由をなさいません。傍ら郎黨は刀を横たへて耕し、戈を植へて草切り山畑を數多く切開いて衣食の類に當て居られたが去れば爲朝

朝爲郎八西鎮

此山に來玉ひし日よりと云ふものは空飛ぶ雁も碎けて尾上を過  
ぎらず是れ勇將の強弓に怖るゝものでございませうか今も尙ほ  
其通りでございます後世木原山を人呼んで雁回山とも申します  
雁が此山を通らうとして下を見て雁ヲ、怖エ……」と他の道  
を通つて行くといふ又た唯今でも山中に爲朝の築した礎の土臺  
などが残つて居るさうで然し口演者は實際參つて見たことはご  
さいませんがさう云ふ評判であります土地の人は爲朝の城跡と  
申して居りますがナニ城があつた譯じやア無い彼地にお遊びに  
成る方は必ず一遍は行つては覽なさいまし、夫は借て置きお話し  
變つて梁田の次郎時員は去年即ち嘉應二年四月の下旬に伊豆の  
下田の浦に有りました爲朝の音づれを待つ内朝稚は不思議にも  
紙齋に乗りながら無事に下田の浦へ落ち玉ひましたから深く喜  
んで合圖の狼煙を上げ直ぐ機朝稚を背負ひながら夜を日に次ぎ

椿説弓張月

まして下野の國へ立歸り主君足利義康に爲朝の返事を一任一什  
サ述べまして爲朝公から送り遣はされました鑰返しの短刀を  
進らせ朝稚をお連れ申したる次第を述べたから實に喜んで朝  
稚を傍近くへ呼び迎へ義康やがて對面をして爲朝の節義を歎賞  
し且つ朝稚の恙なく此所へ來れるを喜び義「アイヤ朝稚吾れは  
爲朝公の一族足利義康と云へる者此度家の臣時員を密かに大嶋  
に遣はして爲朝に乞ひ御身を迎ひ取りたるなり今日よりは義康  
の子御身も定めし承知あるべし如何に……」朝稚は始めて父の  
慈しみ深きを悟り得まして心の裡に思ふやう「斯ふ云ふことゝ  
知つたなら親兄弟に暇乞ひして參れば好かつたに、とは知らずし  
て只管に父の怒り甚だしく其罪の爲に紙齋に乗せられて大海の  
只中に落ちて死ぬることゝのみ思つて居たが、テモ借ても嬉しき  
は父の思召し勿躰なや少しの間だでもお恨みやしたる」と心の

内には思ひました。が少しも氣色には願はず。先づ義康の志しの  
厚きを御禮申上げて。禮正しく。父上に盡すが如く。でございます。  
から。義康は益々其の賢明なるを賞賛して。次の日。老臣を皆な呼集  
め。ました。る。ことにて。義倍。て。一同。知つて。の。通。り。吾。が。妻。は。世。を。早  
く。去。り。て。最。早。吾。れ。も。五。十。歳。に。近。け。れ。ど。も。次。々。子。供。と。て。は。一  
人。も。な。し。就。て。は。恥。か。し。な。が。ら。七。年。跡。の。秋。此。の。近。在。の。山。里。を。一。日  
狩。し。歩。き。て。腹。が。家。に。一。泊。な。し。其。家。の。娘。と。通。じ。て。男。の。子。を。生。ま。せ  
し。こ。と。あ。り。母。は。産。後。の。悪。き。爲。死。し。た。れ。ば。密。か。に。子。供。は。梁。田。時。員  
に。養。は。し。ハ。ヤ。今。年。は。七。歳。と。相。成。つ。た。さ。す。が。に。極。り。悪。る。け。れ。ば。其  
方。共。に。は。今。日。ま。で。知。ら。せ。ざ。り。し。が。吾。が。血。統。と。云。ふ。者。は。彼。よ。り。外  
一。人。も。な。し。由。つ。て。是。よ。り。其。の。子。供。を。以。て。吾。が。家。の。嫡。子。と。定。め。た  
く。此。儀。其。方。ど。も。は。如。何。思。ふ。ぞ。聞。い。て。一。同。大。い。に。喜。ん。だ。私。共  
年。來。君。に。御。嫡。子。な。さ。を。歎。き。居。り。ま。し。た。が。這。は。願。ふ。て。も。稀。な。る。幸

ひ。早。々。其。若。君。を。御。嫡。子。と。お。定。め。あ。る。こ。そ。目。出。度。き。限。り。去。ら。ば。後  
當。家。万。々。歳。で。ござ。る。と。申。上。げ。た。然。し。腹。の。中。ち。や。ア。皆。な。一。同。に  
家。の。親。玉。ば。かり。は。堅。物。だ。と。思。つ。て。居。た。が。此。道。ば。かり。は。別。な。も。の  
と。見。へ。る。と。目。曳。き。袖。曳。き。言。合。つ。て。居。り。ま。し。た。が。何。し。る。跡。次。ぎ  
が。出。來。た。の。で。ござ。い。ま。す。か。ら。實。に。喜。ん。だ。爰。に。於。て。義。康。は。吉。日。を  
撰。ん。で。朝。稚。家。嫡。の。披。露。に。及。び。家。臣。一。同。を。集。め。て。酒。宴。を。開。か。れ。る  
各。々。喜。び。を。述。べ。て。朝。稚。に。拜。謁。に。及。び。ま。し。た。が。斯。ふ。云。ふ。工。合。に。旨  
く。持。込。ん。だ。か。ら。誰。だ。つ。て。爲。朝。公。の。若。君。だ。と。思。ふ。者。は。一。人。も。無。い  
知。つ。て。居。る。の。は。主。人。と。義。康。ば。かり。然。る。所。其。の。爲。朝。は。茂。光。の。讒。奏  
に。由。つ。て。多。く。の。官。軍。を。差。向。け。ら。れ。罪。の。免。る。所。な。き。を。知。つ。て。妻  
子。を。刺。し。殺。し。館。に。火。を。掛。け。て。自。滅。し。玉。ひ。たり。と。云。ふ。天。下。の。噂。さ  
朝。稚。是。を。聞。き。ま。し。て。實。に。悲。し。み。密。か。に。父。を。祀。つ。て。暫。く。の。間。と。云  
ふ。も。の。は。人。に。も。逢。は。ず。是。に。由。つ。て。義。康。は。愈。々。朝。稚。を。憐。れ。に。思。召

朝爲郎八西鎮

し慈しみ愛て喪が果てましてからと云ふものは武門の表蔭たる  
弓馬槍劍の道は勿論のこと書を讀ませ學問の道を段々と教へま  
した尤も此頃槍は無かつたが兎も角も朝稚は一を聞いて十を知  
る位いの有様にて且つ親に仕へては孝心深く其内に段々と月日  
に關守りは無く安元二年に成つて十三歳の春を迎へましたモッ  
是れ物心も次第に付いて参りましては益々父母の横死を悲しむ  
の心深く密かに自分の思ふことを梁田に告げ彼を連れて足利の  
八幡の社に参籠を致し九牛一毛は假寐の夢に成りども實父實母  
の姿を現はし玉へと歸りつゝ暫しまどるひ夢の中に發に雷を結  
ひたる童子顯はれ朝稚に向つて云ふには「大神の詔りあり此幣  
を道の邊りに立てし道しるべとし頭の向きたる方に尋ね行かば  
父にこそは逢ふことば出來されども母には必ず逢ふことを得ん速  
かに思ひ立ち以へ」と説き示し件んの幣を渡すと見へたるが朝

椿説弓張月

稚俄かに驚き覺め那方此方を見返り玉へは幣は面のあたり膝の  
上に載せてございます最と不思議にも尊きことでございますか  
ら時員を呼び起して今ま夢に見たることを話し玉ふに時員も矢  
ッ張其逆りの夢を見たりと云ふソコで朝稚は信神の愚そかなら  
ざるを喜びまして深く神の冥助を感激し其幣を携へて館に歸  
り養父に事の由を物語り朝願くば暫く身の暇を賜りたし」と  
述ぶれば養父は彼の幣を見て且つ恐れみ且つ尊とみ養御身尙  
ほ少年なれども至孝に由つて斯る示現を蒙りたるものに相違な  
し然しながら此事を表向きにはなし難からん吾れは知らぬ顔を  
して居る程に世間には病氣と披露して時員唯一人を供に連れて  
密やかに旅立たれたが好からう誠心細きことであればあるけれど  
も神の導き玉ふ上からは無事に思ふこと叶ふならん」とお許し  
に成りましてございますから朝稚は實に喜んだ養父は一ト口の



短刀を興へ 義是れは其方が當家に参りし時爲朝主より吾に送  
りたる品なれば此度の餓別に参らするよしや笹良江とやらんが  
存命へ居るも今は互ひに面を忘れ居るならん然ふ云ふ時の便宜  
には此短刀に増す者はあるべからず疾く旅の仕度に及ばれ  
よと急に時員をお呼びに成りまして道中のごと何暮れと無く  
す付けまして路金も充分に渡しましたから朝稚に於ては養父の  
情けに涙を流し密かに旅の仕度を整ひまして身輕の扮装に笠を  
深く被り時員を召連れて足利の館を立出でましたが借て何方へ  
行つて好いやら少しも方角は無、ソコで幣を立つて試みると幣  
の頭は西の方に倒れましたから去らば此上は西國へ赴くべしと  
あつて仲仙道を次第に上ぼり是より後には岐が二ツにも三ツに  
も相成つて居りますから思ひ迷ふ時には彼の幣を立つて道しる  
べとなし山を越へ海を渡り日に歩み夜に泊まりだんくと行く

内に豊後と肥後の國界ひ宮原と云ふ田舎に参りました此地は豊  
後の直入郡に屬して肥後の阿蘇と界ひを交へ入江が所々にあ  
つて通れない所などがある去れば人家とては少しも無く憩ふべ  
き所も宿るべき家も無い爰に朝稚主従が大難に逢ふと云ふ一巻  
でございます

第二十四席

朝稚主従に於ては幣に導ひかれて遠く西國の果てに來たり豊後  
と肥後の國界ひ宮原と云ふ所まで來たごとは前回に於て述べま  
した今阿蘇の方へ行かんとする時員は急に腹が痛く成つて死  
にさうな鹽梅しき主人に後れぬやうと成可く歩いて居るが遅れ  
る豪敵を見て屈せざる英雄も病ひには勝てないもので然ふで  
さいませう未だ昔しから病ひに勝つた人は無い辨處だつて義經

朝爲郎八西鎮

だつて秀吉でも熊坂長絶だつて皆んな病氣の爲に死んで居る朝  
雅が餘り時員が遅く成るから振り返つて朝コリヤ時員何うし  
た顔の色が大層悪いが病氣でも出たか……時ハイ若君せうも  
今朝から變だと思つて居りましたが急に腹へ差込みが来て一歩  
も歩くことが出来ませぬ朝夫りやア困つたものだコレ  
所に木の根の大きき切つた臺がある是れへ腰を掛けて少し休ん  
で行つたら好からう、今薬を出して與へるから……ア、困つた  
事には此邊には家も無く湯を一杯貰ふ所が無いが……」と手を  
取つて木の根に腰を打ち掛けさせ自ら甲斐々々しく薬なを出  
して與へて居り頷りに背中なを擦つてやつて居りました時員  
は嬉し涙に暮れまして時旅なればこそ若君に草の褥を引かし  
奉りて手親ら藥を賜はることに冥加に餘りて最と有難く下野を出  
で玉ひしより露に宿り風に梳けづり長汀曲浦に雁が音を聞いて

橋説弓張月

は故郷へやらん玉章かど見なし夕を送る鐘の聲雨に曇りし遠樹  
の影鴈を断ち玉ふなるに孝行世に勝ぐれ玉ふからは是をも憂しと  
なし玉はす歩み勞れては青塚の下に立つみ道はるかにしては紅  
日の影を惜しみ出づるにも入るにも時員を唯杖ども柱ども頼み  
をばすに言甲斐なくも病み煩ひて却つて若君の勞はりを受け奉  
るこそ心苦しき至りでございます」と云ひながら強て歩かんと  
致しましたたが足進まず、ドウとばかりに草の中に倒れて息は唯引  
くばかりに相見へたり朝雅大きに驚き慌がはしく馳寄つて背を  
なでさすり朝コリヤ時員何うした心地は如何であるぞ若し其  
方に万一の事あられては此の身が知らぬ遠國で便りがなくなる  
確乎いたして呉れ時員ヨ……と云へども更に答へなし暫時  
は正氣を失つて居りました時員も心吾れに返つて自分の苦しさを  
より若君の心の内を思ひ遣れば其方が遙かに苦しく漸くに頭を

朝爲郎八西鎮

上げて 時若君 安心遊ばせ時員等でか此儘に死にませう水が  
一ト口呑みたけれど.....ア、イク苦しい.....其水も此邊には無  
く..... 朝チ、水が呑みたいか今呑まして遣はすから待て」と  
云つたが全く水が無い暫く思案に暮れて居たが忽ち懐中より一  
葉の紙を出しまして木の葉にたまつて居る水玉を多く紙に取  
つて是をキューと時員の口へ絞り入れました智のある子供は違  
つたもので時員はゴックリ一口 時ア、是れが末期の水なる  
か」と心の内には思ひました口には左様なことは云はず強々  
益々苦しみは増すばかりであります然る所へ向ふから此所へス  
タ、來掛りましたのは楫の端に大きな魚籠を網の縄で結び下  
げたるを肩に致しまして山刀を腰に帯びて居る是は蜘蛛の渦丸  
と云ふ前に述べたる曲者でございます何うして此所へ来たかと  
云ふと去ぬる嘉應二年の秋讃岐の國逢日ヶ浦に於て大宮司季範

椿説弓張月

の船に圍入致しました節多くの同類は爲朝の爲に殺し盡され其  
身ばかりは浪の底を潜つて漸く免れ久しく西海道を口付い  
て歩いて居たが借て同類が無ければ悪事も出来ず是れと云ふこ  
ともし出し得ず假りに漁師と成りましたが至つて悪い奴でござ  
いますから蛆虫の如くに世間の人からは嫌われて交際する人も無  
い今日も今日とて此の程近き海岸に漁を致したが獲物が無く日  
もハヤ西山に傾きましたから仕事を仕舞つて今此所までスタ、  
、やつて来たスルと時員が病ひに倒れ又朝稚の美少年なるを見  
てムラ、と例の不良らぬ心を起し 過ハ、マナ此りやア唯の  
旅人ぢやア無エ思ふに大家の分散か何にかで故郷を逐電し主従  
で斯んなやつ、しい旅をして居るんだらうシテ見れば扮装は  
立派じやア無エが懐中にはタシマリと黄金花咲く山吹色従をし  
て居る奴は強さうだがナニ病氣に掛つて居りやア殺すのは譯は

無二彼奴を片附けて路金を奪ひ那の美少年を何所か大寺の稚に  
でも買れば好い金に成る左すれば當分好い正月が出来ると云ふ  
ものだ然ふだ〜と腹の内に考へまして心密かに笑みを合み  
態と少し行き過ぎましたが戻つて来て 湯ヤアお困りでござい  
ませう夫でなくも旅と云ふものは心細きものであるのに病氣  
ぢやアお前さんも嘔お驚きでせう私の家は直き此の先の里の  
一軒家常日頃から急病には好い薬がありまして多くの人に施し  
て見たが其利目と云ふものは神様のやうで是れを差上げて見た  
いから若し貴郎は私の家へ一緒ににお出でなさい差上げるから  
「朝雅是れを聞いて大いに喜び 朝誠に辱け無いと云うか某し  
がお供をする程に一緒に連れて参つて呉れるやうに……」此時  
時員頭を上げ「イヤ〜若君夫れは行けませぬモウ少し是れに  
休んで居りますれば心持ちも直ります見も知らぬ人に伴なはれ

玉ふこと宜しからず」流石は年の功、湯丸カラ〜と打笑つて  
湯アハ、何んで然んなに人を疑ひ玉ふや私の家は八九町よ  
りはございませぬ諺に旅は道連れ世は情けと云ふではござらん  
か私が忙がしい身軀でなくば直ぐにも持つて来て差上げるんで  
グスが家には年取つたる母と少さい小供がございまして家へ歸  
つたらモウ容易に外出が出来ない身軀で其故お連れずして差上  
げたいと云ふのでグスお疑ひなされば夫までの話し、ア、馬鹿  
々々しい暮るゝに程も無き秋の日を慮々ど此所にあつたら猛  
獸山賊の愁ひに逢はう由なき人に構つて大きに暇を潰したりマ  
ア其所で悠然苦しんでお出でなさい」と少し中ッ腹に成つて行  
き過ぎんとした朝雅は聲を潜めて時員に仰せあるには 朝彼の  
男の面魂しい誠不良ぬやうであるが然し人間と云ふものは顔  
の美惡に由つて定められるものでは無い若し彼家に至つて薬を

得て其方の病ひが直ぐ治らば此上の仕合はせあるべからず思ふに是は氏神の冥助にて去る妙薬を授け玉ふことならんイデヤ遊くは行かじ跡追馳けて……」と其儘曲者の跡を慕ひました跡に殘つた時員は苦しき中にも心配でありますから時ア一イヤ若君々々と呼べど返せどハヤ後姿さへ見へずになりました時途々マア行つてお仕舞なすつたが間違ひが無けりやア好いけれども……」と只管お歸りを待ちました内に秋の日はドツプリと暮れて草葉にすだく虫の音も憐れに山嵐しの風は肌寒く病次第に暮つて来て段々と苦しく成つて來るが朝稚の身の内が染じられますから覺束無げに伸び上つて時那の男が云ふ如く八九町ならモウお歸りに成る時分だが未だにお歸りが無い何うなすつたんであらうか」と刀を杖に身を起して四路めく足を踐占めながら二三歩四五歩は進みましたがドウと草の中へ倒れた時後よ

り突然突き出だしたる大刀時員の背中を健かに切付けました時「アッ」と云ひつゝ見返れば蛛手の濁丸稻叢より半身を顯はしたることにしてカラ〜と冷笑ひ 濁ヤイ意氣地の無エ野郎ぢやア無いか去らば臨終の思ひ出で吾が目的を説き知らせん苦しからうが能く聞け先刻妙薬をやらうと云つたのも又た家には老母や子供があるよ云つたのも皆んな嘘ッ八だ欺して汝エを打殺し持つて居る路金は殘ら老此方へ巻上げて又彼の美少年を賣る時は久しく見ねへタマンマリとした金に有附き好い正月をしやうと表に情けを施して少年を連れ中途に待伏せして矢庭に猿轡をはまし魚籠の中へ打込んで密かに此所へ擔いで來た口の網は堅くしてあるから生洲の魚と同じこと中から出ることも出來ねんだ外ながら暇乞をして成佛しろ」と嘲り笑ひながら彼の魚籠を稻叢の中から此方へ引出だせば時員は借てはとばかり齒を食綴

朝爲郎八西鎮

りまして眼を怒らし 時病氣の爲に自由ならず 汝等の爲に敢て  
く討たる、ばかりで無く主君を生擒にせらるゝとは斯くまで武  
運に盡きたるか、ヨシヤ此野の露と消ゆるとも一太刀恨まである  
べきか小盗人覺悟をしろ」と云ひながら吾を忘れて刀をガラリ  
とばかり振り放ち切つて掛れば彼は身を覆したることにして日  
口と盗路めきドウと倒るゝ背中に早くも足を掛け 渦ヤイ  
はれて手下を多く従へ海上を横行して居た盗賊だ、今こそ同類を  
尖つて斯ふやつて見と影る無エとは云ふもの、汝エ位エを殺す  
こるは人形を相手にするやうなものイデ此世の暇を取らするに  
由つて覺悟をしろ」と云ひながら刀の柄を取り直して時員の咽  
喉笛を拳も取れど貫けば鮮血は再び迸つて手足を聞いてあはれ  
此世を去りました實に不惑なお話してありまして態々此所へ死

月張弓説椿

に、來ましたやうなもの、其時渦丸は刀の血を拭ひホツと云ふ息  
を吐きまして 渦エ、思つたよりは意氣地の無エ奴ドレ久し振  
りて山吹色の顔を見やうかい」と云ひながら時員の懐中に手を  
差し入れ路金を奪ひ取り夫から衣服まで其儘剝がれました而して  
魚籠の方に向つて云ふには 渦少年必ず驚くことは無エお前は  
殺さうとは云はねエのだ、何所かの大寺へ賣つて金にでもするだ  
けの事ア、一近頃稀れな大獲物で金魚と人魚と両方を一緒に得  
たやうなもの仕合はせよし」と笑ひながら顔を魚籠を背負ひつ  
ゝ小唄を唄ひながら歸り行く大膽不敵ア、憐れなるかな朝稚は  
先きに渦丸に誑かされて時員が病ひを救はんと云ふ一心より只  
管渦丸を追馳け玉ひましたが渦丸は中途に待伏せをして矢庭に  
朝稚を縛り上げ口には猿轡と云ふものを箆めまして魚籠の中に  
投げ入れましたたが綱を確乎と結び止めてあるから出ることが出

朝爲郎八西鎮

來ない是を擔いでドン  
員を殺して路金から一切の物を奪ひ取つて仕舞つた朝雅は籠の  
目から其の有様を見亦た其聲も聞まして實に口惜いとは思召し  
ました何が何うする事も出来ない再び渦丸の背中に擔がれて行き  
ましたか中でもがいて居た爲か繩が悠んで來ましたから朝  
リヤ神の助けか」と振り解き腰に帯びて居ります短刀を抜くが  
早い加籠越しに渦丸の背中にグサと貫きました  
びながら倒るゝ所を朝雅得たりと刀を持つて上の綱を断り破つ  
て踊り入り猿轡を金ぐり捨て突然渦丸の轡を掴んで刀を胸に當  
てて朝コリヤ盗賊窮鳥懐中に入る時は獵者も是れを殺さず然る  
と汝人の病み伏したるを見て奸惡を縦まにし自ら名乗りて其の  
不仁に誇ると云ふは實に憎むべき曲者なり我は不意に縛められ  
ずば争でか斯る能の中に入れらるべきや時員苦し病氣ならせん

月張弓説椿

ば何條汝に切らるべき天罰思ひ知るべし」と罵りながら二太  
刀三太刀胸先きを抉りましたから何に堪りませう流石の渦丸も  
其儘息は絶へたる様子去れば朝雅は時員の爲に仇を報じ立ち所  
に恨みは晴らしたやうなもの、借は日はトツプリと暮れまして  
西へ行つて好いか東へ參つて宜しいか少しも方角が付きませぬ  
併し死骸を那の儘に致して置けば今夜の内に獸の飼と成るは知  
れ切つたことで漸うの事で其場所まで參り死骸を抱き起して漸  
くに魚籠の中に昇き入れ借て懐中から紙を出だし此由を書附け  
にしやうと思つたが前ア上げる通り眞ッ間で筆の運びも定かな  
らず折しも不思議なる哉一團の鬼火叢の中よりバツと燃へ上  
り手を元を照らした秋の螢か鬼火かと怪まれましたが然んな事に  
腕を潰す小膽な少年で無い平氣で是れ幸ひと云ふ風で墨斗の筆  
を染めてサヤくと

朝爲郎八西嶺

同行二人の旅人今月今夜此所に於て蜘蛛手の渦丸と云へる賊に  
逢ひ供を撃たれたれば立所に渦丸を撃ちて仇を復せり然れど  
も里遠くして何れに訴ふる事を知らずあはれ吾が爲に供なる  
男の亡骸を葬り玉ひぬ  
斯ふ書附けまして魚籠の繩に結び付け渦丸の懐中を探つて持つ  
て参りました路金の内を四両魚籠の中に残して時員の埋葬料と  
して借て何れを差して行かば今宵一夜の宿りがあらんかど持つ  
て参りました幣を尋ねて見たが見へない爰に至つて朝雅は益々  
仰天致しまして朝ア、モッ駄目だ時員が横死致したのさへ心  
細き限りであるのに今又大切の幣を失つて仕舞つた日には行  
くも歸るも出来兼ねるコリヤ何んどしたらば好からん」と茫然  
として立往生を致して居た時に彼の鬼火は頻りに高く上がり低  
く照らして何んだが自分を導いて呉れるやうに思はれましたか

月張弓説椿

ら朝雅は「ハッ」と悟つて朝ハ、ア時員此所に死して魂い  
れを尊き呉れると相見へたり世にも稀なる忠義去らば進退を彼  
れに任かさん」と獨り言を云ひながら鬼火に従つて段々と参り  
ました勢れも忘れて次第に行く内に夜もほの／＼と明け放れた  
る頃名も知らぬ山の中頃に出ました、モッ流石に勞れて仕舞つて  
一歩も前には出ないが遠りを見た所で休まして貰ふべき家も無  
い不圖向ふを見るとき峠の上に煙りがポーと立つて家がある様子  
朝ア、然らば那れに至つて食事を作さして貰はん」と一本道を  
漸く其の所まで来て見ると果せる哉一つの山奥がある、斯んな  
深山には似もやらず餘程身分ある人の住ひと相見へまして普通  
の家の様子とは違つて居ります、裏門の方へ這入つて見ると誰も  
居りませんから門をズイと這入つて見ると右手の方に庭があり  
まして秋の草木が今を盛りと咲き亂れて松の青さと相対し其の



朝爲郎八西鎖

風景得も云はれぬ結廻したる生垣の木の間に小鳥の囀る  
醉が致して秋の氣色を顯はし盡くく見入る折節向ふの木  
の間に三十位いに相見ゆる美人が六ツか七つの男の子を相  
に木の實を拾つて居ります抑々此所は何れであるかと云へば  
前の國益城郡木原山の山中にして木の實を拾つて居ります  
と云ふのは白縫姫男の童は舜天丸でございませぬ爲朝此山に止  
りてよりハヤ七年に及び舜天丸に於ては六歳と相成りました  
長するに従つて流石は爲朝の子息其伶俐なること大人も及ばぬ  
位い世が世であれば源家の嫡流にして時めく身の上でございま  
すが斯る山中に乳母もなく母の白縫に養なはれて居りました今  
日しも爲朝は宿願の事ありて喜平次を召連れて阿蘇の社に參詣  
に參られましたたが未だ歸つて來ず郎黨は山田の早稻を刈入れん  
とあつて皆な野良に行き由つて白縫親子は退屈の餘り庭に立出

月張弓説椿

で木の實を拾つて居りましたのだが今測らずも朝雅は庭口に巡  
り入つて是れぞ家の主人と見て取りましたから笠を取つて白縫  
の傍に進み先づ一體を致しまして朝私に東より遙々父母を尋  
ねて傍地まで參つたものでございませぬ然るに昨夜召連れて  
郎黨にはぐれて此山に迷ひ入り誠に勞れて一歩も出でず早再  
び麓に下たる勇氣もございませぬ願くは少々様子の端を拜借し  
て休みすしたく此儀御許し下されば有難き仕合はせに存じます  
る「白縫是を聞いて盡くく朝雅の面を凝視して居りましたが  
自道は不思議なる事をいはるものかな此山は昔しより神の諒  
み玉ふ爲め樵夫も此所までは登り來ず然るを御身唯一人にて是  
まで迷ひ來りしとは心得難く固より此家は仔細ありて人に訪は  
るゝ事を好まず主人は唯今他に行きて不在なれば妾が心一つに  
てお休みあれども言ひ難し抑も東國とは何所より來玉ひたるか

名乗り玉へ」と膝進ませた借て愛に於て朝稚が如何なる事を  
り出だすか、又た白縫が吾が腹違ひの子供と聞いてどう云ふ取扱  
ひに及ばれるか此所へ爲朝が歸つて来て如何なる事に成行くか  
いよ／＼弓張月の大眼目と相成ります

第二十五席

エ、朝稚丸が肥前の國益城郡木原山に至つて自分の父の本妻た  
る白縫姫に始めて面會を致した所までは前に委しく申述べまし  
たが借て朝稚は白縫に國郷里を問はれまして今は隠すによすが  
も無く朝左様なれば申上げます私は東路は下野の國足利の者  
でございまして……然し其所にて生れたる者にはあらざ足利に  
養はれたるは父の親戚の許でありましてハヤ養ひを受けて既に  
七年物に少しの不足と云ふはあらざれども唯悲しきは七年以前

親兄弟は敢なくも非命の最期を遂げまして此世を去りたる由を  
子供心に承はり戀しきは誠の父母又は兄弟どうか假寝の夢にな  
りども今一度父母に逢はし玉へと明け暮れに氏神に祈り奉りし  
甲斐ありて近頃不思議の示現を蒙り養ひ親の許しを受けて家の  
郎黨梁田某しと云ふ者一人を伴ひ連れ忍びやかに旅立ちまして  
西海道を此の國までは来たれども尋ぬる人には逢ひもせず昨夜  
宮原とすす所にて四國の強盗蜘蛛手の淵丸とやら云ふ者の爲めに  
召連れたる男は殺され其仇討は致しましたか既に便りに思ふ郎  
黨を失ひましては心細きこと限りなく途方に暮れて居りました  
が怪しき火に導かれまして思はず此の山に迷ひ入り夜も明け日  
も高く登りたれど何にやら夢の心地して少しも譯が分りませぬ  
我身の憐れを傍賢察下されたし」と思はず涙をホロリと落し鼻  
打ちかんで差附向いたるいちらしさ他の見る目も憐れでありま

朝爲郎八西鎮

す、白縫姫に於ては話しの度毎胸にヤクリ〜と思ひ當たり、自  
何うやら良人の物語りに聞く朝稚のやうではあるが……」と口  
に出しては申しませぬが胸の内にも早くも考へた、然し態とよそ  
しく致しまして、自夫れはマア海山万里を遠しとせず親兄弟  
に巡り合はんと遙る、此の西海道の果て迄尋ね來るといふ  
は世にも稀なる孝心なれど、若し其父母が世を去り玉ふたる跡と  
すれば何うして夫れに巡り合ふことが出来ませうぞシテ御身の  
父母と云ふは何んといふお名前の方でありますか、苦しからずば  
明かしてたべ、朝稚は怒じ隠し立てする場合にあらずと考へま  
したに由つて送りを見廻はし、膝を低くし、朝何にお隠し申し  
ませう、私の父といふは素と此の國に生立ちまして、前きには九州  
を管領し、其の勢ひは都までも震ひて時めきました、が保元の亂に  
伊豆の大嶋に流され、ました八郎爲朝でございます、自ハッ……」

月張弓説椿

と思つたが流石は武家の娘の白縫悟られるやうな驚き方はしな  
い、スルと傍らから母白縫の袂を引きました、舜天丸が、舜母ア  
夫れは父上のお名前ではございませんか、其口押へた白縫が  
自、これにはマア和郎としたことが何に云やる八郎と云ふ人は世  
の中には何人もある餘計なことをすすもので、はありませぬ、と  
叱り退けたる胸の苦しさを、其様子を悟られまじと微笑みながら再  
び朝稚に向ひまして、自ヲ、夫れでは此邊でも名の高い八郎御  
曹子の忘れ遣子で在るかや、女だてらに能くは知らねど、那の君  
は信義を守る誠の武士と聞及ぶ、若し假りに此近き邊に無事でお  
出で遊ばしたにもせよ、一度棄てたる其子には名乗り玉ふことは  
なさいませぬ、と云ふもの、貴郎が遙々と斯様な果ての國々  
まで尋ね巡ることを聞き玉ひなば、心は猛き英雄も争で不慙と思  
召ぬ、とございませう、マ左様なことは妾の知つたことならぬ

す、白縫姫に於ては話しの度毎胸にヤクリ〜と思ひ當たり、何うやら良人の物語りに聞く朝稚のやうではあるが……」と、口に出しては言ひませぬが胸の内は早くも考へた然し態とよそよしく致しまして、白夫れはマア海山万里を遠しとせず親兄弟に巡り合はんと遊る、此の西海道の果て迄尋ね來るといふは世にも稀なる孝心なれど、若し其父母が世を去り玉ふたる跡とすれば何うして夫れに巡り合ふことが出来ませうぞシテ御身の父母と云ふは何んといふお名前の方でありますか、苦しからずば明かしてたべ、朝稚は怒じ隠し立てする場合にあらすど考へましたに由つて邊りを見廻はし聲を低くし、朝何にお隠し申しませう、私の父といふは素と此の國に生立ちまして前には九州を管領し其の勢ひは都までも震ひて時めきました、が保元の亂に伊豆の大嶋に流されました八郎爲朝でございます、白ハ……」

と思つたが流石は武家の娘の白縫悟られるやうな驚き方はしない、スルど傍らから母白縫の袂を引きました、舜天丸が「愛母ア様夫れは父上のお名前ではございせんか」其口押へた白縫が「自、これはマア和郎としたことが何に云やる八郎と云ふ人は世の中には何人もある餘計なことをすすものではありませぬ」と叱り退けたる胸の苦しさを其様子を悟られまじと微笑みながら再び朝稚に向ひまして「白ヲ、夫れでは此邊でも名の高い八郎御曹子の忘れ遺子で在るかや女だてらに能くは知らぬと那の君は信義を守る誠の武士と聞及ぶ、若し假りに此近き邊に無事でお出で遊ばしたにもせよ一度棄てたる其子には名乗り玉ふことばなさいますまい、とは云ふもの、貴郎が遠々と斯様な果ての國々まで尋ね巡ることを聞き玉ひなば心は猛き英雄も争で不感と思召しぬ、このごありませう、マ左様なことは妾の知つたことならぬ」